

I

<1106> **Ibi debet quis puniri, ubi quis deliquit.** [Quis dēbet pūnīrī ibī, ubī quis dēliquit.] (*Ulp.D.48,2,7,4*) 「ある人が犯罪を犯したところで、[その] ある人は罰せられるべきである。」<deliquit>…<delinquo> [犯罪を犯す] の 囹圄。※<ibi ~, ubi>は相関語である。<quis>は<aliquis>のかわりに用いられている。「辞書」の<quis>を参照。「代用型としての<quis>」→「索引」。<579>・<3249>。「罪（罪過）と罰（刑罰）」→「索引」、「タテマエ（罪）とホンネ（罰）」→「索引」。

<1107> **Ibi dos esse debet, ubi onera matrimonii sunt.** [Dōs dēbet esse ibī, ubī onera mātirimōniī sunt.] (*Paul.D.2,4,5*) 「婚姻の負担が存在するところに、嫁資が存在するべきである。」<dos>…「嫁質」、<onera>…<onus> [負担] の 囹圄、<matrimonii>…<matrimonium> [婚姻] の 囹圄。※<ibi ~, ubi>は相関語である。嫁資（dos）というのは、女の家側の（家長）が、婚姻のさいに、社会的な慣行にしたがって、いわば贈与として男の家側に持参する金銭その他のものごとである。婚姻にあたって妻が婚家の家長である夫または家長の家長権に服属する場合には、その婦女は実家における相続権を失ってしまうので、その代償として、その婦女の家長が財産をもたせてやるのが、本来の意味であった。ところが、婦女が、その家長権に服属せず、従前のように実家の家長の家長権に服したままの状態での婚姻に入る場合は、夫婦が所属する家をべつにしているのに、夫の側だけが婚姻費用（生活費）を負担する、という関係が生ずるので、嫁資は「相続分の前渡し」という、もとの意味をいくらか失なっていて、その「婚姻費用の分担」、という意味をもつようになった。これがこの格言の趣旨である。最初、嫁資は完全に夫の所有に帰した。<691bis>「嫁資の状況は永久的である。（Dotis causa perpetua est.）」(*Paul.D.23,3,1*) という命題がこのことを示す。しかし、共和政の終わりころから離婚が日常茶飯事となりはじめると、そのような取扱いは、離婚後に、嫁資を用意したうえで、再婚しようとする婦女にとってきわめて不利であったし、また、夫が婚姻中に死亡した場合にも、妻が夫の家での相続の上で法上も事実上も優遇されていなかったためもあって、嫁資が、婚姻解消後婦女やその設定者に返還されるように法規によって配慮され、その結果、嫁資は、夫の利得である、というよりも、むしろ、婚姻継続中に夫に信託されている財産にすぎない、と考えられるようになった。そして、その返還を安全・円滑に行なうために何種類もの巧妙な法技術が何世紀間にもわたって考案されている。妻の法律上の地位が劣悪であったにもかかわらず、

婦女の立場が社会的にはかならずしも劣悪でなかったのは、実質的にはこの嫁資という制度の支えによるところが多い。

<1108> **Ibi semper debet fieri triatio, ubi juratores meliorem possunt habere notitiam.** [Triātiō dēbet fierī semper ibī, ubī jūrātōrēs possunt habēre nōtitiam meliōrem.] (Bulwer's Case, 7 Co. Rep.1b)「審理は、常に、陪審員がいつそう良い情報を持つことが出来るところで、なされるべきである。」<triatio>…「審理」、<juratores>…<jurator> [陪審員] の 覆 罫、<notitiam>…<notitia> [知識] の 罫 罫。※<ibi ~, ubi>は相関語である。

<1109> **Ibi sit poena, ubi et noxa.** [Poena sit ibī, ubī et noxa.] (C.J.9,47,22pr.)「被害も [存在する] ところで、罰が存在するよう。」<noxa>…「罰」。※<ibi ~, ubi>は相関語である。

<1110> **Ibi valet populus, ubi leges valent.** [Populus valet ibī, ubī lēgēs valent.] (Syr.)「法律 (法) が力を持つところで、国民が力を持つ。」<populus>…「国民」。※<ibi ~, ubi>は相関語である。

<1111> **Id certum est quod certum reddi potest; sed id magis certum est quod de semet ipso est certum.** [Id, quod potest reddī certum, est certum; sed, id, quod est certum dē sēmet ipso, est certum magis.] (Broom,Max.422; 9 Co.Rep.47a; Co.Litt.96a)「確定的な [もの] とされることが可能なものは、確定的である。しかし、それ自体に依って [すでに] 確定的であるものの方が、むしろ確定的である。」<reddi>…<reddo> [~とする] の 罫 罫 罫。

<1112> **Id perfectum est quod ex omnibus suis partibus constat; et nihil perfectum est dum aliquid restat agendum.** [Id, quod cōnstat ex partibus omnibus suis, est perfectum; et nihil est perfectum, dum aliquid rēstat agendum.] (Gai.D.50,17,39,1; 9 Co.Rep.9)「そのすべての部分において確定しているものが、完成された状態にある。他方で、なにかがなされる必要のある [こと] として残っている限り、いかなるものも完成された状態にはない。」<partibus>…<pars> [部分] の 覆 罫、<perfectum>…<perfectus> [完成された] の 罫 罫 罫、<restat>…<resto> [とどまる] の 罫 罫 罫、<agendum>…<ago> [なす] の 罫 罫 <agendus> [なされるべき [である]] の 罫 罫 罫 (名略)。※主格形の 罫 罫 は、対格形のその場合と一部同じように、「~されるべき [である]」という、義務などのニュアンスをもっている (『新ラテン文法』§591、他の格の場合、§599)。罫 罫 →<1>。<agendum>と<aliquid>は同格のような関係にたつ。

<1113> **Id possumus quod de jure possumus.** [Possumus id, quod de jure possumus.]

od possumus dē jūre.] (Lane,116 ; Tray.Lat.Max.237)「私たちは私たちが法上 [なすことが] 出来ること [だけ] を、[なすことが] 出来る。」

<1114> **Id, quod actum fuit, sequi debemus.** [Dēbēmus sequī id, quod fuit āctum.]「私たちは意図されたことに従うべきである。」※<quod>などの関係代名詞と、その先行詞<id>などが、このように接近したかたちで文中にはっきりと見える命題例は、法律ラテン語ではあまり多くない。ここに見られるような単数の対格（主格も同形）でさえも省略されてしまうからである。<id>は、この場合は、<is> [それ・これ] の単数中性主格で、英語の<it which>中の先行詞<it>に相当する指示代名詞であるが（<which>は<quod>と対応している）、ラテン語では、三人称については、近代欧米語の場合とはちがって、人称代名詞がないので、この指示代名詞がそのかわりをしている。ところで、英語の<that>とか<this>とかがいわば形容詞のようにして名詞にかかるのと同じように、ラテン語の<is>などは、名詞を修飾することもある。<ea civitas>なら、「その国家」というようにである（<ea>は、その<is>の単数女性主格で、女性名詞の<civitas> [国家] にかかる）。その点で、英語の<he・she・it>などが代名詞としてしか用いられないのとは異なる。<1197>

<1115> **Id quod commune est nostrum esse dicitur.** [Id, quod est commūne, dīcitur esse nostrum.]「共通であるものは私たちのものである、と言われる。」※主格不定法の構文が見える。主語の<id>は、<dicitur>と<esse>の双方にかかる。㊦㊧→<98>

<1116> **Id, quod interest, non solum ex damno dato constat, sed etiam ex lucro cessante.** [Id, quod interest, cōnstat ex damnō datō nōn sōlum, sed etiam ex lucrō cēssante.] (C.J.7,47,1,2)「利害関係のあるもの（額）は、単に加えられた損害だけからではなくて、失なわれる利益からさえも構成される。」<cessante>…<cesso> [さしひかえる] の㊦㊧<cessans>の㊨㊩㊪。※<non solum ~ sed etiam>は相関語である。「利益（利得）と損失（損害・不利益・危険・負担・責）」→「索引」、「タテマエ（失われる利益）とホンネ（加えられた損害）」→「索引」。

<1116bis> **Id quod invicem debetur ipso jure compensatur.** [Id, quod dēbētur invicem, compēnsātur jūre ipsō.]「相互に負われるものは法上当然に相殺される。」<compensatur>…<compenso> [相殺する] の㊦㊧㊨㊩。

<1117> **Id quod nostrum est sine facto nostro ad alium transferri non potest.** [Id, quod est nostrum, nōn potest trānsferri ad alium sine factō nostrō.] (Pomp.D.50,17,11)「私たちのものであるものは、私たちの行為なしには、他[人]へと移転されることは出来ない。」

<transferri>…<transfero> [移転する] の ㊦㊧㊨。

<1117bis> **Id quod quis pro derelicto habet, continuo meum fit.** [Id, quod quis habet prō dērelictō, fit meum continuō.] 「ある人が放棄された[もの]と扱っているものは、直ちに私の[もの]と成る。」<derelicto>…<derelinquo> [放棄する] の ㊩㊪<derelictus>の ㊫㊬㊭ (名略)。※「代用型としての<quis>」→「索引」

<1118> **Id solum nostrum quod debitis deductis nostrum est.** [Id, quod est nostrum, dēbitīs dēductīs, solum nostrum.] (*Jav.D.* 49,14,11; *Tray.Lat.Max.*227) 「債務が控除された後において私たちのものであるものだけが、私たちのもの[である]。」<deductis>…<deduco> [ひく] の ㊮㊯<deductus>の ㊰㊱㊲。※絶対的奪格の構文が見える。「名詞 (debitis) プラス完了分詞 (deductis)」型で、その意味は「～すると」である。本動詞が省略されている。㊳㊴→<1>

<1119> **Id tantum possumus quod de jure possumus.** [Possumus id, quod possumus dē jūre, tantum.] (*Tray.Lat.Max.*237) 「私たちは、法上[なすことが]出来ることだけを[なす]ことが出来る。」

<1120> **Idem agens et patiens esse non potest.** [Idem nōn potest esse agēns et patiēns.] (*Jenk.Cent.*40) 「同一[人]が、[同時に]行動する側の人と行動[の効果]を受けとめる側の[人]であることは出来ない。」<agens>…<ago> [行なう] の見出し語 ㊵㊶ (名略)、<patiens>… ㊷<patior> [うける] の見出し語 ㊸㊹ (名略)。

<1121> **Idem delictum non debet bis puniri.** [Dēlictum idem nōn dēbet pūnīrī bis.] (*Paul.D.*48,2,14) 「同一の犯罪は再度罰せられるべきではない。」

<1122> **Idem duo quum faciunt, non tamen est idem.** [Nōn est idem tamen, quum duo faciunt idem.] (*Syr.*344) 「二[人]が同一の[こと]を行なうときで[も]、やはりそれは同一の[こと]ではない。」※<quum>は<cum>のことである。

<1123> **Idem est facere, et nolle prohibere cum possis; et qui non prohibet, cum prohibere possit, in culpa est.** [Facere, et nolle prohibēre, cum possis, est idem; et, quī nōn prohibet, cum possit prohibēre, est in culpā.] (3 *Co.Inst.*158) 「なすことと、君が[禁止]出来るときに禁止しようとしなないことは、同じである。そして、禁止することが出来るときに禁止しない[人は]、過失の中に在る。」

<1124> **Idem est nihil dicere, et insufficienter dicere.** [Dicere nihil et dicere insufficienter est idem.] (2 *Co.Inst.*178) 「なにも言わないことと不十分に言うことは、同じである。」

<1125> **Idem est non esse et non apparere.** [Nōn esse et nōn appārere est idem.] (Broom,Max.165 ; Jenk.Cent.207)「存在しないことと明らかとならないことは、同じである。」<apparere>…<appareo> [明らかとなる] の ㊦。※「タテマエ (存在しない) とホンネ (明らかとならない)」→「索引」。<1316>

<1126> **Idem est non esse et non significari.** [Nōn esse et nōn significārī est idem.]「存在しないことと示されないことは、同じである。」<significari>…<significo> [示す] の ㊦。※「タテマエ (存在しない) とホンネ (示されない)」→「索引」

<1127> **Idem est non facere et non legitime facere.** [Nōn face re et facere nōn lēgitimē est idem.] (Ulp.D.24,1,35)「なさないことと適法にはなさないことは、同じである。」

<1128> **Idem est non probari et non esse; non deficit jus, sed probatio.** [Nōn probārī et nōn esse est idem; jūs nōn dēficit, sed probātiō.] (Paul.D.26,2,30)「証明されないことと存在しないことは、同じである。法が欠けているのではなく、証明が [欠けている]。」「<deficit>…<deficio> [おとろえる] の ㊦。※<non ~ sed>は相関語である。「タテマエ (存在しない) とホンネ (証明されない)」→「索引」、 「タテマエ (法) とホンネ (証明)」→「索引」。

<1129> **Idem est scire aut scire debere aut potuisse.** [Scīre a ut dēbere scīre aut potuisse est idem.]「知ることと、あるいは知るべきであること、あるいは [知ることが] 出来たことは、同じである。」<scire>…<scio> [知る] の ㊦。※「タテマエ (知るべきである・知ることができる) とホンネ (知る)」→「索引」

<1130> **Idem est solvere ac compensare.** [Solvere ac compēnsā re est idem.] (Pomp.D.20,4,41)「弁済することと相殺することは、同じである。」<compensare>…<compenso> [相殺する] の ㊦。

<1131> **Idem semper antecedenti proximo refertur.** [Idem refe rtur antecēdentī proximō semper.] (Co.Litt.20b,385)「同じ [こと] は、常に、最も近い先行 [命題] に関連づけられる。」<refertur>…<refer o> [むける] の ㊦。<antecedenti>…<antecedo> [先に行く] の ㊦。<antecedens>の ㊦ (名略)。

<1132> **Identitas vera colligitur ex multitudine signorum.** [Id entitās vēra colligitur ex multītūdine signōrum.] (Bac.Max.29)「真の同一性は徴候の多さから示される。」<identitas>…「同一性」、<vera>…<verus> [真の] の ㊦。<colligitur>…<colligo> [手にいれる] の ㊦。<multitudine>…<multitudo> [多数さ] の ㊦。<signorum>

…<signum> [徴候] の 襷 屬。

<1133> **Ignoranti non currit tempus.** [Tempus nōn currit ignōrantī.] 「時は不知の [人] には進行しない。」<currit>…<curro> [はしる] の 覩 三 罍、<ignoranti>…<ignoro> [知らない] の 覩 四 <ignorans> の 罍 罍 罍 (名略)。<550>・<551>

<1134> **Ignoranti possessio non acquiritur.** [Possessiō nōn acquiritur ignōrantī.] 「占有は不知の [人] のためには取得されない。」<acquiritur>…<acquirō> [取得する] の 受 覩 三 罍、<ignoranti>…<ignoro> [知らない] の 覩 四 <ignorans> の 罍 罍 罍 (名略)。

<1135> **Ignorantia eorum quae quis scire tenetur non excusatur.** [Ignōrantia eōrum, quae quis tenētur scīre, nōn excūsatur.] (*Pa p.D.21,1,55*; Hale,P.C.42) 「ある人が知るよう義務づけられていることの不知は、[免責の] 弁解とは成らない。」<ignorantia>…「不知」、<scire>…<acio> [知る] の 覩 四、<excusatur>…<excuso> [[免責の] 口実となる] の 覩 三 罍。※<quis>は<aliquis>の代用である。「代用型としての<quis>」→「索引」

<1136> **Ignorantia excusatur non juris sed facti.** [Ignōrantia nōn jūris sed factī excūsatur.] 「法の不知ではなくて、事実の不知が、弁解と扱われる。」<ignorantia>…「不知」、<excusatur>…<excuso> [[免責の] 口実とする] の 受 覩 三 罍。※<non ~ sed>は相関語である。<Ignorantia facti, non juris excusatur.>は能動相の方を用いた表現である。<excusatur>はさきの<excuso>の 覩 三 罍である→<1137>。「法と事実」→「索引」、「タテマエ (法) とホンネ (事実)」→「索引」。

<1137> **Ignorantia facti excusatur, ignorantia juris, quod quisque tenetur scire, non excusatur.** [Ignōrantia factī excūsatur, ignōrantia jūris, quod quisque tenētur scīre, nōn excūsatur.] (*Paul.D.22,6,9pr.*; *Ulp.D.17,29,1*; *Lib.Sex.5,13,13*; *1 Co.Rep.177*; *2 Co.Rep.3b*; *Broom,Max.169,253,263*; *Gr. & Rud.of Law,140,141*) 「事実の不知は [免責の] 弁解と成るが、[しかし、] 各人が知るよう義務づけられている法の不知は、[免責の] 弁解とは成らない。」<ignorantia>…「不知」、<excusatur>…<excuso> [[免責の] 口実となる] の 覩 三 罍、<scire>…<scio> [知る] の 覩 四。※「法と事実」→「索引」、「タテマエ (法) とホンネ (事実)」→「索引」。<764>・<1139>・<1142>・<1703>

<1138> **Ignorantia iudicis est calamitas innocentis.** [Ignōrantia iūdicis est calamitās innocentis.] (*2 Co Inst.591*) 「裁判官の不知は無実の [人] の禍いである。」<ignorantia>…「不知」、<calamitas>…「禍い」、<innocentis>…<innocens> [潔白な] の 罍 罍 罍 (名略)。

<1139> **Ignorantia juris nocet.** [Īgnōrantia jūris nocet.]「法の不知は害する。」<ignorantia>…「不知」、<nocet>…<noceo> [害する] の ㊦ ㊧ ㊨。<764>・<1137>・<1142>・<1703>

<1140> **Ignorantia juris quod quisque scire tenetur non excusat.** [Īgnōrantia jūris, quod quisque tenētur scīre, nōn excūsāt.] (2 Co.Rep.3b ; Hale,P.C.42 ; 4 Bouv.3828)「各人が知るよう義務づけられている法の不知は、[免責の] 弁解とは成らない。」<ignorantia>…「不知」、<scire>…<scio> [知る] の ㊦ ㊧、<excusat>…<excuso> [[免責の] 口実となる] の ㊦ ㊧ ㊨。

<1141> **Ignorantia juris sui non praejudicat juri.** [Īgnōrantia j ūris suī nōn praejūdicat jūri.] (Lofft,552)「自身の権利の不知は権利に予め不利には働かない。」<ignorantia>…「不知」、<praejudicat>…<praejudico> [先決となる] の ㊦ ㊧ ㊨。

<1142> **Ignorantia legis neminem excusat.** [Īgnōrantia lēgis excūsāt nēminem.] (*Paul.D.22,6,9pr.* ; 4 Bouv.Inst.No.28,38 ; 1 Story,Eq.Jur.§111 ; 7 Watts(Pa.),1374)「法律(法)の不知は誰にも[免責の] 口実とは成らない。」<ignorantia>…「不知」、<excusat>…<excuso> [[免責の] 口実となる] の ㊦ ㊧ ㊨。<764>・<1137>・<1139>・<1703>

<1143> **Ignorantia praesumitur, ubi scientia non probetur.** [Īgnōrantia praesūmitur, ubī scientia nōn probētur.] (Sext. v. De Regulis Juris,48)「知っていることが証明されないところでは、知らないことが推定される。」<ignorantia>…「不知」、<scientia>…「知っていること」。

<1144> **Ignorantiam allegans eam probare debet.** [Allēgāns īgnōrantiam dēbet probāre eam.] (Dam.Reg.Can.131)「不知を申したてる[人]はそれを証明するべきである。」<allegans>…<allego> [申したてる] の見出し語 ㊦ ㊧ (名略)、<ignorantiam>…<ignorantia> [不知] の ㊦ ㊧、<probare>…<probo> [証明する] の ㊦ ㊧。

<1145> **Ignorare leges est lata culpa.** [Īgnōrāre lēgēs est culpa lata.]「法律(法)を知らないことは重過失である。」<ignorare>…<ignoro> [知らない] の ㊦ ㊧、<lata>…<latus> [重い] の ㊦ ㊧ ㊨。

<1146> **Ignoscitur ei qui sanguinem suum qualiter qualiter redemptum voluerit.** [Īgnōscitur eī, quī voluerit sanguinem suum redemptum quāliter quāliter.] (1 Bl.Com.131)「自身の生命が救われた状態にあることを方法を問わず望んだ人は、許される。」<ignoscitur>…<ignosco> [許す] の ㊦ ㊦ ㊦ ㊦、<sanguinem>…<sanguis> [血] の ㊦ ㊦、<redemptum>…<redimo> [救いだす] の ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦。※

<volo>にひかれた対格不定法の構文が見える。<sanguinem>は、意味上の主語として、隠れている<esse (redemptum)>にかかる。国不→<98>

<1147> **Ignoscitur his, qui aetate defecti sunt.** [Ignoscitur hīs, quī sunt dēfectī aetāte.] (Ulp.D.29,5,3,7: D.2,13,1,5)「年令の点で欠けていた人たちには、許しが与えられる。」<ignoscitur>…<ignosco> [許す] の 国 国 国、<defecti>…<deficio> [欠ける] の 国 国 <defectus> の 国 国 国 (受動相完了の構成要素)、<aetate>…<aetas> [年令] の 国 国。 ※与格をとる自動詞の受動相の構文である。「自動詞の受動相」→<59>・「索引」。日本語の表現では、<his>という複数男性与格の「彼らに」のところを、「彼らは」というように主格風にするのが、ふつうであろう。

<1148> **Illud quod alias licitum non est, necessitas facit licitum; et necessitas inducit privilegium quod jure privatur.** [Necessitās facit illud, quod nōn est licitum aliās, licitum; et necessitās indūcit prīvilēgium, quod prīvātur jūre.] (10 Co.Rep.61a; Rep.Can.169)「緊要は、他の場合に許されていないあのことを、許されるものとする。そして、緊要は法に於いては奪われている特権を導く。」<licitum>…<licitus> [許された] の 国 国 国、<inducit>…<induco> [導く] の 国 国 国、<privilegium>…<privilegium> [特典] の 国 国、<privatur>…<privatio> [奪う] の 国 国 国。

<1149> **Illud quod alias unitur, extinguitur, neque amplius per se vacare licet.** [Illud, quod ūnītur aliās, extinguitur, neque licet vacāre per sē amplius.] (Godolph.Ecc.Law,169)「他の方法で結合されるあのものは、消滅し、また、それ以後は、それ自体として自由であることは、許されない。」<unitur>…<unio> [結合させる] の 国 国 国、<extinguitur>…<extinguo> [消す] の 国 国 国、<vacare>…<vacare> [自由である] の 国 国、<amplius>…<amplius> [広い] に由来する 国 副詞。

<1150> **Illud quod alteri unitur, extinguitur, neque amplius per se vacare licet.** [Illud, quod ūnītur alterī, extinguitur, neque licet vacāre per sē amplius.] (Godolph.Rep.Can.169)「他の[もの]と結合されるあの[もの]は、消滅し、また、それ以後は、それ自体として自由であることは、許されない。」<unitur>…<unio> [結合させる] の 国 国 国、<extinguitur>…<extinguo> [消す] の 国 国 国、<vacare>…<vacare> [自由である] の 国 国、<amplius>…<amplius> [広い] に由来する 国 副詞。

<1151> **Imaginaria venditio non est pretio accedente.** [Vēnditio nōn est imāgināria, pretiō accēdente.] (Ulp.D.50,17,16)「売却は、代価が伴うときには、仮装的ではない。」<imaginaria>…<imaginarius>

[仮装的な]の 𐀀𐀁𐀃、<pretio>…<pretium> [代価]の 𐀀𐀁、<accedente>…<accedo> [加わる]の 𐀀𐀁𐀃<accedens>の 𐀀𐀁𐀃𐀄。※絶対的奪格の構文が見える。「名詞 (pretio) プラス現在分詞 (accedente)」型で、その意味は「～のときに」である。 𐀀𐀁𐀃→<1>

<1152> **Immobilia situm sequuntur.** [Immōbilia sequuntur situ m.] (2 Kent.Com.67)「不動 [産] は所在地に従う」<immobilia>…<immobilis> [動かしにくい]の 𐀀𐀁𐀃𐀄 (𐀀𐀁𐀃𐀄)、<situm>…<situs> [場所]の 𐀀𐀁𐀃。

<1153> **Immobilia veniant ad primogenitum.** [Immōbilia veniant ad primōgenitum.]「不動 [産] が長子へと来るよう。」<immobilia>…<immobilis> [動かしにくい]の 𐀀𐀁𐀃𐀄 (𐀀𐀁𐀃𐀄)、<veniant>…<venio> [くる]の 𐀀𐀁𐀃𐀄𐀅、<primogenitum>…<primogenitus> [長子]の 𐀀𐀁𐀃。

<1154> **Imperii majestas est tutelae salus.** [Mājestās imperiī est salūs tūtetae.] (Co.Litt.64)「支配権の威厳は庇護の安全である。」<imajestas>…「威厳」、<imperii>…<imperium> [支配]の 𐀀𐀁𐀃𐀄、<salus>…「安全」、<tutelae>…<tutela> [保護]の 𐀀𐀁𐀃𐀄。

<1155> **Imperii potentia ex civium numero aestimanda est.** [Potentia imperiī est aestimanda ex nūmerō cīvium.] (Spinoza, Tract. Polit.1803,2)「支配権の力は国民の数から評価されるべきである。」<potentia>…「力」、<imperii>…<imperium> [支配権]の 𐀀𐀁𐀃𐀄、<aestimanda>…<aestimo> [評価する]の 𐀀𐀁𐀃𐀄<aestimandus> [評価されるべき [である]]の 𐀀𐀁𐀃𐀄。<numero>…<numerus> [数]の 𐀀𐀁𐀃。※ 𐀀𐀁𐀃→<1>

<1156> **Imperitia culpa adnumeratur.** [Imperītia adnumerātur culpae.] (Gai.D.50,17,132)「未熟練は過失に算えられる。」<imperitia>…「未熟練」、<adnumeratur>…<adnumero> [数える]の 𐀀𐀁𐀃𐀄𐀅。

<1157> **Imperium facile iis artibus retinetur, quibus initio partum est.** [Imperium retinētur artibus iīs, quibus est partum in itiō, facile.] (Sall.Cat.2)「支配権は、それが当初に獲得される際に用いられたその方法に依って、容易に保持される。」<imperium>…「支配権」、<retinetur>…<retineo> [保持する]の 𐀀𐀁𐀃𐀄𐀅、<artibus>…<ars> [方法]の 𐀀𐀁𐀃、<partum>…<pario> [入手する]の 𐀀𐀁𐀃𐀄<partus>の 𐀀𐀁𐀃𐀄 (受動相完了の構成要素)、<initio>…<initium> [開始]の 𐀀𐀁𐀃。※<quibus>は、「それらによって～が～するところの～」という前置詞ぶくみのニュアンスをはらんだ関係代名詞であるが、日本語の訳では、前置詞が表にでてこないように、構文を変換していく方が、自然である。

<1158> **Imperium flagitio acquisitum nemo unquam bonis artibus exercuit.** [Nēmō exercuit imperium acquīsītum flāgitiō artibus]

us bonis umquam.]「誰も、破廉恥行為に依って得られた支配権を、良い方法で決して行使しなかった。」<exercuit>…<exerceo> [行なう] の 罫 罫 罫、<imperium>…<imperium> [支配権] の 罫 罫、<acquisitum>…<acquirō> [える] の 罫 罫<acquisitus>の 罫 罫、<flagitio>…<flagitium> [破廉恥な行為] の 罫 罫、<artibus>…<ars> [方法] の 罫 罫。

<1159> **Impersonalitas non concludit nec ligat.** [Impersōnālītās nōn conclūdit nec ligat.] (Co.Litt.352)「[人の]無名性は、繋ぎあわせることも、義務を負わせることも、ない。」<impersonalitas>…「名前のないこと」、<concludit>…<concludo> [かこむ] の 罫 罫、<ligat>…<ligo> [結びつける] の 罫 罫。※<non ~ nec>は関連語である。

<1160> **Impium praesidium praescriptio.** [Praescriptiō praesidium impium.]「時効は正しくない防衛策[である]。」<praescriptio>…「時効」、<praesidium>…「保護」、<impium>…<impius> [正しくない] の 罫 罫。※動詞が省略されている。

<1161> **Impossibilis conditio pro non scripta habetur.** [Conditio impossibilis habetur pro nōn scripta.] (I.J.2,14,10)「不可能な条件は書かれなかった[もの]と扱われる。」<scripta>…<scribo> [書く] の 罫 罫<scriptus>の 罫 罫 (名略)。<374>・<457>

<1162> **Impossibilium nulla obligatio.** [Obligatiō nulla impossibilium.] (Cel.D.50,17,185; Broom,Max.249)「不可能なものについては、なんらの債務関係も[存在し]ない。」※動詞が省略されている。冒頭におかれている属格の場合、このように訳出するのが自然である。「文頭の属格」→「索引」.<2088><Nemo tenetur ad impossibile.> (Jenk.Cent.7)「誰も不可能なものへは拘束されない。」も同趣旨の命題である。<1163>・<1678>・<2045>・<2088>・<3673>

<1163> **Impotentia excusat legem.** [Impotentia excusat lēgem.] (Libri Feudorum,2,24,2; Co.Litt.29; Broom,Max.243,251)「不可能は法律(法)[の適用]を除外する。」<impotentia>…「不能」、<excusat>…<excuso> [弁解する] の 罫 罫。<1162>・<1678>・<2045>・<2088>・<3673>

<1163bis> **Improba possessio firmum titulum possidenti praestare nullum potest.** [Possessiō improba potest praestāre titulum firmum nullum possidenti.]「不正な占有は、占有者になんらの確固とした権原も与えることは出来ない。」<improba>…<improbus> [不正直な] の 罫 罫、<praestare>…<praesto> [示す] の 罫 罫、<titulum>…<titulus> [権原] の 罫 罫、<firmum>…<firum> [強固な] の 罫 罫、<possidenti>…<possideo> [占有する] の 罫 罫<possidens>の 罫 罫 (名略)。

<1163ter> **Impuberes sine tutore agentes nihil posse scire intelliguntur.** [Impūberēs agentēs sine tūtōre intelligitur posse scīre nihil.]「後見人なしに行動する未成熟者は、なんら知ることが出来ないものと理解される」<impuberes>…<impubes> [未成熟者] の 𐌹𐌺𐌹、<agentes>…<ago> [行なう] の 𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹<agens>の 𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹、<tutore>…<tutor> [後見人] の 𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹、<scire>…<scio> [知る] の 𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹。※主格不定法の構文が見える。主語の<impuberes>は、<intelliguntur>と<posse>の双方にかかる。 𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹→<98>。

<1163quater> **Impune est admittendum quod per furorem alicujus accidit.** [Quod accidit per furōrem alicūjus, est admittendum impūnē.]「ある人の精神錯乱に依って生ずる [ことは]、罰せられないものとして、認められるべきである。」<accidit>…<accido> [生ずる] の 𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹、<furorem>…<furor> [精神錯乱] の 𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹、<admittendum>…<admitto> [認める] の 𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹<admittendus> [認められるべき [である]] の 𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹。※<impune>はたんなる副詞である。「<frustra>系のもの」→「索引」

<1164> **Impune pecces in eum, qui peccat prior.** [Peccēs in eum, qui peccat prior, impūnē.] (Syr.241,354)「いっそう先に悪事を行なう人に対して君が悪事を行なっても、罰せられない。」<pecces>…<pecco> [犯す] の 𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹、<peccat>…さきの<pecco>の 𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹。※<prior>は「いっそうさきの」を意味する形容詞であるが、副詞のようにはうけとられることがある (形容詞の述語的用法)。「形容詞の訳しかた」→<55>、「<frustra>系のもの」→「索引」。

<1165> **Impunitas continuum affectum tribuit delinquenti.** [Impūnitās tribuit affectum continuum dēlinquentī.] (4 Co.Rep.45 ; 2 Co.Inst.226)「[犯罪を] 不加罰 [のままにしておくこと] は、犯罪を行なう [人] に永続的な願望を与える。」<impunitas>…「不加罰」、<tribuit>…<tribuo> [与える] の 𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹、<affectum>…<affectus> [願望] の 𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹、<continuum>…<continuus> [継続的な] の 𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹、<delinquenti>…<delinquo> [罪を犯す] の 𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹<delinquens>の 𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹 (名略)。

<1166> **Impunitas semper ad deteriora invitat.** [Impūnitās invitāt ad dēteriōra semper.] (5 Co.Rep.109a)「[犯罪を] 不加罰 [のままにしておくこと] は、常に [人を] いっそう悪い [こと] へと導く。」<impunitas>…「不加罰」、<invitat>…<invito> [導く] の 𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹。※「犯罪と刑罰」→「索引」。<846>・<1385>・<1410>・<1790>・<1846>・<2601>・<2765>・<3708>・<3709>・<3710>

<1167> **Imputari non debet ei, per quem non stat, si non fac**

iat, quod per eum fuerat faciendum. [Nōn dēbet imputārī eī, pe
r quem nōn stat, sī nōn faciat, quod fuerat faciendum per eum.]
(*Paul.D.19,2,38*; *Lib.Sex.5,13,41*) 「ある人が、自身に依ってなされる
べきであった [ことを] なさない場合、そのことがその人の責に帰せられ
ないときには、その人は責を問われるべきではない。」<imputari>…<imp
uto> [帰する] の 𐀀𐀁𐀂、<stat>…<sto> [立つ] の 𐀀𐀃𐀄、<faciendu
m>…<facio> [なす] の 𐀀𐀅𐀆<faciendus> [なされるべき [である]] の 𐀀
𐀇𐀈。<per> プラス人称代名詞 (対格) と<stat>が組みあわさるときは、
「ある人の責任である」という意味の熟語となる。この命題では、その人称
代名詞のところに関係代名詞が入っていて、その先行詞<ei>が与格形で現
われている点が少し複雑である。※ 𐀀𐀅𐀆→<1>、「前置詞つきの関係代名詞」
→「索引」。

<1168> **In aedificis lapis male positus non est removendus.**
[Lapis positus male in aedificiis nōn est remōvendus.] (11 Co.Re
p.69) 「建物の中に悪い状態で置かれた [基礎] 石は、取りさらえること
は出来ない。」<lapis>…「石」、<positus>…<pono> [すえる] の見出し語
𐀀𐀉𐀊、<aedificis>…<aedificium> [建物] の 𐀀𐀋𐀌、<removendus>…<re
moveo> [とりのぞく] の 𐀀𐀍𐀎<removendus> [とりされるべき [である]]
の 𐀀𐀏𐀐。※ 𐀀𐀍𐀎のニュアンスには、ときには、このように「～されるこ
とができる」ものもある。 𐀀𐀍𐀎→<1>

<1169> **In aequali jure, melior est conditio possidentis.** [Con
ditiō possidentis est melior in jūre aequālī.] (*Ulp.D.50,17,126,2*;
Broom,Max.486,713; *Plowd.296*; *Mitf.Eg.Pl.215*) 「対等な権利におい
ては、占有する [人] の地位はいっそう良い。」<possidentis>…<posside
o> [占有する] の 𐀀𐀑𐀒<possidens>の 𐀀𐀓𐀔 (名略)、<aequali>…<aequ
alis> [平等な] の 𐀀𐀕𐀖。※「権利が対等な場合には」と訳出する方が、
日本語の語感にあっているかもしれない。このように。「前置詞プラス形容
詞プラス名詞」(「対等な権利において」)のところが「接続詞プラス名詞プ
ラス動詞」(「権利が対等な場合には」)というように、変換・転換・おきか
えのテクニックを用いるのは、日本語の語構造ないしは語感というものが
近代欧米語の場合とかなりちがっている以上は、ときには必要な処理であ
る。このあたりの事情を考えてみるには、他の事例も参考になる。まず、<a
b urbe condita>・<ante Christum natum>のような完了分詞 (形容詞扱
い) グループについては、<1540>を、本例の場合のように、前置詞グルー
プについては、<206bis>を、<de lege ferenda>のような、「動形容詞の動
名詞への読みかえ」については、<711>・<1540>を、最後に、「能動相 (態)
と受動相 (態) の相互読みかえ」問題については、<530>・<694>などを参

照して頂きたい。「動形容詞と動名詞の密接な関係」→「索引」、「言いかえの訳しかた」→〈153〉・〈1540〉。

〈1170〉 **In alienam voluntatem conferri legatum non potest.** [Lēgātum nōn potest cōferri in voluntātem aliēnam.] (Mod.D.35, 1,52)「遺贈は他人の意思に委ねられることは出来ない。」〈legatum〉…「遺贈」、〈conferri〉…〈confero〉[まとめる]の ㊦㊧㊨。

〈1170bis〉 **In alieni facti ignorantia tolerabilis error est.** [Error est tolerābilis in ignōrantiā factī aliēni.]「他人の行為についての不知に於いては、誤まりは耐えしのばれるものである。」〈tolerabilis〉…「たえられる」、〈ignorantia〉…〈ignorantia〉[不知]の ㊦㊧。

〈1171〉 **In alta proditione nullus potest esse accessorius, sed principalis solummodo.** [Nūllus potest esse accēssōrius in prōditiōne altā, sed principālis solummodō.] (3 Co.Inst.138)「大逆行為に於いては、誰も従[犯]であることは出来ず、主[犯]だけが[存在する]。」〈accessorius〉…〈accessorius〉[付属の]の ㊦㊧㊨(名略)、〈proditione〉…〈proditio〉[反逆]の ㊦㊧、〈alta〉…〈altus〉[高い]の ㊦㊧、〈principalis〉…〈principalis〉[主要な]の見出し語が名詞化したもの。※〈nulla ~ sed〉は関連語である。「主と従」→「索引」、「タテマエ(主)とホンネ(従)」→「索引」。

〈1172〉 **In alternativis electio est debitoris.** [Ēlēctiō est dēbitōris in alternātivīs.] (Pap.D.46,3,95,1)「択一的な[こと]に於いては、選択権は債務者に属する。」〈electio〉…「選択」、〈alternativis〉…〈alternativus〉[択一的な]の ㊦㊧㊨(名略)。※〈nullus ~ sed〉は〈non ~ sed〉系の関連語である。「属格の訳しかた」→「索引」

〈1172bis〉 **In alternativis sufficit alterutrum adimpleri.** [Sufficit alterutrum adimplēri in alternātivīs.]「択一的な[こと]に於いては、一方の[こと]が成就することで、十分である。」〈sufficit〉…〈sufficio〉[十分である]の ㊦㊧㊨、〈adimpleri〉…〈adimpleo〉[みたす]の ㊦㊧㊨、〈alternativis〉…〈alternativus〉[択一的な]の ㊦㊧㊨。※〈sufficit〉にひかれた対格不定法の構文が見える。対格形の〈alterutrum〉は、意味上の主語として、〈adimpleri〉にかかる。㊦㊧㊨→〈35〉

〈1173〉 **In ambigua voce legis ea potius accipienda est significatio quae vitio caret.** [Sīgnificātiō ea, quae caret vitiō, est accipienda potius in vōce ambiguā lēgis.] (Cel.D.1,3,19; Broom,Max.386,576; Bac.Max.Reg.3)「法律(法)の中にあいまいな表現が存するときには、瑕疵のないその意味が、むしろ受けいられるべきである。」〈significatio〉…「意味」、〈caret〉…〈careo〉[欠ける]の ㊦㊧㊨、〈vitio〉…〈vi-

tium> [欠陥] の 罫罫、<accipienda>…<accipio> [うけいれる] の 動形<accipiendus> [うけいれられるべき [である]] の 罫罫罫、<voce>…<vox> [表現] の 罫罫、<ambigua>…<ambiguus> [あいまいな] の 罫罫罫。※ 動形→<1>。「あいまいな表現においては」のところは、接続詞じたての、さきの訳の方が、日本語表現らしい。「形容詞の訳しかた」→<206bis>・「索引」、「言いかえの訳しかた」→「索引」。

<1174> **In ambiguis casibus semper praesumitur pro rege.** [Praesumitur pro rege in casibus ambiguis semper.] 「あいまいな事案に於いては、常に、国王に有利に推定がなされる。」<ambiguus>…<ambiguus> [あいまいな] の 罫罫罫。

<1175> **In ambiguis orationibus maxime sententia spectanda est ejus, qui eas protulisset.** [Sententia ejus, qui protulisset eas, est spectanda in orationibus ambiguis maximē.] (*Marci.D.50,17,96*; Broom,Max.380,567) 「あいまいな表現に於いては、それを用いた人の意図がとりわけ考慮されるべきである。」<protulisset>…<profero> [述べる] の 罫過去完了 罫罫、<spectanda>…<specto> [考慮する] の 動形<spectandus> 「考慮されるべき [である]]」の 罫罫罫、<orationibus>…<oratio> [表現] の 罫罫、<ambiguus>…<ambiguus> [あいまいな] の 罫罫罫。※ 動形→<1>、「タテマエ (表現) とホンネ (意図)」→「索引」。

<1176> **In ambiguis pro dotibus respondere melius est.** [Respondere pro dotibus in ambiguis est melius.] (*Paul.D.50,17,85pr.*) 「あいまいな[こと]に於いては、嫁質に有利となるように解答することが、いっそう良い。」<respondere>…<respondeo> [答える] の 動形、<dotibus>…<dos> [嫁質] の 罫罫、<ambiguus>…<ambiguus> [あいまいな] の 罫罫罫。※不定法が主語となっている→<171>。

<1177> **In ambiguis rebus humiliorem sententiam sequi oportet.** [Oportet sequi sententiam humiliorem in rebus ambiguis.] (*Marce.D.50,17,192*) 「あいまいな事柄に於いては、いっそう控え目な判断に従うことが、必要である。」<humiliorem>…<humilis> [ひかえめな] の 罫<humilior>罫罫罫、<ambiguus>…<ambiguus> [あいまいな] の 罫罫罫。※ここでは、非人称動詞<oportet>は、対格不定法ではなくて、ふつうの不定法をひく。<sententiam>は、<sequi>の方に関係していて、難解な対格不定法構文の場合の、対格形をした主語ではない。<In dubio・dubiis>論→「索引」

<1178> **In ambiguo sermone non utrumque dicimus sed id dumtaxat quod volumus.** [Dicimus non utrumque, sed id, quod volumus, dumtaxat, in sermone ambiguo.] (*Paul.D.34,5,3*; 2 De G.M.

& G.313)「あいまいな表現に於いては、私たちは、双方の[こと]を言明するのではなくて、私たちが望むことだけを[言明する。]」<sermone>…<sermo>[言葉]の 𐀓𐀗𐀓、<ambiguo>…<ambiguus>[あいまいな]の 𐀓𐀗𐀓𐀗𐀓。
※<non ~ sed>は関連語である。

<1179> **In Anglia non est interregnum.** [Interrēgnum nōn est in Angliā.] (Broom, Max,19; Jenk. Cent.205)「イギリスには空位は存在しない。」<interregnum>…「空位」、<Anglia>…<Anglia> [イギリス]の 𐀓𐀗𐀓。

<1180> **In antiquis enuntiatiua probant etiam contra tertium.** [Ēnūntiātīva in antiquīs probant etiam contrā tertium.]「古い[記録にある]言明は、第三[者]に不利となるようにさえも、証明する。」<enuntiatiua>…<enuntiativus> [言明された]の 𐀓𐀗𐀓𐀗𐀓 (名略)、<antiquis>…<antiquus> [古い]の 𐀓𐀗𐀓𐀗𐀓 (名略)、<tertium>…<tertius> [第三の]の 𐀓𐀗𐀓𐀗𐀓 (名略)。

<1181> **In antiquis omnia praesumuntur rite ac sollemniter acta.** [Omnia praesūmuntur ācta rīte ac sollemniter in antiquīs.]「古い[こと](法律行為)に於いては、すべてが、方式に従い、しかも形式どおりになされ[た]ものと推定される。」<antiquis>…<antiquus> [古い]の 𐀓𐀗𐀓𐀗𐀓 (名略)。※主格不定法の構文が見える。主語の<omnia>は、<praesumuntur>と<(esse) acta>の双方にかかる。𐀓𐀗𐀓→<98>。<797>

<1182> **In argumentum trahi nequeunt, quae propter necessitatem aliquando sunt concessa.** [Quae sunt concēssa propter necessitātem aliquandō, nequeunt trahī in argūmentum.] (Lib.Sex.5, 13,78)「緊要のためにあるときに許された[ことは]、先例とされることは出来ない。」<concessa>…<concedo> [許す]の 𐀓𐀗𐀓𐀗𐀓<concessus>の 𐀓𐀗𐀓𐀗𐀓 (受動相完了の構成要素)、<nequeunt>…<nequeo> [できない]の 𐀓𐀗𐀓𐀗𐀓、<trahi>…<traho> [ひく]の 𐀓𐀗𐀓𐀗𐀓、<argumentum>…<argumentum> [論拠]の 𐀓𐀗𐀓𐀗𐀓。<2779>

<1183> **In atrocioribus delictis, punitur affectus, licet non sequatur effectus.** [Affectus pūnitur in delictīs atrōciōribus, licet effectus nōn sequātur.] (Call.D.48,8,14)「比較的重大な犯罪に於いては、たとえ結果が生じなくても、意思が罰せられる。」<affectus>…「意思」、<atrocioribus>…<atrox> [おそるべき]の 𐀓𐀗𐀓<atrocior>の 𐀓𐀗𐀓𐀗𐀓。※「意思と結果」→「索引」、「タテマエ(意思)とホンネ(結果)」→「索引」。

<1184> **In casu extremae necessitatis omnia sunt communia.** [Omnia sunt commūnia in cāsū necessitātis extrēmae.] (Hale.P.C. 54; Broom,Max.2)「極度の緊要の事態に於いては、すべての[もの]が

実は、近代欧米語では、助動詞と位置づけられているものである。このさい、とりわけ主要な三大助動詞について、各国語間の対応をマークしておいて頂こう。〈possum〉…〈pouvoir〉[仏]・〈potere〉[伊]・〈poder〉[西]。〈volo〉[～することを欲する]…〈vouloir〉[仏]・〈volere〉[伊](cf. 〈querer〉[西])。〈debeo〉[～しなければならない]…〈devoir〉[仏]・〈do vere〉[伊]・〈deber〉[西]

〈1188〉 **In conjunctivis oportet utramque, in disjunctivis sufficit alteram partem esse veram.** [Oportet utramque esse vĕram in conjunctivis, sufficit partem alteram esse vĕram in disjunctivis.] (Gai.D.50,17,110,3; Broom,Max.339,592; Co.Litt.225a; Co.Rep.592; Wing.Max.19) 「結合的な[文言]に於いては、[結合されている]双方[の文言]が真実であることを要するが、[しかし、]分離的な[文言]に於いては、一方の側が真実であることで、十分である。」〈veram〉…〈verus〉[真実の]の 𐀀𐀃𐀆、〈conjunctivis〉…〈conjunctivus〉[接統的な]の 𐀀𐀃𐀆 (名略)、〈sufficit〉…〈sufficio〉[十分である]の 𐀀𐀃𐀆、〈partem〉…〈pars〉[側]の 𐀀𐀃𐀆、〈disjunctivis〉…〈disjunctivus〉[分離的な]の 𐀀𐀃𐀆 (名略)。※対格不定法の構文が二つ見える。一つは、〈oportet〉にひかれるものであって、〈utramque〉が対格で、これが、主語として、省略されている〈esse (veram)〉にかかる。もう一つは、〈sufficit〉にひかれるものであって、〈partem (alteram)〉が対格で、これが、主語として、〈esse (veram)〉にかかる。𐀀𐀃𐀆→〈35〉。ところで、「結合的(接統的)なこと」というのは、「AおよびB」というように文言が連続的な位置関係におかれているケースを指し、一方、「分離的なこと」というのは、「AあるいはB」というように文言が択一的な位置関係におかれているケースを指す。ちなみに、〈ope consilio〉とあると、「助力および助言によって[窃盗をなす]」という読みと、「助力もしくは助言によって[窃盗をなす]」という読みとの双方がありうるので、このような、結合的にも分離的にもなっていない表現形式でも、それなりに深い意味がかもしだせるわけである。〈ope〉は〈ops〉[助力]の単数属格で(〈opus〉の変化形ではない)、〈consilio〉は〈consilium〉[助言]の単数奪格である。こういうとき、「助力・助言によって」とでも表現しておけば、日本語の解釈は自由となり、かえって好都合である。もっとも、厳格性が求められる刑事法規においては、そのようなあいまいさなど、とても許されないだろうが。「一方と他方」→「索引」

〈1189〉 **In consimili casu, consimile debet esse remedium.** [Remedium cōnsimile dēbet esse in cāsū cōnsimilī.] (Hard.65) 「類似の事案に於いては、類似の救済が存在するべきである。」〈remedium〉…「救済」、〈consimile〉…〈consimilis〉[類似の]の 𐀀𐀃𐀆、〈consimili〉…さ

きの〈consimilis〉の 𠄎𠄎𠄎。

<1190> **In consuetudinibus non diuturnitas temporis sed soliditas rationis est consideranda.** [Nōn diūturnitās temporis, sed soliditās ratiōnis est consideranda in cōnsuētūdinibus.] (Co.Litt. 141a)「慣習に於いては、時の長さではなくて、理の強さが考慮されるべきである。」〈diuturnitas〉…「長さ」、〈soliditas〉…「固さ」、〈consideranda〉…〈considero〉[考慮する]の 𠄎𠄎𠄎〈considerandus〉[考慮されるべき[である]]の 𠄎𠄎𠄎。※〈non ~ sed〉は関連語である。 𠄎𠄎𠄎→<1>

<1191> **In contingentibus et liberis tota ratio facti stat in voluntate facientis.** [Ratiō tōta factī stat in voluntāte facientis in contingentibus et liberis.]「偶然の[こと]および自由な[こと]に於いては、行為の理由全体は、行為[者]の意思の中に存在する。」〈stat〉…〈sto〉[立つ]の 𠄎𠄎𠄎、〈facientis〉…〈facio〉[なす]の 𠄎𠄎𠄎〈faciens〉の 𠄎𠄎𠄎(名略)、〈contingentibus〉…〈contingo〉[ふれる]の 𠄎𠄎𠄎〈contingens〉の 𠄎𠄎𠄎(名略)、〈liberis〉…〈liber〉[自由な]の 𠄎𠄎𠄎(名略)。

<1192> **In contractibus, benigna, in testamentis, benignior, in restitutionibus, benignissima interpretatio facienda est.** [Interpretātiō benigna est facienda in contractibus, benignior in tēstamentis, benignissima in restitūtiōnibus.] (Co. Litt 112b)「契約に於いては緩やかな解釈が、遺言に於いてはいつそう緩やかな解釈が、返還に於いては最も緩やかな解釈が、なされるべきである。」〈benigna〉…〈benignus〉[寛大な]の 𠄎𠄎𠄎、〈facienda〉…〈facio〉[なす]の 𠄎𠄎𠄎〈faciendus〉[なされるべき[である]]の 𠄎𠄎𠄎、〈benignior〉…さきの〈benignus〉[ゆるやかな]の 𠄎𠄎𠄎〈benignior〉の 𠄎𠄎𠄎、〈benignissima〉…さきの〈benignus〉の 𠄎𠄎𠄎〈benignissimus〉の 𠄎𠄎𠄎、〈restitutionibus〉…〈restitutio〉[返還]の 𠄎𠄎𠄎。※ 𠄎𠄎𠄎→<1>

<1193> **In contractibus dolum, interdum et culpam praestamus.** [Praestāmus dolum, et culpam interdum, in contractibus.] (*Ulp. D.17,23,2*)「契約に於いては、私たちは悪意の責を負う。ときには過失についてもである。」〈praestamus〉…〈praesto〉[保証する]の 𠄎𠄎𠄎。

<1194> **In contractibus tacite insunt, quae sunt moris et consuetudinis.** [Quae sunt mōris et cōnsuētūdinis, insunt in contractibus tacitē.] (*Ulp. D.21,1,31,20*; Broom, Max.572,842)「契約には、習俗および慣習に属する[ものが]暗黙の内に内在している。」〈moris〉…〈mos〉[習俗]の 𠄎𠄎𠄎、〈insunt〉…〈insum〉[内在する]の 𠄎𠄎𠄎。※〈sum〉と組合わさった〈moris〉と〈consuetudinis〉は、「～に属する」という意味の属格の用法である。「属格の訳しかた」→<68>・<84>・「索引」

<1195> **In contrahenda venditione ambiguum pactum contra venditorem interpretandum est.** [Pactum ambiguum est interpretandum contrā vēditōrem in vēditiōne contrāhendā.] (*Paul.D.50, 17, 172pr.*) 「売買締結に於いては、あいまいな合意は売主に不利となるように解釈されるべきである。」<ambiguum>…<ambiguus> [あいまいな] の 𐀀𐀁𐀂、<interpretandum>… 𐀀𐀁<interpretor> [解釈する] の 𐀀𐀂<interpretandus> [解釈されるべき [である]] の 𐀀𐀁𐀂、<contrahenda>…<contraho> [締結する] の 𐀀𐀂<contrahendus> [締結されるべき [である]] の 𐀀𐀁𐀂。※ 𐀀𐀂→<1>。𐀀𐀂の<contrahendus>は、動名詞のニュアンスで訳す必要がある。つまり「締結されるべき売却において」ではなく、軽く、「売却を締結することにおいて＝売買締結時に」となる。動名詞にかわって動形容詞が読み解きの現場で登場してくる場合の格は、この、前置詞<in>にひかれた奪格<venditione>のほかに、属格、与格、前置詞にひかれた対格があり、それらに私たちが遭遇するとき、それぞれに頭をしつかりと動かすことが必要になる。ここでは、ご参考までに、前置詞<de>を用いた同系の例をあげておこう。<de contemnando mortem> [死を軽蔑することについて] は、<mors> [死] の単数対格の<mortem>を<contemno> [軽蔑する] が目的語としてとりながら、その動名詞 (<contemnandum>) が、奪格支配の前置詞により、奪格に展開させられている。このタイプでは、文意があいまいになることもあるので(対格も奪格も支配する<in>という前置詞の場合—『新ラテン文法』§598 註)、つぎのような動形容詞転換が行われる。<de contemnenda morte> [軽蔑される [べき] 死について] というようにである。<contemnando>は動名詞奪格であるが、<contemnanda>は<contemno> [軽蔑する] の動形容詞<contemnandus>の単数女性奪格である。この動形容詞じたでの表現も、最終的には、動名詞によるものと同じように、「死を軽蔑することについて」となるわけであるが、受動相の雰囲気をもつ動形容詞の存在に敬意を表して、「死が軽蔑されること」という言いまわしを中間にはさんでみて、それを通過点としてみることも、すすめられる。「動形容詞と動名詞の密接な関係」→<153>・<1540>、<In dubio・dubiis>論→「索引」。<1196>

<1196> **In contrahendo quod agitur pro cauto habendum est.** [Quod agitur, est habendum prō cautō in contrāhendō.] (*Pomp.D. 12, 1, 3; Broom, Max. 369*) 「契約を締結する際には、意図される [ことが] 約定された [こと] と扱われるべきである。」<habendum>…<habeo> [扱う] の 𐀀𐀂<habendus> [扱われるべき [である]] の 𐀀𐀁𐀂、<cauto>…<caveo> [約定する] の 𐀀𐀁𐀂<cautus>の 𐀀𐀁𐀂 (名略)、<contrahendo>…<contraho> [締結する] の 𐀀𐀂<contrahendum>の 𐀀𐀂 (𐀀)。※ 𐀀𐀂→

<1>、**動名**→<153>。<1195>

<1197> **In conventionibus cotrahentium voluntas potius quam verba spectanda sunt.** [Voluntās contrāhentium potius, quam verba, sunt spectanda in conventiōnibus.] (*Pap.D.50,16,219*; Brom,Max.369,551; Kent.Com.555)「合意に於いては、[それを]締結する[人]の意思が、文言よりもいっそう考慮されるべきである。」<contrahentium>…<contraho>[締結する]の**動名**<contrahens>の**動名**属(名略)、<spectanda>…<specto>[考慮する]の**動形**<spectandus>[考慮されるべき[である]]の**動名**。※**動形**→<1>。<voluntas>は単数形であるが、<verba>は複数形である。そのためもあって、<sunt spectanda>は複数形となっている。<potius ~ quam>は相関語で、比較の構文をかたちづくる。ところで、法律(法規)も法律行為(たとえば契約)も、多くの場合に解釈という作業を必要とする(ふつうは法学者および実務家はその任務にあたる)。そのさい、外部に表示された客観的な形式(タテマエ)だけを考察の対象とするのか、あるいは、それを表示した人の主観的な意思(ホンネ)までも計算に入れるのか、によって、具体的に大きな違いがでてくることがある。古代と近代を単純に結びつけるのは危険であるが、ごく最近の歴史をみても、この二つの方法の対立は顕著に認められる。つまり、一九世紀のドイツのパンデクテン法学は、ローマ法学が最終的に到達した、極度の内的意思尊重の傾向を反映する法文資料によりながら、同時に、当時の時代風潮にも支えられて、意思理論を確立したが、逆に、最近のドイツでは、取引安全の要請から、法のある分野では、形式(表示)中心で処理する方法が優位にたっているということである。日本の場合でも、商法では表示を尊重し、身分行為については意思を尊重する、というように折衷的な取扱いがなされている。さて、古代ローマについて言えば、「形式(表示)中心から意思中心へ」の流れがある。ごく古い時代には、厳格な儀式めいた方式を踏まなければなんらの効果も発生しないし、他方で、いったんその方式を経れば、そのこと自体が一人立ちして、当事者が望まない効果さえも生みだしてしまうことが、ふつうのコースなのであった。つまり、「意思」からではなく、「形式」の方から効果が発生するのである。その理由としては、方式を組みたてるのに必要な言葉には独自の力がある、といった原始時代以来の呪術的観念や、また、現実的な問題として、そのようにしたほうが、明確で、あとになって紛争を発生させない、と考えられた点があげられよう。ここでは、解釈は当然に型にはまったものとなる。ところが、都市国家・農業社会としてのローマが、広い領土を獲得して、商業にのりだしてくると、必然的に、ローマ市民法も、他民族の法(取引法)と接触し、その結果、取引の安全を確保する、という要請から、ローマ的

な厳格な形式主義を維持することができなくなる。このようにして、方式の拘束をうけない非要式行為が、しだいに法生活のうえで重要になりはじめた。ここでは、争いが生じた場合に、法の規定ではなく、信義誠実（*bona fides*）にかなっているかどうか、だけが判定の材料とされるので、当事者の個別的な意思も当然考慮されることになった。しかし、共和政末期（前二～前一世紀）に入ると、儀式性をもたないさきの非要式行為の発達の影響と、それにともなう文書形式の利用の拡大、さらに、ギリシア哲学の意思理論を基礎とするヘレニズム的な弁論術（レトリック）の流入などの結果として、もっとも重要で、典型的な要式行為である問答契約や遺言の解釈においても、個別的な意思が考慮される兆しがみえはじめる。前九三年のクリウス事件は、文言主義と意思主義の解釈方法が裁判の場でぶつかりあった象徴的なケースである。ある人が、妻が妊娠中であると思いこみ、死後生まれてくるはずの子を遺言で相続人に指定しておいた。そのさい、もしその子が成熟期に達する以前に死亡すれば、Aを相続人とするように指定した。ところが、その人の死亡後に子供は生まれてこなかったので、一〇カ月後にAは相続権を主張した。しかし、遺言がなかった場合に相続人となるはずのBがそれに異議を申し立て、訴訟となった。Bを指定しなかった被相続人の意思を汲むならばA、文言中心ならばBが勝訴することになるだろうが、それぞれ一流の人物が弁論人として立ち、ある弁論家が前者の見解を、そしてある法学者が後者の見解を主張し、結果は前者の勝利に終わったのである。このように、同じ要式行為でも、無償の処分行為であり、しかも取引の安全を害するおそれがあるあまりない遺言というものから文言重視の傾向が緩み、つぎに、生前行為である要式契約にもそれがおよんだ。そして、最後に、とくに東ローマの法学校で、キリスト教の神学理論とも結合して強度の意思理論が組みたてられ、それがのちにドイツへとうけつがれていくのである。「文言と意思（意図）」→「索引」、「タテマエ（文言）とホンネ（意思）」→「索引」。〈1114〉

〈1198〉 **In criminalibus probationes debent esse luce clariore s.** [Probātiōnēs dēbent esse clāriōrēs lūce in crīminālibus.] (C.J. 4,19,25; 3 Co.Inst.210) 「刑事的な [こと] に於いては、証明は光よりもいっそう明白でなければならない。」〈clariore〉…〈clarus〉 [明るい] の 匹〈clarior〉の 覆因国、〈luce〉…〈lux〉 [光] の 圍奪。※〈luce〉は「比較の奪格」の用例である。「比較の奪格」→〈605〉・「索引」、〈In dubio・du biis〉論→「索引」。

〈1199〉 **In criminalibus sufficit generalis malitia intentionis cum facto paris gradus.** [Malitia generālis intentiōnis sufficit cum factō gradūs paris in crīminālibus.] (Bac. Max. Reg.15; Broom,

Max.215)「刑事的な[こと]に於いては、意図の一般的な悪意は、[それと]同等の程度の行為を伴っていれば、[罰せられるのに]十分である。」<malitia>…「悪意」、<intentionis>…<intentio>[意図]の 罍 罍、<sufficit>…<sufficio>[たりる]の 罍 罍、<gradus>…<gradus>[段階]の 罍 罍、<paris>…<par>[等しい]の 罍 罍。

<1200> **In criminalibus voluntas pro facto reputabitur.** [Voluntās reputābitur prō factō in crīminālibus.] (*Call.D.48,8,14*; 3 Co.Inst.106)「刑事的な[こと]に於いては、意思は行為と考えられるであろう。」<reputabitur>…<reputo>[考える]の 罍 罍。※「意思と行為」→「索引」、「タテマエ(意思)とホンネ(行為)」→「索引」。<146>

<1201> **In disjunctivis sufficit alteram partem esse veram.** [Sufficit partem alteram esse vērā in disjūctivīs.] (*Paul.D.50,16,124*; *D.50,17,110,3*; Broom,Max.399; Co.Litt.225a; 10 Co.Rep.59a; Wing.Max.13)「分離的な[もの]に於いては、一方の部分が正しいことで、十分である。」<sufficit>…<sufficio>[たりる]の 罍 罍、<partem>…<pars>[側]の 罍 罍、<veram>…<verus>[正しい]の 罍 罍、<disjunctivis>…<disjunctivus>[分離(選言)的な]の 罍 罍(名略)。※<sufficit>にひかれた対格不定法の構文が見える。対格形の<partem>は、意味上の主語として、<esse>にかかる。罍 罍→<35>

<1202> **In dubiis abstinence.** [Abstinē in dubiīs.]「疑問のある[こと]に於いては、差しひかえるよう。」<abstinence>…<abstineo>[さしひかえる]の 罍 罍。※<dubiis>は、<dubium>という名詞の複数奪格形とも読めるが、ラテン語の語感としては、ここは形容詞(名詞は省略されている)となってこよう。以下、<in dubiis>・<in dubio>系の文例では、一貫してそのような読みかたにしたがうことにする。<3026><Quod dubitas, n e feceris.>[君は、自身が疑問に思っている[ことを]やっしまわないうよう。]も同趣旨の命題である。<In dubio・dubiis>論→「索引」

<1203> **In dubiis benigniora semper sunt praeferenda.** [Benīgniora sunt praeferenda in dubiīs semper.] (*Gai.D.50,17,56*; 2 Kent.Com.557)「疑問のある[こと]に於いては、いっそう緩やかな[こと]が常に優先されるべきである。」<benigniora>…<benignus>[ゆるやかな]の 罍 <benignior>の 罍 罍(名略)、<praeferenda>…<praefero>[先におく]の 罍 罍 <praefereendus>[優先されるべき[である]]の 罍 罍。罍 罍→<1>、<In dubio・dubiis>論→「索引」。

<1204> **In dubiis libertas.** [Libertās in dubiīs.] (Rupertus Meldenius)「疑問のある[こと]に於いては、自由が。」<libertas>…「自由」。※動詞が省略されているが、この命題の意味はさまざまである。<In dubi

o・dubiis>論→「索引」

<1205> **In dubiis magis dignum est accipiendum.** [Dignum est accipiendum magis in dubiis.] (*Gai.D.50,17,56*; Branch, Princ.)「疑問のある[こと]に於いては、適切な[もの]がむしろ受けいれられるべきである。」<dignum>…<dignus> [適切な]の 𐀀𐀁𐀃 (名略)、<accipiendum>…<accipio> [うけとる]の 𐀀𐀁𐀃<accipiendus> [うけとられるべき[である]]の 𐀀𐀁𐀃。※ 𐀀𐀁𐀃→<1>、<In dubio・dubiis>論→「索引」。

<1206> **In dubiis non praesumitur pro testamento.** [Nōn paes ūmitur prō tēstamentō in dubiis.] (Branch, Princ.; Cro.Car.5)「疑問のある[こと]に於いては、遺言に有利となるようには推定されない。」

<1207> **In dubiis pars tutior est eligenda.** [Pars tūtior est eligenda in dubiis.] (*Ulp.D.50,17,9*)「疑問のある[こと]に於いては、いっそう安全な側が選ばれるべきである。」<pars>…「側」、<tutior>…<tutus> [安全な]の 𐀀𐀁<tutior>の 𐀀𐀁𐀃、<eligenda>…<eligo> [選ぶ]の 𐀀𐀁𐀃<eligendus> [選ばれるべき[である]]の 𐀀𐀁𐀃。※ 𐀀𐀁𐀃→<1>、<In dubio・dubiis>論→「索引」。

<1208> **In dubiis prudenter, in certis fortissime.** [Prūdenter in dubiis, fortissimē in certis.]「疑問のある[こと]に於いては慎重に、確かな[こと]に於いては、極めて果敢に。」<fortissime>…<fortis> [強い]の 𐀀𐀁<fortissimus>に由来する副詞。※<In dubio・dubiis>論→「索引」、「慎重と果敢」→「索引」。

<1209> **In dubiis quod minimum sequimur.** [Sequimur, quod minimum, in dubiis.] (*Ulp.D.50,17,9*)「疑問のある[こと]に於いては、私たちは最小である[もの]に従う。」※<In dubio・dubiis>論→「索引」

<1210> **In dubio contra fiscum.** [Contrā fiscum in dubiō.] (*Mod.D.49,14,10*; *Cod.Theod.10,15,2*)「疑問のある[こと]に於いては、国庫に不利に。」<fiscum>…<fiscus> [国庫]の 𐀀𐀁𐀃。※動詞が省略されている。<In dubio・dubiis>論→「索引」

<1211> **In dubio haec est legis constructio quam verba obtendunt.** [Haec, quam verba obtendunt, est cōstrūctiō lēgis in dubiō.] (Branch, Princ.)「疑問のある[こと]に於いては、文言が示すこの[構成]が法律(法)の構成である。」<obtendunt>…<obtendo> [前へひろげる]の 𐀀𐀁𐀃、<constructio>…「構成」。※<In dubio・dubiis>論→「索引」

<1212> **In dubio instrumento standum est et nec actus simulatus praesumitur.** [Est standum instrūmentō in dubiō, et nec actus simulātus praesūmitur.]「疑問のある[こと]に於いては、証書に

依るべきであり、そして、仮装された行為までも推定されることはない。」
<standum>…<sto> [たつ] の 動形<standus> [たつべき [である]] の 匣
甲国、<instrumento>…<instrumentum> [証書] の 匣 匣、<simulatus>
…「偽った」。※自動詞の 動形→<543>・<574>・<785>・「索引」、動形→
<1>、<In dubio・dubiis>論→「索引」。

<1213> **In dubio interpretatio pro regula contra limitationem
facienda.** [Interpretātiō faciēda prō rēgulā, contrā limitātiōnem,
in dubiō.]「疑問のある [こと] に於いては、解釈は、原則に有利なよ
うに、制限に不利なように、なされるべき [である]。」「<facienda>…<fac
io> [なす] の 動形<faciendus> [なされるべき [である]] の 匣 匣国、<r
egula>…<regula> [原則] の 匣 匣、<limitationem>…<limitatio> [制限]
の 匣 匣。※動詞が省略されている。動形→<1>、<In dubio・dubiis>論→
「索引」、「有利と不利」→「索引」。<3429>

<1214> **In dubio legis constructio plus quam verba ostendit.**
[Cōntrūctiō lēgis plūs, quam verba, ostendit in dubiō.]「疑問のあ
る [こと] に於いては、文言よりも法律（法）の構成が、いっそう [事態
を] 明らかにする。」「<constructio>…「構成」、<ostendit>…<ostendo> [明
示する] の 匣 匣匣。※<plus ~ quam>は比較の構文をかたちづくる。<I
n dubio・dubiis>論→「索引」

<1215> **In dubio minus.** [Minus in dubiō.]「疑問のある [こと]
に於いては、いっそう少ない [もの] が。」「※<minus>のところを、「いっ
そう少なく」というように、副詞と理解することもできる。<In dubio・d
ubiis>論→「索引」

<1216> **In dubio mitius.** [Mītiūs in dubiō.]「疑問のある [こと]
に於いては、いっそう穏やかな [もの] が。」「<mitius>…<mitis>「温和な」
の 匣<mitior>の 匣 匣国 (名略)。※動詞が省略されている。<mitius>の部
分は、対格ととらえて、「いっそう温和な [もの] を」と訳出することもで
きる。また、<mitius>を副詞ととらえて、「いっそう温和に」と訳出する
こともできる。ここの<mitius>のところを<minus>にかえれば、「いっそ
う少ない [もの] を」などとなる。<In dubio・dubiis>論→「索引」

<1216bis> **In dubio nocet error erranti.** [Error nocet errantī i
n dubiō.]「疑問のある [こと] に於いては、誤まりは誤まる [人] を害
しない。」「<nocet>…<noceo> [害する] の 匣 匣匣。※<In dubio・dubiis>
論→「索引」

<1217> **In dubio pars mitior est sequenda.** [Pars mītiōr est se
quenda in dubiō.] (Ulp.D.48,19,32 : D.50,17,9)「疑問のある [こと]
に於いては、いっそう穏やかな方に従うべきである。」「<pars>…「側」、<m

itior>…<mitis> [温和な] の 𠄎<mitior>の 𠄎𠄎𠄎、<sequenda>… 𠄎<sequor> [したがう] の 𠄎𠄎<sequendus> [したがわれるべき [である]] の 𠄎𠄎𠄎。※ 𠄎𠄎→<1>。デーポーネンティア動詞は、もともと、受動的な形をしているだけで、意味の方は能動的なのであるが、それが動形容詞に展開すると、本来の受動的な意味になる(→<250>)。したがって、本来なら、<sequendus>は「したがわれるべきである」であって、「したがうべきである」とはならない。一方、本動詞の<sequor>は、「したがう」であって、「したがわれる」ではないが。もっとも、日本語の表現では、「したがうべきである」とする方が自然である。<In dubio・dubiis>論→「索引」。<2618>

<1217bis> **In dubio praesumitur testem falsum deposuisse potius per errorem et ignorantiam quam dolo.** [Praesūmitur testem dēpōsuisse falsum per errōrem et ignōrantiam potius, quam dolo, in dubiō.] 「疑問のある [こと] に於いては、証人が、悪意に依るといふよりも、むしろ誤まりと不知を通じて、偽りの [こと] を言ったものと推定される。」<deposuisse>…<depono> [おく] の 𠄎𠄎、<falsum>…<falsus> [偽りの] の 𠄎𠄎𠄎 (名略)、<ignorantiam>…<ignorantia> [不知] の 𠄎𠄎。※<praesumitur>にひかれた対格不定法の構文が見える。対格形の<testem>は、意味上の主語として、<deposuisse>にかかる。𠄎𠄎→<35>。<In dubio・dubiis>論→「索引」

<1218> **In dubio pro lege fori.** [Prō lēge forī in dubiō] (Meil. I nt. L. 151) 「疑問のある [こと] に於いては、法廷の法律 (法) に有利に。」<fori>…<forum> [法廷] の 𠄎𠄎。※<In dubio・dubiis>論→「索引」

<1219> **In dubio pro libertate.** [Prō libertāte in dubiō.] (Pomp. D. 50, 17, 20) 「疑問のある [こと] に於いては、自由 [身分] に有利に。」<libertate>…<libertas> [自由] の 𠄎𠄎。※ちなみに、<1206><In dubiis non praesumitur pro testamento.> [疑問のある [こと] においては、遺言に有利には推定はなされない。] とあるので、対象によって微妙に扱いが異なるわけである。<In dubio・dubiis>論→「索引」

<1220> **In dubio pro possessore.** [Prō possessōre in dubiō.] (Ulp. D. 50, 17, 126, 2) 「疑問のある [こと] に於いては、占有者に有利に。」※<In dubio・dubiis>論→「索引」。<238>・<1267>・<1268>・<1816>・<2639>

<1221> **In dubio pro reo (judicandum est).** [(Est iudicandum) prō reō in dubiō.] (Paul. D. 44, 7, 47; D. 42, 1, 38pr.; Ulp. D. 48, 19, 5pr.; Gai. D. 50, 17, 125; Aristoteles, Prob. Phy. 29, 13; Aegidius Bossi, Tractatus varii: Titulus de favoribus defensionibus, 2) 「疑問のある [こ

と]に於いては、被告(被告人)に有利に[判断されるべきである。]<judicandum>…<judico>[判断する]の動形<judicandus>[判断されるべき[である]]の單甲国。※動形→<1>。<est judicandum>は、非人称的な表現である→<265>。<In dubio・dubiis>論→「索引」。<543>

<1222> **In dubio sequendum quod tutius est.**[Quod est tūtius, sequendum in dubiō.]「疑問のある[こと]に於いては、いっそう安全である[ことに]従うべき[である。]<tutius>…<tutus>[安全な]の動形<tutior>の單甲国、<sequendum>…<sequor>[したがう]の動形<sequendus>[従われるべき[である]]の單甲国。※動形→<1>。本動詞が省略されている。<In dubio・dubiis>論→「索引」

<1223> **In dubio semper id, quod minus est, debetur.**[Id, quod est minus, debētur in dubiō semper.] (*Ulp.D.50,17,9*)「疑問のある[こと]に於いては、いっそう少ないものが常に負われる。」※<id, quod>は、先行詞と関係代名詞の組みあわせであるが、先行詞の<id>が見えているのは比較的珍しいことである。<In dubio・dubiis>論→「索引」

<1223bis> **In emptis et venditis potius id quod actum, quam id quod dictum sit, sequendum est.**[Id, quod actum, potius, quam id, quod sit dictum, est sequendum, in emptis et venditis.]「購入と売却に於いては、言われたことよりも、むしろなされたことに従うべきである。」<sequendum>…<sequor>[したがう]の動形<sequendus>[したがわれるべき[である]]の單甲国、<emptis>…<emptum>[購入]の複奪、<venditis>…<venditum>[売却]の複奪。

<1224> **In eo, quod plus sit, semper inest et minus.**[Et minus inest in eō, quod sit plūs, semper.] (*Paul.D.50,17,110pr. ; Lab.D.32,29,1*)「いっそう多い[もの]の中には、常に、いっそう少ない[もの]も内在する。」<inest>…<insum>[内在する]の動形。※「大(多)と小(少)」→「索引」。<487>—<489>・<1224>・<2592>

<1225> **In eo, quod vel is qui petit vel is a quo petitur lucri facturus est, durior est causa petitoris.**[Causa petitoris est dūrior in eō, quod vel is, qui petit, vel is, a quō petitur, est facturus lucrī.] (*Pomp.D.50,17,33*)「請求する人かあるいは請求を受ける人かのどちらかが利益を得ることになることに於いては、請求者の状況はいっそう不利である。」<petitoris>…<petitor>[請求者]の單属、<durior>…<durus>[不利な]の動形<durior>の單甲国、<facturus>…<facio>[つくる]の見出し語未来分詞。※<lucri facio aliquid>は、熟語で、「あるものをもうける」を意味する。一方、属格の<lucri>ではなく、ストレートに対格の<lucrum>を用いて、<lucrum facio>[利益をつくる]という表

現の登場する法源もある。〈vel ~ vel〉は相関語である。「未来分詞」→〈649〉・「索引」

〈1226〉 **In excusatione accusatio.** [Accūsātiō in excūsātiōne.]
「弁解の中に告訴が[ある]。」「excusatione」…〈excusatio〉[弁解]の ㊦㊧。
※本動詞が省略されている。

〈1227〉 **In expositione instrumentorum, mala grammatica, quod fieri possit, vitanda est.** [Grammatica mala est vitanda in expositione instrumentorum, quod possit fieri.] (6 Co.Rep.39b; 2 Pars.Cont.26)「文書の解釈に於いては、誤まった用語法は、なされることが可能な限り、避けられるべきである。」「grammatica」…「文法」、〈vitanda〉…〈vito〉[さける]の ㊦㊧〈vitandus〉[さけられるべき[である]]の ㊦㊧、〈expositione〉…〈expositio〉[解釈]の ㊦㊧、〈instrumentorum〉…〈instrumentum〉[道具]の ㊦㊧。※ ㊦㊧→〈1〉。〈quod〉は、関係代名詞ではなく、接続詞の役割をする。「～するかぎりにおいて」の意味である。これを見分けるのはむずかしい。この表現は、「関係の対格」に由来するもので、「～ということにかんして」・「～という点で」などの本来の意味は、「～すること」という意味の接続詞へと変わっていくのであるが、実際のところ、両者のあいだには、かなり距離がある。

〈1228〉 **In facto quod se habet ad bonum et malum, magis de bono quam de malo lex intendit.** [Lēx intendit dē bonō magis, quam dē malō, in factō, quod sē habet ad bonum et malum.] (Co.Litt.78b)「良い[こと]および悪い[こと][の双方]に関係する行為に於いては、法律(法)は、悪い[こと]によりも、むしろ良い[こと]に基づいて動く。」「intendit」…〈intendo〉[つなぐ]の ㊦㊧、〈se habet〉…〈se habeo〉[状況にある]の ㊦㊧。※「良いと悪い」→「索引」

〈1229〉 **In favorabilibus magis attenditur quod prodest, quam quod nocet.** [Quod prōdest, attenditur magis, quam, quod nocet, in favōrābilibus.] (Pap.D.46,5,8pr.; 11 Co.Rep.512,85b; Broom, Max.78; Bac.Max.Reg.57,12)「有利な[こと]に於いては、不利益を生じさせる[もの]よりも、むしろ、利益となる[ものが]、考慮される。」「prodest」…〈prosum〉[役だつ]の ㊦㊧、〈attenditur〉…〈attendo〉[のばす]の ㊦㊧、〈nocet〉…〈noceo〉[害する]の ㊦㊧、〈favorabilibus〉…〈favorabilis〉[有利な]の ㊦㊧(名略)。※「利益(利得)と損失(損害・不利益・危険・負担・責)」→「索引」

〈1230〉 **In favorem vitae, libertatis et innocentiae omnia praesumuntur.** [Omnia praesūmuntur in favōrem vītae, libertātis et innocentiae.] (Lofft,125)「すべての[こと]は、生命、自由、無実には有

利に推定される。」〈favorem〉…〈favor〉[好意]の ㊦、〈vitae〉…〈vita〉[生命]の ㊦、〈libertatis〉…〈libertas〉[自由]の ㊦、〈innocentiae〉…〈innocentia〉[無実]の ㊦。

<1231> **In fictione juris semper aequitas existit(exsistit).** [Aequitās existit(exsistit) in fictiōne jūris semper.] (10 Co.Rep.51a; Broom,Max.78,127,130)「法の擬制の中には常に衡平が現われる。」〈existit(exsistit)〉…〈existo(exsisto)〉[現われる]の ㊦、〈fictione〉…〈fictio〉[擬制]の ㊦。※「法と衡平」→「索引」、「タテマエ(法)とホンネ(衡平)」→「索引」。<1652>

<1232> **In fraudem legis facit, qui salvis verbis legis sententiam ejus circumvenit.** [Quī circumvenit sententiam ejus, verbis legis salvīs, facit in fraudem legis.] (Paul.D.1,3,29)「法律(法)の文言には触れずにその趣旨を危うくする[人は]、法律(法)を欺く行動をする。」〈circumvenit〉…〈circumvenio〉[欺く]の ㊦、〈salvis〉…〈salvus〉[安全な] ㊦、〈fraudem〉…〈fraus〉[欺瞞]の ㊦。※絶対的奪格の構文が見える。「名詞(verbis)プラス形容詞(salvis)」型で、その意味は「～しながら」である。㊦→<1>、「タテマエ(文言)とホンネ(趣旨)」→「索引」。

<1233> **In generalibus latet error.** [Error latet in generalibus.] (1 Cush.Mass.292)「誤まりは一般的な[こと]の中に隠れている。」〈latet〉…〈lateo〉[隠れる]の ㊦。※〈latet〉のところに〈versatur〉が入る命題もある。〈versatur〉は ㊦〈versor〉[ある]の ㊦(㊦)である。

<1234> **In genere quicumque aliquid dicit, sive actor sive reus, necesse est ut probet.** [Est necesse in genere, ut, quicumque, sive actor sive reus, dicit aliquid, probet.] (Best.Ev.§252)「一般的に、あることを主張する[人]の誰でも、それが原告であっても、被告であっても、証明することが、必要である。」〈necesse〉…「必要な」(不変化詞)。※「原告と被告」→「索引」

<1235> **In heredes non solent transire actiones quae poenales ex maleficio sunt.** [Actionēs, quae sunt poenales ex maleficio, non solent transire in heredes.] (Gai.D.50,17,111,1; 2 Co.Inst.442)「悪事に基いて罰金的なものである訴権が相続人を相手方としては移転しないのが、慣わしである。」〈maleficio〉…〈maleficio〉[悪事]の ㊦、〈solent〉…〈soleo〉[～するのがならわしである]の ㊦、〈transire〉…〈transeo〉[移る]の ㊦。※〈soleo〉は補足不定法をひく→<171>。

<1235bis> **In heredis arbitrium conferri an debeat non potest.** [An debeatur, non potest conferri in arbitrium heredis.]「[遺

贈の支払が] 負われているかどうかについては、相続人の裁量に委ねられることは出来ない。」<conferri>…<confero> [はこぶ] の ㊦㊧、<arbitrium>…<arbitrium> [裁量] の ㊦㊧。

<1235ter> **In his quae contra rationem juris constituta sunt, non possumus sequi regulam juris.** [Nōn possumus sequī rēgulam jūris in hīs, quae sunt cōstitutā contrā ratiōnem jūris.] 「私たちは、法の理に反して設定されたことに於いては、法の準則に従うことはできない。」<regulam>…<regula> [法範] の ㊦㊧、<constituta>…<constituo> [定める] の ㊦㊧<constitutus>の ㊦㊧ (受動相完了の構成要素)。

<1236> **In his quae de jure communi omnibus conceduntur, consuetudo alicujus patriae vel loci non est alleganda.** [Cōnsuetūdō patriae vel locī alicūjus nōn est allēganda in hīs, quae conceduntur omnibus dē jūre commūnī.] (11 Co.Rep.85b) 「普通法上すべての [人] に許されていることに於いては、ある国家あるいは土地の慣習は主張されるべきではない。」<patriae>…<patria> [祖国] の ㊦㊧、<alleganda>…<allego> [主張する] の ㊦㊧<allegandus> [主張されるべき [である]] の ㊦㊧、<conceduntur>…<concedo> [許す] の ㊦㊧。

※ ㊦㊧→<1>

<1237> **In his quae sunt favorabilia animae, quamvis sunt damnosa rebus, fiat aliquando extensio statuti.** [Extēnsiō statūtī fiat in hīs, quae sunt favōrabilia animae, quamvis sunt damnōsa rēbus, aliquandō.] (10 Co.Rep.101b) 「[法律 (法) の] 精神にとって望ましいことに於いては、たとえそれが事物に対して害を生じさせるものであっても、ときには、法規の拡大 [解釈] がなされるべきである。」<extensio>… [拡大]、<statuti>…<statutum> [制定法] の ㊦㊧、<favorabilia>…<favorabilis> [好意的な] の ㊦㊧、<animae>…<anima> [心] の ㊦㊧、<damnosa>…<damnosus> [有害な] の ㊦㊧。

<1238> **In individuīs minor relevat majorem.** [Minor relevat majōrem in individuīs.] (Paul.D.8,6,10pr.) 「不可分の [こと] に於いては、(いっそう) 年少の [人] は (いっそう) 年長の [人] を解放する。」<relevat>…<relevo> [軽くする] の ㊦㊧、<individuīs>…<individuus> [分けられない] の ㊦㊧ (名略)。

<1239> **In infinitum in jure reprobatur.** [Reprobātur in infinitum in jūre.] (4 Co.Rep.45) 「法に於いては、無限の [こと] に対しては、拒絶がなされる。」<reprobatur>…<reprobo> [許さない] の ㊦㊧、<infinitum>…<infinitus> [無限の] の ㊦㊧ (名略)。

<1240> **In iudicando criminosa est celeritas.** [Celeritās est criminōsa in iudicandō.] (Syr.369)「裁判することに於いては、拙速は犯罪的である。」<celeritas>…「迅速」、<criminosa>…<crimosus> [犯罪的な] の 罫 罫 罫、<iudicando>…<iudico> [裁判する] の 罫 罫 <iudicandum> の 罫 (罫)。※ 罫 罫 → <1>。<596>・cf.<1574>

<1241> **In iudiciis minori aetati succurritur.** [Succurritur aetati minōri in iudiciis.] (Jenk.Cent.Cas,46,89)「裁判に於いては、(いっそう) 年少の [人] には助けが与えられる。」<succurritur>…<succurro> [助ける] の 罫 罫 罫 罫、<aetati>…<aetas> [年令] の 罫 罫。※ 「自動詞の受動相」 → <59>

<1242> **In iudiciis non est acceptio personarum habenda.** [Acceptiō persōnarum nōn est habenda in iudiciis.] (Lib.Sex.5,13,12)「裁判に於いては、人の [好意的な] 扱いはなされるべきではない。」<acceptio>…「うけいれ」、<habenda>…<habeo> [扱う] の 罫 罫 <habendus> [扱われるべき [である]] の 罫 罫 罫。※ 罫 罫 → <1>。<2422>

<1243> **In iudicio non creditur nisi juratis.** [Nōn crēditur nisi iurātis in iudiciō.] (Cro.Car.64)「裁判に於いては、宣誓された [こと] 以外は、信じられない。」<creditur>…<credo> [信ずる] の 罫 罫 罫 罫、<juratis>…<juratus> [宣誓した] の 罫 罫 罫 (罫 略)。※ <juratis> を「宣誓者」という名詞 (複数与格形) ととれば、意味は「事物」から「人」へと変わる。「自動詞の受動相」 → <59>・「索引」。<1494>

<1244> **In iure non remota causa, sed proxima spectatur.** [Nōn causa remōta, sed proxima, spectātur in iure.] (Bac.Max.Reg.1)「法に於いては、遠い原因でなくて、最も近い [原因] が考慮される。」<remota>…<remotus> [遠い] の 罫 罫 罫、<spectatur>…<specto> [考慮する] の 罫 罫 罫 罫。※ <non ~, sed> は関連語である。

<1245> **In iure omnis de finitio periculosa est.** [Dēfinitio omnis est periculōsa in iure.] (Jav.D.50,17,202)「法に於いては、定義は、すべて、危険である。」<definitio>…「定義」、<periculosa>…<periculosus> [危険な] の 罫 罫 罫。

<1246> **In legibus magis simplicitas quam difficultas placet.** [Simplicitās placet magis, quam difficultās, in lēgibus.] (I.J.2,23,7)「法律 (法) に於いては、複雑さよりもむしろ単純さが良いものとされる。」<simplicitas>…「単純さ」、<difficultas>…「複雑さ」。※ <placet> には、法学者などの個人的見解を示す、「~という説である」の意味がある。これに対して、完了三人称単数の形の <placuit> には、「支配的な説である」とか、「通説である」とかの、専門用語としての意味がある。<magis ~

…「救済」、〈novum〉…〈novus〉[新しい]の𠩺𠩺𠩺、〈apponendum〉…〈appono〉[そえる]の𠩺𠩺𠩺〈apponendus〉[そえられるべき[である]]の𠩺𠩺𠩺、〈novo〉…〈novus〉の𠩺𠩺𠩺。※𠩺𠩺𠩺→〈1〉

〈1254〉 **In nummis non tam corpora ipsa quae solventur considerantur, quam quantitas, quae ex his efficitur.** [Corpora ipsa, quae solventur, nōn tam, quam quantitās, quae efficitur ex his, considerantur in nummis.] (*Pap.D.46,3,94,1*; *Pomp.D.12,6,19,2*) 「金銭に於いては、支払われる物自体というよりも、むしろ、それからもたらされる量が考慮される。」〈corpora〉…〈corpus〉[物]の𠩺𠩺𠩺、〈quantitas〉…「量」、〈efficitur〉…〈efficio〉[もたらす]の𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺、〈considerantur〉…〈considero〉[考慮する]の𠩺𠩺𠩺𠩺、〈nummis〉…〈nummus〉[金銭]の𠩺𠩺。※〈non tam ~ quam〉は関連語である。

〈1255〉 **In obscura voluntate manumittentis favendum est libertati.** [Est favendum libertātī in voluntāte obscurā manūmittentis.] (*Paul.D.50,17,179*) 「[奴隷を]解放する[人]の意思が不明瞭な場合には、自由[身分付与]に有利に取扱うべきである。」〈favendum〉…〈faveo〉[優遇する]の𠩺𠩺𠩺〈favendus〉[優遇するべき[である]]の𠩺𠩺𠩺、〈libertati〉…〈libertas〉[自由]の𠩺𠩺、〈obscura〉…〈obscurus〉[明らかではない]の𠩺𠩺𠩺、〈manumittentis〉…〈manumitto〉[解放する]の𠩺𠩺𠩺〈manumittens〉の𠩺𠩺𠩺(名略)。※𠩺𠩺𠩺→〈1〉、自動詞の𠩺𠩺𠩺→〈59〉・「索引」。〈in obscura voluntate〉という「形容詞の訳しかた」→〈55〉・〈710〉・「索引」、*「言いかえの訳しかた」*→「索引」。

〈1256〉 **In obscuris inspici solere quod verisimilius est, aut quod plerumque fieri solet.** [Quod est vērīsimilius, aut quod sol et fieri plērūmque, solēre inspici in obscurīs.] (*Paul.D.50,17,114*; *Wing.Max.177*) 「明らかではない[こと]に於いて、比較的在りそうな[こと]、あるいは、一般に生ずるのが慣わしである[ことが]吟味されるのが慣わしであること。」〈verisimilius〉…〈verisimilis〉[ありそうな]の𠩺𠩺𠩺〈verisimilior〉の𠩺𠩺𠩺、〈inspici〉…〈inspicio〉[吟味する]の𠩺𠩺𠩺、〈obscuris〉…〈obscurus〉[明らかではない]の𠩺𠩺𠩺(名略)。※本動詞はなく、不定法止になっている。〈soleo〉は補足不定法をひく→〈171〉。「不定法止」→「索引」

〈1257〉 **In obscuris minimum est sequendum.** [Minimum est sequendum in obscurīs.] (*Ulp.D.50,17,9:34*; *Lib.Sex.,5,13,30*) 「明らかでない[こと]に於いては、最小の[こと]に従うべきである。」〈sequendum〉…𠩺𠩺𠩺〈sequor〉[したがう]の𠩺𠩺𠩺〈sequendus〉[したがわれるべき[である]]の𠩺𠩺𠩺、〈obscuris〉…〈obscurus〉[明らかでない]の𠩺𠩺𠩺

甲奪(名略)。※勳形→〈1〉、〈In dubio・dubiis〉論→「索引」。〈1223〉
・〈1366〉

〈1258〉 **In obscuris quod minimum est sequimur.** [Sequimur, quod est minimum, in obscūrīs.] (*Ulp.D.50,17,9*; 2 Kent.Com.557) 「明らかでない[こと]に於いては、私たちは最小の[ことに]従う。」〈obscuris〉…〈obscurus〉[明らかでない]の覆甲奪(名略)。※〈In dubio・dubiis〉論→「索引」

〈1259〉 **In odium spoliatoris omnia praesumuntur.** [Omnia praesumuntur in ōdium spoliātōris.] (*Gai.I.4,4*; 11 Vern.19; Bac.Max.Reg.939) 「すべての[こと]は略奪者に不利となる方向で推定される。」〈odium〉…〈odium〉[敵対]の罽罽、〈spoliatoris〉…〈spoliator〉[略奪者]の罽罽。〈2430〉

〈1260〉 **In omni actione ubi duae concurrunt districtiones, videlicet in rem et in personam, illa districtio tenenda est quae magis timetur et magis ligat.** [Dīstrīctiō illa, quae timētur magis et ligat magis, est tenenda, in āctiōne omnī, ubī dīstrīctiōnēs duae, vidēlicet in rem et in persōnam, cōcurrunt.] (*Bract.102,372*) 「二つの苦難——つまり、対人の[もの]と対物の[もの]——が競合するあらゆる訴訟に於いては、むしろ恐れられ、またむしろ拘束するあの[一つの]苦難が保持されるべきである。」〈districtio〉…「苦難」、〈timetur〉…〈timeo〉[恐れる]の罽罽罽罽、〈ligat〉…〈ligo〉[拘束する]の罽罽罽、〈tenenda〉…〈teneo〉[保持する]の勳形〈tenendus〉[保持されるべき[である]]の罽罽罽、〈districtiones〉…さきの〈districtio〉の覆罽罽、〈concurrunt〉…〈concurro〉[競合する]の罽罽罽。※勳形→〈1〉、「対人と対物」→「索引」。

〈1261〉 **In omnibus contractibus, sive nominatis sive innominatis, permutatio continetur.** [Permūtātiō continētur in contractibus omnibus, sive nōminātīs sive innōminātīs.] (2 Bl.Com.444, Note) 「有名[契約]であれ、無名[契約]であれ、すべての契約の中に、交換が含まれる。」〈permutatio〉…「交換」、〈continetur〉…〈contineo〉[含む]の罽罽罽罽、〈nominatis〉…〈nominatus〉[名称のある]の覆罽罽罽(名略)、〈innominatis〉…〈innominatus〉[名称のない]の覆罽罽罽(名略)。※〈sive ~ sive〉は関連語である。「有名契約と無名契約」→「索引」、「タテマエ(有名契約)とホンネ(無名契約)」→「索引」。

〈1262〉 **In omnibus fere minori aetati succurritur.** [Succurritur aetātī minōrī in omnibus ferē.] 「ほとんどすべての[こと]に於いて、(いっそうの)年少性に助けが与えられる。」〈succurritur〉…〈succu

ro> [助ける] の ㊦ ㊧ ㊨ ㊩、<aetati>…<aetas> [年令] の ㊪ ㊫。※「自動詞の受動相」→<59>・「索引」

<1263> **In omnibus fere poenalibus judiciis, et aetati et imprudentiae succurritur.** [Succurritur et aetātī et imprudentiae in jūdiciīs poenālibus omnibus ferē.] (*Paul.D.50,17,108*; Broom,Max.214)「ほとんどすべての罰金訴訟に於いて、[低]年令にも不注意にも助けが与えられる。」<succurritur>…<succurro> [助ける] の ㊦ ㊧ ㊨ ㊩、<aetati>…<aetas> [年令] の ㊪ ㊫、<imprudentiae>…<imprudentia> [不注意] の ㊬ ㊭。※<et ~ et>は相関語である。「自動詞の受動相」→<59>・「索引」

<1264> **In omnibus obligationibus, in quibus dies non ponitur, praesenti die debetur.** [Dēbētur diē praesentī in obligatiōnibus omnibus, in quibus diēs nōn pōnitur.] (*Pomp.D.50,17,14*)「期日が定められていないあらゆる債務関係に於いて、その当日に債務が負われる。」<die>…<dies> [期日] の ㊮ ㊯、<praesenti>…<praesens> [目下の] の ㊰ ㊱ ㊲、<ponitur>…<pono> [定める] の ㊦ ㊧ ㊨ ㊩。

<1265> **In omnibus quidem, maxime tamen in jure, aequitas spectanda sit.** [Aequitās sit spectanda in omnibus quidem, tamen in jūre māximē.] (*Paul.D.50,17,90*; Story,Bailm.§257)「衡平は確かにあらゆる[こと]に於いて考慮されるべきであろうが、それでもやはり、とりわけ法においてそうである。」<spectanda>…<specto> [考慮する] の ㊳ ㊴<spectandus> [考慮されるべき[である]] の ㊵ ㊶ ㊷。※ ㊳ ㊴→<1>、「法律(法)と衡平」→「索引」、「タテマエ(法)とホンネ(衡平)」→「索引」。

<1266> **In pari causa possessor potior haberi debet.** [Possessor dēbet haberī potior in causā parī.] (*Paul.D.50,17,128pr.*; Broom,Max.714)「同等な状況に於いては、占有者がいっそう優位にあると考えられるべきである。」<pari>…<par> [同等の] の ㊸ ㊹ ㊺。

<1267> **In pari delicto vel causa potior est conditio possidentis (defendentis).** [Conditio possidentis (defendentis) est potior in dēlictō parī vel causā.] (*Ulp.D.50,17,154*; Lib.Sex.5,13,65; L.R.7.Ch.473; Broom,Max.290,721; 3 Fed.Cas.191; 4 Term.504)「同等の不法行為あるいは状況に於いては、占有する[人](被告)の状況はいっそう強い。」<possidentis>…<possideo> [占有する] の ㊻ ㊼<possidentis> の ㊽ ㊾ ㊿ (名略)、<defendentis>…<defendo> [防ぐ] の ㊻ ㊼<defendens> の ㊽ ㊾ ㊿ (名略)、<pari>…<par> [同等の] の ㊸ ㊹ ㊺。<238>・<1220>・<1268>・<1816>・<2639>

<1268> **In pari turpitudine melior est causa possidentis.** [Causa possidentis est melior in turpitudine parī.] (*Ulp.D.3,6,5,1*)「同等の恥辱に於いては、占有する〔人〕の状況はいつそう良い。」<possidentis>…<possideo>〔占有する〕の 𠄎𠄎<possidens>の 𠄎𠄎𠄎 (名略)、<turpitudine>…<turpitudō>〔恥辱〕の 𠄎𠄎、<pari>…<par>〔同等の〕の 𠄎𠄎。<238>・<1220>・<1267>・<1816>・<2639>

<1269> **In parvulis nulla deprehenditur culpa.** [Culpa nūlla deprehenditur in parvulis.] (*Marci.D.40,5,55,1*)「ごく小さい〔こと〕に於いては、なんらの過失も認定されない。」<deprehenditur>…<deprehendo>〔とらえる〕の 𠄎𠄎𠄎、<parvulis>…<parvulus>〔ごく小さい〕の 𠄎𠄎 (名略)。

<1270> **In personam actio est, qua cum eo agimus, qui obligatus est nobis ad faciendum aliquid vel dandum.** [Actiō in personam est, qua agimus cum eō, quī est obligātus nōbīs ad faciendum vel dandum aliquid.] (*Ulp.D.44,7,25pr.*; *Brac.101b*)「対人訴権は、私たちにあることをなすことあるいは与えることを義務づけられた人を相手方として私たちが訴える際の〔手だて〕である。」<faciendum>…<facio>〔なす〕の 𠄎𠄎<faciendus>〔なされるべき〔である〕〕の 𠄎𠄎 (名略)、<dandum>…<do>〔与える〕の 𠄎𠄎<dandus>〔与えられるべき〔である〕〕の 𠄎𠄎 (名略)。※ 𠄎𠄎→<1>。<ad faciendum vel dandum aliquid>中の<faciendum>と<dandum>は、動名詞(「〔あることを〕なすこと」と「〔あることを〕与えること」と理解することも可能である。『新ラテン文法』§597を参照。いずれにしても、日本語訳では、動名詞風のさりりとしたものになる。「動形容と動名詞の密接な関係」→<1153>・<1540>

<1271> **In personam servilem nulla cadit obligatio.** [Obligatiō nūlla cadit in personam servilem.] (*Ulp.D.50,17,22pr.*)「いかなる債務も奴隷の人格には関係しない。」<cadit>…<cado>〔落ちる〕の 𠄎𠄎、<servilem>…<servilis>〔奴隷の〕の 𠄎𠄎。

<1272> **In poenailbus causis benignius interpretandum est.** [Est interpretandum benignius in causis poenailibus.] (*Paul.D.50,17,155,2*; *Plowd.86b,124*; *2 Hale,P.C.365*)「罰に関する状況に於いては、いつそう緩やかに解釈がなされるべきである。」<interpretandum>… 𠄎<interpretor>〔解釈する〕の 𠄎𠄎<interpretandus>〔解釈されるべき〔である〕〕の 𠄎𠄎、<benignius>…<benigne>〔ゆるやかに〕の 𠄎。※ 𠄎→<1>、<In dubio・dubiis>論→「索引」。

<1273> **In poenam heres non succedit.** [Hērēs nōn succēdit in poenam.] (*Marce.D.39,1,22*)「相続人は罰を承継しない。」<succedit>

…<succedo> [承継する] の ㊦ ㊧ ㊨。<1081>・<1085>・<1295>・<2605>

<1274> **In poenis benignior est interpretatio facienda.** [Interpretatiō benignior est facienda in poenis.] (*Paul.D.50,17,155,2; Lib.Sex.5,13,49*) 「罰に於いては、いっそう緩やかな解釈がなされるべきである。」<benignior>…<benignus> [ゆるやかな] の ㊦<benignior>の ㊨ ㊩、<facienda>…<facio> [なす] の ㊦ ㊧<faciendus> [なされるべき [である]] の ㊨ ㊩ ㊪。※ ㊦ ㊧ →<1>、<In dubio・dubiis>論 → 「索引」。

<1275> **In positivis non licet argumentari a pari.** [Nōn licet argumentārī ā parī in positivis.] 「実定的な [こと] に於いては、同等の [もの] から論証がなされることは、許されない。」<argumentari>… ㊦<argumentor> [論証する] の ㊦ ㊧ (㊨)、<pari>…<par> [等しい] の ㊨ ㊩ ㊪ (㊫ ㊬) (㊭ ㊮) (㊯) (㊰) (㊱) (㊲) (㊳) (㊴) (㊵) (㊶) (㊷) (㊸) (㊹) (㊺) (㊻) (㊼) (㊽) (㊾) (㊿) (名略)。

<1276> **In praeparatoriis ad iudicium favetur actori.** [Favētur āctōrī ad iūdicium in praeparātōriis.] (2 Co.Inst.57) 「裁判への準備的な [手続] に於いては、原告に有利な取扱がなされる。」<favetur>…<faveo> [優遇する] の ㊦ ㊧ ㊨ ㊩、<praeparatoriis>…<praepparatorius> [準備の] の ㊦ ㊧ ㊨ ㊩ (㊪) (㊫) (㊬) (名略)。※ 「自動詞の受動相」 →<59>

<1277> **In praesentia majoris cessat potentia minoris.** [Potentia minōris cēssat in praesentiā mājōris.] (Jenk.Cent.214) 「(いっそう) 上位の [人] の面前では、(いっそう) 下位の [人] の権能は止む。」<potentia>… 「権能」、<cessat>…<cesso> [やむ] の ㊦ ㊧ ㊨、<praesentia>…<praesentia> [面前] の ㊨ ㊩ ㊪。※<majoris>の位置に<majoris potestatis> [(いっそう) 大きい権力の] (<potestatis>は<potestas> [権力] の ㊨ ㊩ ㊪) が入り、同時に、<potentia minoris>の位置に<minor potestas> [(いっそう) 小さい権力] が入ってくる命題もある。「上位と下位」 → 「索引」

<1278> **In praesumptione juris semper aequitas existit.** [Aequitās existit in praesumptiōne jūris semper.] 「法の推定に於いては、常に衡平が現われる。」<existit>…<existo> [でてくる] の ㊦ ㊧ ㊨。※ 「タテマエ (法律 (法)) とホンネ (衡平)」 → 「索引」

<1279> **In praeteritum non vivitur.** [Nōn vivitur in praeteritum.] (C.J.2,4,8) 「人は過去に向かっては生きない。」<vivitur>…<vivo> [生きる] の ㊦ ㊧ ㊨ ㊩、<praeteritum>…<praeteritum> [過去] の ㊨ ㊩ ㊪。※日本語の語感からすると、<vivo> [生きる] に受動相がある、というのは少し妙であるが、<eo> [行く] にも受動相の<itur> [人が行く・行く人がある] という表現があるように、この手の受動相は、「誰がするのか?」ということではなくて、行為・行動に焦点をあわせた、非人称的な、やわ

らかい表現法として、それなりに便利なところをもっている。ところで、この命題を法格言として読むと、たとえば、「過去にさかのぼって扶養を請求するようなことは認められない」といった趣旨のものにもなつてこよう。とにかく、ラテン語では、頭をやわらかくして読み解きにとりかかって頂く必要がある。近代欧米語の文法は、時代の流れとともに精密になっていき、原理・原則を大切にする一方で、例外的なものは外側へと追いやっていく傾向が強いのであるが、古代語であるラテン語は、ギリシア語などの場合と同じように、もやもやとしたところを多くもっていた。この点で、日本語のもつ、どこかフアジーな雰囲気とも似通っている、と言えなくもない。

<1280> **In pretio emptiois et venditionis, naturaliter licet contrahentibus se circumvenire.** [Licet contrāhentibus circumvenire sē in pretiō emptiōnis et vēnditiōnis nātūrāliter.] (*Ulp.D.4,4,16,4*; 1 Story, Cont.606) 「購入および売却の価格については、売買を締結する〔人々〕が自らを欺くことが当然許されている。」<contrahentibus>…<contraho> [契約する] の 𐀀𐀁𐀃<contrahens>の 𐀀𐀁𐀃𐀄 (名略)、<circumvenire>…<circumvenio> [欺く] の 𐀀𐀁𐀃、<pretio>…<pretium> [代価] の 𐀀𐀁𐀃。 ※「契約の実相」→「索引」

<1281> **In propria causa nemo iudex.** [Nēmō jūdex in causā propria.] (*C.J.3,5,1*; 12 Co.Rep.13) 「誰も、自身の事案に於いては、裁判官ではな〔い〕。」 ※動詞が省略されている。

<1282> **In publicis nihil est lege gravius; in privatis firmissimum est testamentum.** [Nihil est gravius lēge in pūblicis; tēstāmentum est firmissimum in prīvātis.] (*Cic.Phil.2,42,109*) 「公的な〔こと〕に於いては、法律(法)よりもいっそう重いものは、なんらな。他方で、私的な〔こと〕においては、遺言が最も強力である。」<gravius>…<gravis> [重い] の 𐀀𐀁𐀃<gravior>の 𐀀𐀁𐀃𐀄、<firmissimum>…<firmus> [強固な] の 𐀀𐀁𐀃<firmissimus>の 𐀀𐀁𐀃𐀄。 ※「比較の奪格(lege)」の用法が見える→<414>。「比較の奪格」→「索引」、「公と私」→「索引」。

<1283> **In quo quis delinquit, in eo de jure est puniendus.** [Est pūniendus dē jūre in eō, in quō quis dēlinquit.] (*Co.Litt.233b*) 「ある人が犯罪を行なうその〔ところ〕に於いて、その人は法上罰せられるべきである。」<puniendus>…<punio> [罰する] の見出し語 𐀀𐀁𐀃 [罰せられるべき〔である〕]、<eo>…<is> [この(これ)] の 𐀀𐀁𐀃 (このあとに<locus> [場所] の 𐀀𐀁𐀃<loco>が省略されている)、<delinquit>…<delinquo> [犯罪を行なう] の 𐀀𐀁𐀃。 ※<quis>は<aliquis>の代用である。 𐀀𐀁𐀃→<1>。「代用型としての<quis>」→「索引」

<1284> **In re communi neminem dominorum jure facere quic**

quam, invito altero, posse. [Nēminem posse facere quicquam jūre dominōrum in rē commūnī, alterō invitō.] (*Pap.D.10,3,28*) 「共有物に於いては、誰も、他方〔の共有者〕の意思に反して、所有権者の権利によってなんらのことも行なうことが出来ないこと。」〈invito〉…〈invitus〉〔望まない〕の 罫 罫 罫。※絶対的奪格の構文が見える。「代名詞 (altero) プラス形容詞 (invito)」型で、その意味は、「～かぎりは」である。罫 罫 罫→〈1〉。隠れている動詞にひかれた対格不定法の構文が見える。対格形の〈neminem〉は、主語として、〈posse (facere)〉にかかる。罫 罫 罫→〈35〉。文章は、不定法止になっていて、本動詞はない→〈171〉。「不定法止」→「索引」、「意思に反する」→「索引」。

〈1285〉 **In re communi potior est conditio prohibentis.** [Conditio prohibentis est potior in rē commūnī.] (*Pap.D.10,3,28*; *Lib.S ex.5,13,56*) 「共有物に於いては、禁止する〔人〕の状況はいっそう強い。」〈prohibentis〉…〈prohibeo〉〔禁止する〕の 罫 罫 罫〈prohibens〉の 罫 罫 罫 (名略)。

〈1286〉 **In re dubia benigniorem interpretationem sequi non minus justius est quam tutius.** [Sequī interpretatiōnem benigniorem in rē dubiā est jūstius nōn minus, quam tūtius.] (*Marce.D.50,17,192,1*) 「疑問のある事柄に於いて、いっそう緩やかな解釈に従うことが、いっそう安全であることと同様に、いっそう公正である。」〈benigniore〉…〈benignus〉〔寛大な〕の 罫 罫 罫〈benignior〉の 罫 罫 罫、〈justius〉…〈justus〉〔公正な〕の 罫 罫 罫〈justior〉の 罫 罫 罫、〈tutius〉…〈tutus〉〔安全な〕の 罫 罫 罫〈tutior〉… 罫 罫 罫。※〈non minus ~ quam〉は比較の構文である。〈In dubio・dubiis〉論→「索引」

〈1287〉 **In re dubia magis infitatio quam affirmatio intelligenda.** [Infitiatiō magis, quam affīrmātiō, intelligenda in rē dubiā.] (*Godb.37*; *Bart.Max.127*) 「疑問のある事柄に於いては、肯定よりもむしろ否定が〔あるものと〕理解されるべき〔である〕。」〈infitatio〉…「否定」、〈affirmatio〉…「肯定」、〈intelligenda〉…〈intelligo〉〔理解する〕の 罫 罫 罫〈intelligendus〉〔理解されるべき〔である〕〕の 罫 罫 罫。※ 罫 罫 罫→〈1〉。動詞が省略されている。〈In dubio・dubiis〉論→「索引」

〈1287bis〉 **In re dubia melius est verbis edicti servire.** [Servire verbis edicti est melius in rē dūbiā.] 「疑問のある事柄に於いては、告示の文言に従うことは、いっそう良い。」〈servire〉…〈servio〉〔したがう〕の 罫 罫 罫、〈edicti〉…〈edictum〉〔告示〕の 罫 罫 罫。

〈1288〉 **In re lupanari, testes lupanares admittentur.** [Testēs lupānārēs admittentur in rē lupānārī.] (*6 Barb.(N.Y.)320,324*) 「娼

家関係の事柄に於いては、娼家の証人が認められる。」<lupanares>…<lupanaris> [娼家の] の 𠄎男国、<admittentur>…<admitto> [認める] の 𠄎現三𠄎、<lupanari>…さきの<lupanaris>の 𠄎因𠄎。

<1289> **In re pari potior est causa prohibentis.** [Causa prohibentis est potior in rē parī.] (*Pap.D.10,3,28*) 「事柄が対等となっているときには、妨げる側の [人] の状況がいっそう強い。」<prohibentis>…<prohibeo> [妨げる] の 𠄎因𠄎<prohibens>の 𠄎男𠄎(名略)、<pari>…<par> [平等な] の 𠄎因𠄎。※<constat> [確定している] にひかれた対格不定法の構文を組みこんだ命題もある。<est potior>のところが<esse potior>にかわり、<causa>が<causam>にかわり、全体に本動詞 (𠄎三𠄎) <constat> [確定している] がかかる、というようになる。 𠄎不𠄎→<35>

<1290> **In re propria iniquum admodum est alicui licentiam tribuere sententiae.** [Tribuere licentiam sententiae alicui in rē propriā est inīquum admodum.] (*C.J.3,5,1*) 「ある人に、その人自身の事案に於いて判断の自由を与えることは、まったく不衡平である。」<tribuere>…<tribuo> [与える] の 𠄎不𠄎、<licentiam>…<licentia> [自由] の 𠄎因𠄎、<iniquum>…<iniquus> [不衡平な] の 𠄎中𠄎。※不定法が主語となっている→<171>。

<1291> **In re publica maxime conservanda sunt jura belli.** [Jūra bellī sunt cōservanda in rē publicā māximē.] (2 Co.Inst.58) 「国家に於いては、戦争の法はとりわけ守られるべきである」<belli>…<bellum> [戦争] の 𠄎属𠄎、<conservanda>…<conservo> [守る] の 𠄎形𠄎<conservandus> 「守られるべき [である]」の 𠄎中𠄎。※ 𠄎形𠄎→<1>、「国際法」→「索引」。

<1292> **In rebus manifestis, errat qui auctoritates legum allegat; quia perspicue vera non sunt probanda.** [Quī allēgat auctoritatem lēgum in rēbus manifēstis, errat; quia vēra perspicūe nōn sunt probanda.] (5 Co.Rep.67a) 「明白な事柄に於いて、法律 (法) の權威を主張する [人は]、誤まる。なぜならば、明らかに真実の [こと] は証明される必要がないからである。」<allegat>…<allego> [のべる] の 𠄎三𠄎、<auctoritatem>…<auctoritas> [權威] の 𠄎因𠄎、<manifestis>…<manifestus> [明白な] の 𠄎因𠄎、<vera>…<verus> [真実の] の 𠄎中𠄎、<probanda>…<probo> [立証する] の 𠄎形𠄎<probandus> [証明されるべき [である] (証明される必要が [ある])] の 𠄎中𠄎。

<1293> **In rebus quae sunt favorabiliae animae, quamvis sunt damnosae rebus, fiat aliquando extensio statuti.** [Extēnsiō statūtī fiat in rēbus, quae sunt favōrābilīae animae, quamvīs sunt

damnōsae rēbus, aliquandō.] (10 Co.Rep.101)「事物にとって有害であるけれども、[法律(法)の]精神にとっては望ましい事物が存在している事案に於いては、制定法の拡大がときにはなされるべきである。」<extensio>…「拡大」、<statuti>…<statutum> [制定法]の 罽 罽、<favorabiliae>…<favorabilis> [有利な]の 罽 罽 (罽 罽)、<animae>…<anima> [心]の 罽 罽、<damnosae>…<damnosus> [有害な]の 罽 罽 (罽 罽)。

<1294> **In rem actio est, per quam rem nostram quae ab alio possidetur, petimus, et semper adversus eum est qui rem possidet.** [Actiō in rem est, per quam petimus rem nostram, quae possidētur ab aliō, et est adversum eum, quī possidet rem, semper.] (Ulp.D.44,7,25pr.; Brac.Fol.102)「対物訴権は、他[人]に依って占有されている私たちの物を私たちが請求するさいの手段となる[もの]で、そして、これは、常に、[その]物を占有している人を相手方としている。」<petimus>…<peto> [求める]の 罽 罽。

<1295> **In restitutionem non in poenam heres succedit.** [Hērēs succēdit in rēstitūtiōnem, nōn in poenam.] (Marce.D.39,1,22; Ulp.D.4,2,16,2; 2 Co.Inst.198)「相続人は、回復[義務]は承継するが、罰は承継しない。」<succedit>…<succedo> [承継する]の 罽 罽、<restitutionem>…<restitutio> [回復]の 罽 罽。<1081>・<1085>・<1273>・<2605>

<1296> **In restitutionibus benignissima interpretatio faciend a est.** [Interpretātiō benignissima est faciend a in rēstitūtiōnibus.] (Co.Litt.112)「返還に於いては、最も緩やかな解釈がなされるべきである。」<benignissima>…<benignus> [ゆるやかな]の 罽 罽<benignissimus>の 罽 罽、<facienda>…<facio> [なす]の 罽 罽<faciendus> [なされるべき[である]]の 罽 罽、<restitutionibus>…<restitutio> [返還]の 罽 罽。※ 罽 罽→<1>

<1297> **In satisfactionibus non permittitur amplius fieri quam semel factum est.** [Nōn permittitur fierī in satisfactiōnibus amplius, quam est factum semel.] (9 Co.Rep.53a)「補償に於いては、いったんそれ(支払)がなされた以上にそれがなされることは許されない。」<permittitur>…<permitto> [許す]の 罽 罽、<satisfactionibus>…<satisfactio> [補償]の 罽 罽。

<1298> **In societatis contractibus fides exuberat.** [Fidēs exūberat in contractibus societātis.] (C.J.4,37,3)「組合の契約には信義が溢れている。」<exuberat>…<exubero> [あふれる]の 罽 罽、<societatis>…<societas> [組合]の 罽 罽。※「信義誠実・誠意・善意」→「索引」

<1299> **In stipulationibus cum quaeritur quid actum sit, verba contra stipulatorem interpretanda est.** [Verba est interpretanda contra stipulatorem, cum quaeritur quid sit actum in stipulationibus.] (*Ulp.D.45,1,38,18*) 「問答契約に於いてなにご意図されたかが問題とされるときには、文言は要約者に不利に解釈されるべきである。」<interpretanda>…[㊦]<interpretor>の[㊦]<interpretandus> [解釈されるべき [である]] の[㊦]<stipulatorem>…<stipulator> [要約者] の[㊦]<quaeritur>…<quaero> [問題とする] の[㊦]<stipulationibus>…<stipulatio> [問答契約] の[㊦]<interpretanda>。※[㊦]<interpretanda>→<1>、「疑問代名詞」→「索引」、「文言と意図 (意思)」→「索引」、「タテマエ (文言) とホンネ (意図)」→「索引」。

<1300> **In stipulationibus id tempus spectatur quo contrahimus.** [Tempus id, quō contrahimus, spectatur in stipulationibus.] (*Paul.D.50,17,144,1*) 「問答契約に於いては、私たちが [契約を] 締結するその時点が考慮される。」<contrahimus>…<contraho> [結ぶ] の[㊦]<stipulationibus>…<stipulatio> [問答契約] の[㊦]<id tempus spectatur quo contrahimus>。※[㊦]<id tempus spectatur quo contrahimus>→「索引」。

<1301> **In suo quisque negotio hebetior est quam in alieno.** [Quisque est hebetior in negotiō suō, quam in aliēnō.] (*Co.Litt.377*) 「誰でも、他人の [仕事] に於いてよりも自身の仕事に於いて、いっそう鈍い。」<hebetior>…<hebes> [鈍い] の見出し語[㊦]。※「自身と他人」→「索引」

<1301bis> **In testamentis novissimae scripturae praevalent.** [Scripturae novissimae praevalent in tēstamentis.] 「遺言に於いては、最も新しい文書が有力である。」<scripturae>…<scriptura> [文書] の[㊦]<novissimae>…<novus> [新しい] の[㊦]<novissimus>の[㊦]<praevalent>…<praevaleo> [まさる] の[㊦]<scripturae praevalent>。

<1302> **In testamentis plenius testatoris intentionem scrutamur.** [Scrutamur intentionem tēstatoris in tēstamentis plēnius.] (*Paul.D.50,17,12*; *Broom,Max.372,555*; *3 Bulst.103*) 「私たちは、遺言に於いては、遺言者の意図をいっそう広く吟味する。」<scrutamur>…[㊦]<scrutor> [吟味する] の[㊦]<intentionem>…<intentione> [意図] の[㊦]<testatoris>…<testator> [遺言者] の[㊦]<plenius>…<plene> [広く] の[㊦]<intentionem>。

<1303> **In testamentis plenius voluntates testantium interpretantur.** [Voluntates tēstantium interpretantur in tēstamentis plēnius.] (*Paul.D.50,17,12*; *Broom,Max.555*) 「遺言に於いては、遺言す

る〔人〕の意思は比較的広く解釈される。〕〈testantium〉… ㊦〈testor〉〔遺言する〕の ㊦㊧〈testans〉の ㊦㊧㊨属（名略）、〈interpretatur〉… ㊦〈interpretor〉〔解釈する〕の ㊦㊧㊨属（㊦）、〈plenius〉…〈plene〉〔広く〕の ㊦、〈testamentis〉…〈testamentum〉〔遺言〕の ㊦㊧。※ ㊦〈interpretor〉は、デーポーネンティア動詞なので、本来ならば「彼らは解釈する」であるが、ここでは、「解釈される」という、うけとりかたにしておくことにする。「デーポーネンティア動詞（形式所相動詞）の訳しかた」→〈6〉・「索引」

〈1304〉 **In testamentis ratio tacita non debet considerari, sed verba solum spectari debent.** [Ratiō tacita nōn dēbet considerārī in tēstāmentis, sed verba sōlum dēbent spectārī.] 「遺言に於いては、隠れたかたちの意思は考慮されるべきではなくて、文言だけが考慮されるべきである。」〈tacita〉…〈tacitus〉〔黙っている〕の ㊦㊧㊨、〈considerari〉…〈considero〉〔考慮する〕の ㊦㊧㊨、〈spectari〉…〈specto〉〔見る〕の ㊦㊧㊨。※〈non ~ sed〉は関連語である。「文言と意図（意思）」→「索引」、「タテマエ（文言）とホンネ（意思）」→「索引」。

〈1305〉 **In testamento nemo sibi legem dicere potest, a qua recedere non possit.** [Nēmō potest dīcere lēgem, ā quā nōn possit recēdere, sibi in tēstāmentō.] (*Herm.D.32,22pr.*) 「遺言に於いては、誰も、自身が退くことの出来ないような条項を自身のために言明することは出来ない。」〈recedere〉…〈recedo〉〔退く〕の ㊦㊧㊨。

〈1306〉 **In toto et pars continetur.** [Et pars continētur in tōtō.] (*Gai.D.50,17,113*) 「全体〔のもの〕には部分も含まれる。」〈pars〉…「部分」、〈continetur〉…〈contineo〉〔含む〕の ㊦㊧㊨。〈212〉・〈2512〉

〈1307〉 **In traditionibus scriptorum, non quod dictum est, sed quod gestum est inspicitur.** [Nōn, quod est dictum, sed, quod est gestum, inspicitur in trāditiōnibus scrīptōrum.] (9 Co.Rep.137a; Leake,Contr.4) 「捺印証書の引渡に於いては、言われた〔こと〕ではなくて、なされた〔ことが〕考慮される。」〈gestum〉…〈gero〉〔なす〕の ㊦㊧㊨〈gestus〉の ㊦㊧㊨、〈inspicitur〉…〈inspicio〉〔見る〕の ㊦㊧㊨、〈traditionibus〉…〈traditio〉〔引渡〕の ㊦㊧、〈scriptorum〉…〈scriptum〉〔文書〕の ㊦属（名略）。※〈non ~ sed〉は関連語である。〈scriptorum〉のところに〈chartarum〉が入ってくる命題もある。〈chartarum〉は〈charta〉〔捺印証書〕の ㊦属である。

〈1308〉 **In tributis non admittitur compensatio.** [Compēnsātiō nōn admittitur in tribūtīs.] (*C.J.4,31,3*; Nic.Ev.Loc.Arg.Leg.112,2) 「租税に於いては、相殺は認められない。」〈compensatio〉…「相殺」、〈admittitur〉…〈admitto〉〔入れる〕の ㊦㊧㊨、〈tributis〉…〈tributum〉

[租税]の覆奪。

<1308bis> **In usucapionibus mobilium continuum tempus numeratur.** [Tempus continuum numeratur in usucapionibus mobilium.] 「動[産]の使用取得に於いては、継続した期間が計算される。」<continuum>…<continuus> [連続している]の罎甲罎、<numeratur>…<numero> [数える]の受罎罎罎、<usucapionibus>…<usucapio> [使用取得]の覆奪、<mobilium>…<mobilis> [動かすことができる]の覆甲罎(名略)。

<1309> **In veram quantitatem fidejussor teneatur, nisi pro certa quantitate accessit.** [Fidejussor teneatur in quantitatem veram, nisi accessit pro quantitate certa.] (Ulp.D.2,8,2,5; Bean v. Parker,17,Mass.597) 「保証人は、[特定の]確定した量を引きうけたのでない限りは、真の量へと拘束されるよう。」<fidejussor>…「保証人」、<quantitatem>…<quantitas> [量]の罎罎、<veram>…<verus> [真の]の罎罎罎、<accessit>…<accedo> [近よる]の罎罎罎、<quantitate>…さきの<quantitas>の罎罎。

<1310> **In verbis res et ratio quaerenda est.** [Res et ratio est quaerenda in verbis.] (Jenk.Cent.132) 「文言の中に、事物と意図が求められるべきである。」<ratio>…「計算」、<quaerenda>…<quaero> [求める]の動罎<quaerendus> [求められるべき[である]]の罎罎罎。※動罎→<1>、「タテマエ(文言)とホンネ(意図)」→「索引」。

<1311> **In vocibus videndum non a quo sed ad quid sumatur.** [Nōn ā quō sūmātur, sed ad quid, videndum in vōcibus.] (Ellesm. Postn.62) 「発言に於いては、それが、誰から取りだされるかではなくて、なんのために取りだされるかが、検討されるべき[である]。」<sumatur>…<sumo> [とる]の受罎罎罎、<videndum>…<video> [見る]の動罎<videndus> [見られるべき[である]]の罎甲罎、<vocibus>…<vox> [声]の覆奪。※動罎→<1>、「疑問代名詞」→「索引」、<non ~ sed>は相関語である。

<1312> **Inadimplenti non est adimplendum.** [Nōn est adimplendum inadimplenti.] 「約束を守らない[人]に対しては、約束が守られる必要はない。」<adimplendum>…<adimpleo> [守る]の動罎<adimplendus> [守られるべき[である]]の罎甲罎、<inadimplenti>…さきの<adimpleo>の罎罎<adimplens>の覆罎罎(名略)に、否定を意味する<in>がついたものである。※動罎→<1>、「ローマ法のバランス感覚・法のバランス感覚」→「索引」。<939>・<1006>

<1313> **Incaute factum pro non facto habetur.** [Factum incaute

ē habētur prō nōn factō.] (*Ulp.D.28,4,1,1*) 「[遺言作成の際] 不注意になされた [こと] は、なされなかった [こと] と扱われる。」

<1314> **Incendia plerumque fiunt culpa inhabitantium.** [Incendia fiunt culpā inhabitantium plērūmque.] (*Paul.D.1,15,3,1*) 「火災は、一般に、居住する [人] の過失によって生ずる。」<incendia>…「火災」、<inhabitantium>…<inhabito> [住む] の 現 因 <inhabitans> の 覆 因 属 (名 略) 。

<1315> **Incendium aere alieno non exuit debitorum.** [Incendium nōn exuit aere aliēnō dēbitōrum.] (*C.J.4,2,11*) 「火災は債務者の債務を消滅させない。」<incendium>…「火災」、<exuit>…<exuo> [とりさる] の 現 因 属、<aere>…<aes> [金] の 属 属。

<1316> **Incerta pro nullis habentur.** [Incerta habentur prō nullis.] (*Pomp.D.41,2,26*; *Dav.Ir.K.B.33*) 「不確定な [もの] は、存在しない [もの] と扱われる。」<incerta>…<incertus> [不確定な] の 覆 因 属 (名 略) 。

<1317> **Incerta quantitas vitiat actum.** [Quantitās incerta vitiat āctum.] (*Pomp.D.41,2,26*; 1 *Rolle,465*) 「不確定な量は捺印証書を無効とする。」<quantitas>…「量」、<incerta>…<incertus> [不確定な] の 属 因 属、<vitiat>…<vitio> [無効とする] の 現 因 属。<1318>

<1317bis> **Incertain partem possidere nemo potest.** [Nēmō potest possidēre partem incertain.] 「誰も、不確定な部分を占有することは出来ない。」<partem>…<pars> [部分] の 属 因、<incertain>…<incertus> [ふたしかな] の 属 因 属。

<1318> **Incertainudo rei vitiat actum.** [Incertainūdō rei vitiat āctum.] (*Pomp.D.41,2,26*) 「物の不確定性は [法律] 行為を瑕疵あるものとする。」<incertainudo>…「不確定さ」、<vitiat>…<vitio> [瑕疵あるものとする] の 現 因 属。<1317>

<1319> **Incivile est nisi tota lege perspecta una aliqua particula ejus proposita judicare.** [Jūdicāre, particulā aliquā ūnā ējus prōpositā, nisi lēge tōtā perspectā, est incivile.] (*Cels.D.1,3,24*; *Gr. & Rud.Of.Law,194*; *Hob.171b*) 「法全体が見通されずに、そのある一つの小部分が提示されるかたちで、判断を下すことは、不適切である。」<particula>…<particula> [小部分] の 属 属、<proposita>…<propono> [提示する] の 属 因 <propositus> の 属 因 属、<perspecta>…<perspicio> [見通す] の 属 因 <perspectus> の 属 因 属、<incivile>…<incivilis> [不適切な] の 属 因 属。※<lege perspecta>と<particula proposita>は、ともに、「名詞プラス完了分詞」型の絶対的奪格の用例で、その意味は「～する

ときに」である。㊦㊧→〈1〉。文中にいくつもある〈a〉の語尾は、長音符がついていないときには、主格の形ととてもまぎらわしい。不定法が主語となっている。「不定法」→「索引」。〈tota lege〉のところに〈tota sententia〉が、そして、〈aliqua particula〉のところに、〈aliqua parte〉が入ってくる命題もある。〈sententia〉は、〈sententia〉[判決]の㊦㊧で、〈parte〉は、〈pars〉[部分]の㊦㊧である。

〈1320〉 **Inclusio unius exclusio alterius.** [Inclūsiō ūnius exclūsiō alterius.] (Co.Ltt.210)「ただ一つの[もの]を包含することは、それ以外の[もの]を排除すること[である]。』〈inclusio〉…「包含」、〈exclusio〉…「排除」。※動詞が省略されている。〈838〉・〈860〉・〈2882〉

〈1321〉 **Incolas domicilium facit.** [Domicilium facit incolās.] (C. J. 10, 40, 7pr. ; Arnold v. U.S.Ins.Co.1 Johns.Cas.(N.Y.)356, 363, 366)「住所は住民を作る」〈domicilium〉…「住所」、〈incolas〉…〈incola〉[住民]の㊦㊧。

〈1322〉 **Incommodum non solvit argumentum.** [Incommodum nōn solvit argūmentum.]「不都合さは推論を解消させない。』〈incommodum〉…「不便」、〈argumentum〉…〈argumentum〉[推論]の㊦㊧。

〈1322bis〉 **Incorporale est quod in jure consistit.** [Quod cōnsistit in jūre, est incorporāle.]「権利から成りたっている[ものは]、無体[物]である。』〈consistit〉…〈consisto〉[なりたつ]の㊦㊧㊨、〈incorporale〉…〈incorporalis〉[無体の]の㊦㊨㊩。

〈1322ter〉 **Incorporales res traditionem et usucapionem non recipiunt.** [Rēs incorporālēs nōn recipiunt trāditiōnem et ūsūcapionem.]「無体物は引渡も使用取得も受けいれない。』〈incorporales〉…〈incorporalis〉[無体の]の㊦㊨㊩、〈recipiunt〉…〈recipio〉[うけとる]の㊦㊧㊨、〈traditionem〉…〈traditio〉[引渡]の㊦㊧、〈usucapionem〉…〈usucapio〉[使用取得]の㊦㊧。

〈1323〉 **Incorporalia bello non acquiruntur.** [Incorporālia nōn acquiruntur bellō.] (6 Maule & S.104)「無体[物]は戦争に依っては獲得されない。』〈incorporalia〉…〈incorporalis〉[形体のない]の㊦㊨㊩(名略)、〈acquiruntur〉…〈acquirō〉[える]の㊦㊧㊨㊩、〈bello〉…〈bellum〉[戦争]の㊦㊧。※「国際法」→「索引」

〈1324〉 **Inde datae leges ne fortior omnia posset.** [Lēges datae inde, nē fortior posset omnia.] (Dav.Ir.K.B.36)「かなり強い[人]があらゆる[こと]を[なすというようなことが]出来ないように、そのために法律(法)が与えられ[た。]』〈fortior〉…〈fortis〉[強い]の見出し語㊦(名略)。※動詞が省略されている。絶対的比較級の用例が見える。

「絶対的比較級・最上級」→<105>

<1325> **Indefinitum aequipollet universali.** [Indēfīnītum aequi pollet ūniversālī.] (1 Vent.368)「不定の [こと] は全体的な [こと] に等しい。」<indefinitum>…<indefinitus> [不定の] の 𐀀𐀁𐀃、<aequipollet>…<aequipolleo> [同価である] の 𐀀𐀁𐀃、<universali>…<universalis> [普通の] の 𐀀𐀁𐀃 (名略)。

<1326> **Indefinitum in jure reprobatur.** [Indēfīnītum reprobātur in jūre.] (9 Co.Rep.45; 12 Co.Rep.24)「不定の [こと] は法に於いて非難される。」<indefinitum>…<indefinitus> [不定の] の 𐀀𐀁𐀃 (名略)、<reprobatur>…<reprobo> [非難する] の 𐀀𐀁𐀃。

<1327> **Indefinitum supplet locum universalis.** [Indēfīnītum supplet locum ūniversālīs.] (Branch,Princ.; 4 Co.Rep.77)「不定の [こと] は全体的な [こと] の地位を補足する。」<indefinitum>…<indefinitus> [不定の] の 𐀀𐀁𐀃 (名略)、<supplet>…<suppleo> [補う] の 𐀀𐀁𐀃、<universalis>…<universalis> [普通の] の 𐀀𐀁𐀃 (名略)。

<1328> **Independenter se habet assecratio a viaggio navis.** [Assēcrātiō sē habet independenter ā viaggiō nāvis.] (Broom,Max.622; 3 Kent.Com.318,Note)「保険は船の航行からは独立したかたちで存在する。」<assecratio>…「保険」、<se habet>…<se habeo>「ある」の 𐀀𐀁𐀃、<viaggio>…<viaggiūm>「航行」の 𐀀𐀁𐀃、<navis>…<navis>「船」の 𐀀𐀁𐀃。

<1329> **Index animi sermo est.** [Sermō est index animī.] (Pseudo-Seneca. De Moribus, 72f.; Broom,Max.422; Paling.Zod.Vit.1,194)「言葉は思想の指標である。」<sermo>…「言葉」、<index>…「指標」、<animi>…<animus> [心] の 𐀀𐀁𐀃。※動詞が省略されている。

<1330> **Indigna digna habenda sunt quae heres facit.** [Indīgna, quae hērēs facit, sunt habenda dīgna.] (Plaut.Capt.2,1,6)「相続人がなす不面目な [こと] は、適切な [こと] [である] と扱われるべきである。」<indigna>…<indignus> [不面目な] の 𐀀𐀁𐀃 (名略)、<habenda>…<habeo> [扱う] の 𐀀𐀁𐀃<habendus> [扱われるべき [である]] の 𐀀𐀁𐀃、<digna>…<dignus> [適切な] の 𐀀𐀁𐀃 (名略)。※ 𐀀𐀁𐀃→<1>

<1331> **Indigno aufertur hereditas.** [Hērēditās aufertur indignō.] (Mod.D.34,9,8; C.J.6,35)「相続は不面目な [人] から奪われる。」<aufertur>…<aufero> [奪う] の 𐀀𐀁𐀃、<indigno>…<indignus> [不面目な] の 𐀀𐀁𐀃 (名略)。※<aufero>は、人を示す与格をとる動詞なのであるが、これは、「～から」という、奪格のようなニュアンスを出す (この「分離の与格」は「分離の奪格」と部分的に重なりあう)。「辞書」にある<a

lci alqd>は、<alci>が「～あることから」を、<alqd>が「～あることを」をそれぞれ示すものである。もっとも、これではなくて、<ab alqo alqd>の構文の方を用いると、<ab>「～から」という前置詞のニュアンスは、日本語の「から」の語感とはよくあう。

<1332> **Indignum est in ea civitate, quae legibus continetur, discedi a legibus.** [Discēdī ā lēgibus in cīvitāte eā, quae continetur lēgibus, est indignum.]「法律（法）に依って維持されるその国家に於いては、法律（法）から〔人が〕逸れることは、ふさわしくない。」<discedi>…<discedo>〔はなれる〕の 𐀀𐀁𐀂、<civitate>…<civitas>〔国家〕の 𐀀𐀁𐀂、<continetur>…<contineo>〔含む〕の 𐀀𐀁𐀂𐀃、<indignum>…<indignus>〔ふさわしくない〕の 𐀀𐀁𐀂。※<discedi>は、自動詞の受動相表現であるが、日本語の語感では、能動的となる（→<59>）。これは、この不定法が主語となっている命題である→<171>。「自動詞の受動相」→「索引」

<1333> **Indignus potest capere, non retinere.** [Indīgnus potest capere, nōn retinēre.]「不面目な〔人〕は、〔物を〕獲得することは出来るが、確保することは出来ない。」<indignus>…<indignus>〔不面目な〕が名詞化したもの、<capere>…<capio>〔とる〕の 𐀀𐀁𐀂、<retinere>…<retineo>〔保持する〕の 𐀀𐀁𐀂。

<1334> **Inesse potest donationi, modus, conditio sive causa.** [Modus, conditiō sive causa potest inesse dōnātiōni.] (Dyer.138)「負担、条件、あるいは原因が贈与に内在することが出来る。」<modus>…「負担」、<inesse>…<inum>〔内在する〕の 𐀀𐀁𐀂、<donationi>…<donatio>〔贈与〕の 𐀀𐀁𐀂。※<inum>は、この場合、与格をとる。

<1335> **Infamibus portae non pateant dignitatum.** [Portae dignitātum nōn pateant infāmibus.] (C.J.12,1,2; Lib.Sex.5,13,87)「破廉恥な〔人々〕に官位の門が開かれていないよう。」<portae>…<porta>「門」の 𐀀𐀁𐀂、<dignitatum>…<dignitas>〔名誉職〕の 𐀀𐀁𐀂、<pateant>…<pateo>〔開いている〕の 𐀀𐀁𐀂𐀃、<infamibus>…<infamis>〔破廉恥な〕の 𐀀𐀁𐀂 (名略)。

<1336> **Infans conceptus pro nato habetur, quotiens de commodis ejus agitur.** [Infāns conceptus habētur prō nātō, quotiēns agitur dē commodis ejus.]「懐胎された子は、その人の利益に関して問題とされるたびごとに、〔すでに〕生まれた〔もの〕と扱われる。」<infans>…「子」、<conceptus>…<concupio>〔つかむ〕の見出し語 𐀀𐀁𐀂、<nato>… 𐀀𐀁𐀂<nascor>〔生まれる〕の 𐀀𐀁𐀂<natus>の 𐀀𐀁𐀂 (名略)、<commodis>…<commodum>〔利益〕の 𐀀𐀁𐀂。

<1337> **Infans non multum a furioso distat.** [Infāns dīstat ā furiōsō nōn multum.] (*I.J.* 3,19,10; *Brac.Lib.* 3,C.2,§8; 1 *Story,Eq. Jur.* 224,242) 「幼児は、精神錯乱の〔人〕と、〔それほど〕大きくは違わない。」<infans>…「子」、<distat>…<disto> [相違する] の ㊦㊧㊨、<furioso>…<furiosus> [精神錯乱の] の ㊦㊧㊨ (名略)。

<1338> **Infinita aestimatio est libertatis et necessitudinis.** [Aestimatiō libertātis et necessitūdinis est infīnīta.] (*Paul.D.* 50,17,176,1) 「自由身分および近親関係の評価は無限である。」<aestimatio>…「評価」、<necessitudinis>…<necessitudo> [近親関係] の ㊦㊧㊨、<infinita>…<infinitus> [無限の] の ㊦㊧㊨。<1715>・<1719>

<1339> **Infinitum in jure reprobatur.** [Infīnītum reprobātur in jūre.] (9 *Co.Rep.* 45; 12 *Co.Rep.* 24) 「無限の〔こと〕は法に於いては非難される。」<infinitum>…<infinitus> [無限の] の ㊦㊧㊨ (名略)、<reprobatur>…<reprobo> [非難する] の ㊦㊧㊨。

<1339bis> **Infirma est venditio si legis forma negligatur.** [Vēnditiō est infīrma, si fōrma lēgis negligātur.] 「もし法律(法)の形式が無視される場合には、売却は無効である。」<infirma>…<infirmus> [無力な] の ㊦㊧㊨、<negligatur>…<neglego> [無視する] の、㊦㊧㊨。

<1340> **Infirmitas culpa adnumeratur.** [Infīrmitās adnumerātu r culpae.] (*Gai.D.* 9,2,8,1; *C.J.* 4,29,5) 「弱さは過失に算えられる。」<infirmitas>…「弱さ」、<adnumeratur>…<adnumero> [算える] の ㊦㊧㊨。

<1341> **Infirmitati, non calliditati mulierum consultum est.** [Est cōnsultum infīrmitātī, nōn calliditātī muliērum.] (*C.J.* 4,29,5) 「婦女の狡猾さには、[その]弱さに配慮がなされた。」<consultum>…<consulo> [配慮する] の ㊦㊧㊨<consultus>の ㊦㊧㊨ (受動相完了の構成要素)、<infirmitati>…<infirmitas> [弱さ] の ㊦㊧㊨、<calliditati>…<calliditas> [狡猾さ] の ㊦㊧㊨、<mulierum>…<mulier> [婦女] の ㊦㊧㊨。
※<590>

<1342> **Infitiatio non est furtum.** [Infītiatiō nōn est fūrtum.] (*Cel.D.* 47,2,68(67)*pr.*) 「否認は窃盗ではない。」<infitiatio>…「否認」、<furtum>…「窃盗」。

<1343> **Ingratus ex solo conatu nemo judicatur.** [Nēmō jūdicātur ingrātus ex cōnātū solō.] 「誰も、試みだけからでは、忘恩の〔人〕とは判断されない。」<ingratus>…「忘恩の」を意味する見出し語が名詞化したもの、<conatu>…<conatus> [試み] の ㊦㊧㊨。

<1344> **Inimico testi credi non oportet.** [Nōn oportet crēdī te

stī inimīcō.] (Cic.Pro Font.26)「敵対関係にある証人は、信ずるべきではない。」<inimico>…<inimicus> [敵対関係にある] の 罽罽罽。※「自動詞の受動相」→<59>・<1038>・「索引」

<1345> **Iniqua numquam regna perpetuo manent.** [Rēgna inīqua manent perpetuō numquam.] (Med.196)「不公正な支配は決して永久には続かない。」<regna>…<regnum> [支配] の 罽罽、<iniqua>…<iniquus> [不公正な] の 罽罽罽、<manent>…<maneo> [とどまる] の 罽罽罽。

<1346> **Iniquissima pax est antepōnenda justissimo bello.** [Pāx inīquissima est antepōnenda bellō jūstissimō.] (Cic.; Root v. S tugvesant,10 Went(N.Y.)257,305)「極めて不公正な平和でさえも、極めて正しい戦争よりも上位に置かれるべきである。」<pax>…「平和」、<iniquissima>…<iniquus> [不公正な] の 罽罽<iniquissimus>の 罽罽罽、<antepōnenda>…<antepōno> [まえにおく] の 罽罽罽<antepōnendus> [まえにおかれるべき [である]] の 罽罽罽、<bello>…<bellum> [戦争] の 罽罽、<justissimo>…<justus> [公正な] の 罽罽<justissimus>の 罽罽罽。※ 罽罽罽→<1>。最上級には、「～さえも」というニュアンスが生ずることがある→<1729>。「「さえも」の最上級」→「索引」

<1346bis> **Iniquissimum genus societatis est ex qua quis damnū non etiam lucrum spectet.** [Genus societātis, ex quā quis spectet damnum, nōn etiam lucrum, est inīquissimum.]「ある人が損失には関係するが、しかし利益にまでもは関係しないような組合の種類は、極めて不衡平である。」<societatis>…<societas> [組合] の 罽罽罽、<spectet>…<specto> [見る] の 罽罽罽罽罽、<iniquissimum>…<iniquus> [不衡平な] の 罽罽<iniquissimus>の 罽罽罽。※「利益(利得)と損失(損害・不利益・危険・負担・責)」→「索引」、「代用型としての<quis>」→「索引」。

<1347> **Iniquitati proxima est severitas.** [Sevērītās est proxima inīquitātī.] (Pseudo-Seneca,De Mor.95; Broom,Max.207,387,395)「過酷さは不衡平に極めて近い。」<severitas>…「過酷さ」、<iniquitati>…<iniquitas> [不衡平さ] の 罽罽罽。

<1348> **Iniquum est alios permittere, alios inhibere mercaturam.** [Permittere mercātūrā aliōs, inhibēre aliōs, est inīquum.] (3 Co.Inst.181; 12 Co.Rep.113; Branch,Princ.)「一方で交易を許し、他方で [それを] 禁止するのは、不衡平である。」<permittere>…<permittō> [許す] の 罽罽罽、<mercaturam>…<mercatura> [交易] の 罽罽罽、<inhibere>…<inhibeo> [妨げる] の 罽罽罽、<iniquum>…<iniquus> [不衡

平な]の ㊦㊧㊨。※<alios ~ alios>は一種の関連語である。

<1349> **Iniquum est aliquem rei suae esse judicem.** [Est inīquum aliquem esse jūdicem rei suae.] (C.J.3,5,1; 12 Co.Rep.13)「ある人が自身の事案に関して裁判官であることは、不衡平である。」<iniquum>…<iniquus> [不衡平な]の ㊦㊧㊨。※<est iniquum>にひかれた対格不定法の構文が見える。対格形の<aliquem>は、主語として、<esse>にかかる。㊦㊧→<35>

<1350> **Iniquum est ingenuis hominibus non esse liberam rerum suarum alienationem.** [Est inīquum aliēnātiōnem liberam rerum suarum nōn esse hominibus ingenuīs.] (Gai.D.37,12,2; Co.Lit.t.223a; 4 Kent.Com.131; Hob.187; 3 Co.Inst.181)「生まれつき自由な人が自身の物の自由な譲渡権を持たないのは、不衡平である。」<iniquum>…<iniquus> [不衡平な]の ㊦㊧㊨、<alienationem>…<alienatio> [譲渡]の ㊦㊧、<liberam>…<liber> [自由な]の ㊦㊧㊨、<ingenuis>…<ingenuus> [生まれつき自由な]の ㊦㊧㊨ (所有の与格) (名略)。※<est iniquum>にひかれた対格不定法の構文が見える。対格形の<alienationem>は、主語として、<esse>にかかる。㊦㊧→<35>。「与格 (所有の与格・行為者の与格・目的の与格)」→「索引」

<1350bis> **Initium spectandum est.** [Initium est spectanda.]「当初 [の状況] が考慮されるべきである。」<initium>…「はじまり」、<spectandum>…<specto> [見る]の ㊦㊧㊨<spectandus> [見られるべき [である]]の ㊦㊧㊨。

<1350ter> **Injuria est omne quod non jure fit.** [Omne, quod nōn fit jūre, est injūria.]「法に従って生じない [もの] は、すべて、不法である。」

<1350quater> **Injuria ex affectu facientis consistit.** [Injūria cōnsistit ex affectū facientis.]「不法侵害は行為 [者] の心情から成りたっている。」<consistit>…<consisto> [たつ]の ㊦㊧㊨、<affectu>…<affectus> [心情]の ㊦㊧㊨、<facientis>…<facio> [なす]の ㊦㊧㊨<faciens>の ㊦㊧㊨ (名略)。

<1351> **Injuria fit ei cui convicium dictum est, vel de eo factum carmen famosum.** [Injūria fit eī, cui convīcium est dictum, vel carmen famōsum factum dē eō.] (9 Co.Rep.60)「不法侵害は、[ある人に対して] 誹謗がなされたか、あるいは、その人 [自身] に関する [中傷] 的な詩歌が作られ [た] したとき、その人に対してなされる。」<convicium>…「誹謗」、<dictum>…<dico> [言う]の ㊦㊧㊨<dictus>の ㊦㊧㊨、<carmen>…「歌」、<famosum>…<famosus> [中傷的な]の ㊦㊧㊨。

※<factum>の前後に<est>という動詞が省略されている。

<1352> **Injuria illata judici, seu locum tenenti regis, videtur ipsi regi illata, maxime si fiat in exercente officium.** [Injūria illāta jūdīcī, seu tenentī locum rēgis, vidētur illāta rēgī ipsī, m āximē sī fiat in exercente officium.] (3 Co.Inst.1)「裁判官、あるいは、国王の地位を持つ〔人〕に加えられた不法侵害は、国王自身に対して加えられ〔た〕ものと見られる。とりわけ、職務を遂行している〔人〕においてそれが生ずる場合に、そうである。」<illata>…<infero>〔生じさせる〕**𐌰𐌹𐌺𐌰𐌹**<illatus>の**𐌰𐌹𐌺𐌰𐌹** (分詞): **𐌰𐌹𐌺𐌰𐌹** (受動相完了の構成要素)、<tenenti>…<teneo>〔たもつ〕の**𐌰𐌹𐌺𐌰𐌹**<tenens>の**𐌰𐌹𐌺𐌰𐌹** (名略)、<exercente>…<exerceo>〔実行する〕の**𐌰𐌹𐌺𐌰𐌹**<exercens>の**𐌰𐌹𐌺𐌰𐌹** (名略)。※主格不定法の構文が見える。主語の<injuria>は、<videtur>と隠れている<esse (illata)>の双方にかかる。**𐌰𐌹𐌺𐌰𐌹**→<98>。<exercente>という分詞の訳しかたについては、「索引」の「分詞の訳しかた」の項目を参照。

<1353> **Injuria injuriam cohibere licet.** [Licet cohibēre injūria m injūriā.]「不法侵害を不法侵害に依って抑止することは、許される。」<cohibere>…<cohibeo>〔制する〕の**𐌰𐌹𐌺𐌰𐌹**。

<1354> **Injuria non excusat injuriam.** [Injūria nōn excūsāt injūriam.] (Broom,Max.270,387,395)「不法〔なことから被害を蒙ったこと〕は、〔報復として〕不法〔なことを行なうこと〕の口実とは成らない。」<excusat>…<excuso>〔口実とする〕の**𐌰𐌹𐌺𐌰𐌹**。

<1355> **Injuria non fit volenti.** [Injūria nōn fit volentī.] (Ulp. D.47,10,1,5)「不法侵害は〔それを〕望む〔人〕には生じない。」<volenti>…<volo>〔望む〕の**𐌰𐌹𐌺𐌰𐌹**<volens>の**𐌰𐌹𐌺𐌰𐌹** (名略)。※「望む・望まない」→「索引」

<1356> **Injuria non praesumitur.** [Injūria nōn praesūmitur.] (Paul. D.39,3,9,1; Co.Litt.232b)「不法は推定されない。」

<1357> **Injuria proprie non cadet in beneficium facientis.** [Injūria nōn cadet in beneficium facientis propriē.] (Branch, Princ.)「不法侵害が〔それを〕なす〔人〕の利益と成るのは、適切ではない。」<cadet>…<cado>〔おちる〕の**𐌰𐌹𐌺𐌰𐌹**、<beneficium>…<beneficium>〔利益〕の**𐌰𐌹𐌺𐌰𐌹**、<facientis>…<facio>〔なす〕の**𐌰𐌹𐌺𐌰𐌹**<faciens>の**𐌰𐌹𐌺𐌰𐌹** (名略)。※<proprie>は文全体にかかる副詞である。「<frustra>系のもの」→「索引」

<1358> **Injuria servi dominum pertingit.** [Injūria servī pertingit dominum.] (Lofft.229)「奴隷の不法侵害〔の責〕は主人に〔まで〕及ぶ。」<servi>…<servus>〔奴隷〕の**𐌰𐌹𐌺𐌰𐌹**、<pertingit>…<pertingo>〔かわる〕の**𐌰𐌹𐌺𐌰𐌹**。

<1359> **Injuriam ipse facias, ubi non vindices.** [Ipse faciās in jūriam, ubī nōn vindicēs.] (Syr.390)「君が[不法侵害に]報復しないときには、君は自ら不法侵害をなす。」<vindices>…<vindico>[報復する]の 𐤆𐤃𐤆𐤃。<270>・<1842>

<1360> **Injuste detentus in carcere impune potest aufugere.** [Dētentus in carcere injūstē potest aufugere impūnē.] (C.J.I.4, 19, 15)「不正に牢獄に監禁された[人]は、罰せられずに逃亡することが出来る。」<detentus>…<detineo>[ひきとめる]の見出し語 𐤃𐤃𐤆 (名略)、<carcere>…<carcer>[牢獄]の 𐤃𐤃𐤆、<aufugere>…<aufugio>[逃げる]の 𐤆𐤃𐤆。※<injuste>と<impune>とはたがいに関連しあった意味をもつ副詞であるが、この<impune>のところを、「～しても罰せられない」と訳出する方がむしろ日本語らしいかもしれない。<frustra>系の命題でも同じような操作がなされる。「<frustra>系のもの」→「索引」、「ローマ法のバランス感覚・法のバランス感覚」→「索引」。

<1361> **Injustum est, nisi tota lege inspecta, de una aliqua ejus particula proposita judicare vel respondere.** [Jūdicāre vel rēspondēre dē particulā ējus prōpositā aliquā ūnā, nisi lēge tōtā inspectā, est injūstum.] (8 Co.Rep.117b; Wing.Max.239)「法律(法)全体を観察することをせずに、[そこに]示された、ある一つの小部分について判断すること、あるいは、見解を[他人に]示したりすることは、不公正である。」<respondere>…<respondeo>[答える]の 𐤆𐤃𐤆、<particula>…<particula>[小部分]の 𐤃𐤃𐤆、<proposita>…<propono>[公示する]の 𐤃𐤃𐤆<propositus>の 𐤃𐤃𐤆、<inspecta>…<inspicio>[調べる]の 𐤃𐤃𐤆<inspectus>の 𐤃𐤃𐤆、<injustum>…<injustus>[不公正な]の 𐤆𐤃𐤆。※絶対的奪格の構文が見える。「名詞(lege)プラス完了分詞(inspecta)」型で、その意味は「～すると」である。<nisi>はそのニュアンスを補強するためにわざわざつけられている。不定法が主語になっている→<171>。𐤆𐤃𐤆→<22>

<1362> **Innocens fortunam, non testes timet.** [Innocēns timet fortunam, nōn testēs.] (Syr.)「無実の[人]は、運命を恐れるが、証人を恐れることはない。」<innocens>…<innocens>[潔白な]が名詞化したもの、<timet>…<timeo>[おそれる]の 𐤆𐤃𐤆、<fortunam>…<fortuna>[運命]の 𐤆𐤃𐤆。

<1363> **Insanus est, qui, abjecta ratione, omnia cum impetu et furore facit.** [Quī facit omnia cum impetū et furōre, ratiōne abjectā, est insānus.] (4 Co.Rep.128)「理を投げすてて、すべての[こと]を激情および精神錯乱をもってなす[人]は、精神異常[者]である。」

<impetu>…<impetus> [激情] の 𐀀𐀁𐀃、<furore>…<furor> [精神錯乱] の 𐀀𐀁𐀃、<abjecta>…<abjicio> [なげすてる] の 𐀀𐀁𐀃<abjectus>の 𐀀𐀁𐀃、<insanus>…<insanus> [精神異常の] の見出し語形容詞 (名略)。※絶対的奪格の構文が見える。「名詞 (ratione) プラス完了分詞 (abjecta)」型で、その意味は、「～しながら」である。 𐀀𐀁𐀃→<22>

<1364> **Insimulari quivis innocens potest, revinci nisi nocens non potest.** [Innocēns quīvis potest insimulārī, nōn potest revincī nisi nocēns.] (Apul. Mag. 1) 「無実の [人] は、誰でも、告訴されることが可能である。[しかし、] 有実の [人] 以外には [誰も] 有罪とされることは出来ない。」<innocens>…<innocens> [潔白な] が名詞化したもの、<insimulari>…<insimulo> [告訴する] の 𐀀𐀁𐀃、<revinci>…<revinco> [圧倒する] の 𐀀𐀁𐀃、<nocens>…<nocens> [罪のある] が名詞化したもの。※「有実と無実」→「索引」

<1365> **Insolita suspicionem arguunt.** [Īnsolita arguunt suspiciōnem.] 「通常ではない [こと] は疑惑を示す。」<insolita>…<insolitus> [ふつうでない] の 𐀀𐀁𐀃 (名略)、<arguunt>…<arguo> [明示する] の 𐀀𐀁𐀃、<suspicionem>…<suspicio> [疑惑] の 𐀀𐀁𐀃。<340>

<1366> **Inspicimus in obscuris quod est verisimilius vel quod plerumque fieri consuevit.** [Īnspicimus in obscurīs, quod est vērīsimilius, vel quod cōnsuevit fierī plērūmque.] (Paul. D. 50, 17, 14; Lib. Sex. 5, 13, 45) 「あいまいな [こと] に於いては、私たちは、比較的在りそうな [こと]、あるいは、一般に生ずるのが慣わしとなっている [こと] を」吟味する。」<inspicimus>…<inspicio> [吟味する] の 𐀀𐀁𐀃、<obscuris>…<obscurus> [あいまいな] の 𐀀𐀁𐀃 (名略)、<verisimilius>…<verisimilis> [ありそうな] の 𐀀𐀁𐀃<verisimilior>の 𐀀𐀁𐀃、<consuevit>…<consuesco> [慣わしである] の 𐀀𐀁𐀃。※<verisimilis>は、絶対的比較級と理解して、「比較的ありそうな」と訳出した。<consuevit>は、完了の形であるが、意味は現在形の場合のようになる。<275>を参照。「絶対的比較級・最上級」→<105>、「現在形の意味をもつ完了」→「索引」。<1257>・<2473>・<3798>。

<1367> **Instans est finis unius temporis et principium alterius.** [Instāns est finis temporis ūnīus et princīpium alterīus.] (Co. Litt. 185) 「一瞬の [時] は、一つの時間の終わりであり、また、他の [時間] の始まりである。」<instans>…「一瞬の」を意味する<instans>が名詞化したもの、<finis>…「終わり」、<principium>…「はじまり」。

<1368> **Instrumentum est probatio probata et non probanda.** [Īnstrūmentum est probātiō probāta et nōn probanda.] 「証書は、

[すでに] 証明された証明であり、そして、[これ以上] 証明される必要はない証明である。」<instrumentum>…「証書」、<probanda>…<probo> [証明する] の 匳 匳 <probandus> [証明される必要が [ある]] の 匳 匳 匳。 ※ 匳 匳 → <1>、「言葉遊び」→「索引」。<2119>

<1369> **Instrumentum fundi non est pars fundi.** [Īnstrūmentum fundī nōn est pars fundī.] (*Call.D.33,10,14*) 「土地の道具は土地の部分ではない。」<instrumentum>…「道具」、<fundi>…<fundus> [土地] の 匳 匳、<pars>…「部分」。

<1370> **Instrumentum operatur quantum pactum.** [Īnstrūmentum operātur, quantum pactum.] 「証書は合意と同じだけの働きをする。」<instrumentum>…「文書」、<operatur>… 匳 <operor> [遂行する] の 匳 匳 匳 (匳)。

<1370bis> **Intelligendus est mortis tempore fuisse qui in utero relictus est.** [Quī est relictus in uterō, est intelligendus fuisse tempore mortis.] 「母胎の中に残された [人は] [父の] 死亡の時点で存在したものと理解されるべきである。」<relictus>…<relinquo> [残す] の見出し語 匳 匳、<utero>…<uterus> [母胎] の 匳 匳、<intelligendus>…<intelligo> [理解する] の見出し語 匳 匳 <intelligendus> [理解されるべき [である]] の 匳 匳 匳、<mortis>…<mors> [死] の 匳 匳。 ※主格不定法の構文が見える。隠れている主語は、<est intelligendus>と<fuisse>の双方にかかる。 匳 匳 → <98>

<1371> **Intentio caeca mala.** [Intentiō caeca mala.] (2 Bulst.179) 「隠された意図は悪 [い]。」「<intentio>…「意図」、<caeca>…<caecus> [隠れた] の 匳 匳 匳。 ※動詞が書略されている。<335>・<678>

<1372> **Intentio in mente retenta nihil operatur.** [Intentiō retenta in mente operātur nihil.] 「心の中に保持された意図は、なんら生みださない。」<intentio>…「意図」、<retenta>…<retineo> [保持する] の 匳 匳 <retentus> の 匳 匳 匳、<mente>…<mens> [心] の 匳 匳、<operatur>… 匳 <operor> [遂行する] の 匳 匳 匳 (匳)。<2744>・<3842>

<1373> **Intentio inservire debet legibus, non leges intentioni.** [Intentiō dēbet inservire lēgibus, nōn lēgēs intentionī.] (Co.Litt.314) 「意図は法律 (法) に仕えるべきであって、法律 (法) が意図に [仕えるべきなのは] ない。」<intentio>…「意図」、<inservire>…<inservio> [仕える] の 匳 匳、<intentioni>…<intentio> [意図] の 匳 匳。

<1374> **Intentio mea imponit nomen operi meo.** [Īntentiō mea impōnit nōmen operī meō.] (Hob.123) 「私の意図は私の行動に名称を付ける。」<intentio>…「意図」、<imponit>…<impono> [おく] の 匳 匳

圃、<operi>…<opus> [はたらき] の 圃 圃。

<1374bis> **Inter aequitatem jusque interpositam interpretationem nobis solis et oportet et licet inspicere.** [Et oportet et licet inspicere interpretatiōnem interpositam inter aequitatem (que) jū̄s nō̄bīs solis.] (C.J.1,14,1)「衡平と法の間で下された解釈は、私たちだけに依って吟味される必要があり、また、そのことは許される。」<inspicere>…<inspico> [吟味する] の 圃 圃、<interpositam>…<interpono> [さし入れる] の 圃 圃<interpositus>の 圃 圃圃、<solis>…<solus> [ただ一つの] の 圃 圃圃。※<oportet>と<licet>は、非人称構文を構成し、<inspicere>をひく。「法と衡平」→「索引」、「タテマエ(法)とホンネ(衡平)」→「索引」、<et ~ et>は関連語である。

<1375> **Inter alia causas acquisitionis, magnis, celebris, et famosa est causa donationis.** [Causa donatiōnis est māgnis, celebris, et fāmōsa inter causās aliās acq̄isitiōnis.] (Brac.Fol.11)「贈与という原因は、取得の他の諸原因の内で、有力で、広く通用しており、そして、有名である。」<donationis>…<donatio> [贈与] の 圃 圃、<celebris>…<celebris> [にぎやかな] の 圃 圃圃、<famosa>…<famosus> [名声のある] の 圃 圃圃、<acquisitionis>…<acquisitio> [取得] の 圃 圃。

<1376> **Inter alios res gestas aliis non posse praejudicium facere saepe constitutum est.** [Est cōstitūtum rēs gēstās inter aliōs nōn posse facere praejūdicium aliīs saepe.] (C.J.7,60,1:2)「ある[人々]の間でなされた事柄が他の[人々]に先決事項を作りだすことが出来ないことは、しばしば定められた。」<constitutum>…<constituo> [定める] の 圃 圃圃<constitutus>の 圃 圃圃(受動相完了の構成要素)、<gestas>…<gero> [実行する] の 圃 圃圃<gestus>の 圃 圃圃、<praejudicium>…<praejudicium> [予断] の 圃 圃圃。※<est constitutus>にひかれた対格不定法の構文が見える。対格形の<res>は、主語として、<posse>にかかる。圃 圃→<35>

<1377> **Inter arma silent leges.** [Lēgēs silent inter arma.] (Cicero, Pro Milone, 4, 11)「武器の間では法は沈黙する。」<silent>…<sileo> [沈黙する] の 圃 圃圃、<arma>…<arma> [武器: 複数形] の 圃 圃。※「兵馬恠惚律法寂黙たり。」という諺が日本にある。「タテマエ(法)とホンネ(武器)」→「索引」。<448>・<3416>・<3824>。

<1377bis> **Inter coheredes rei hereditariae furtum non fit.** [Fūrtum rei hērēditāriae nōn fit inter cohērēdēs.]「共同相続人の間では、相続財産に属する物の窃盗は生じない。」<furtum>…「窃盗」、<hereditariae>…<hereditarius> [相続の] の 圃 圃圃、<coheredes>…<cohere

s> [共同相続人] の 複 囷。

<1378> **Inter consanguineos viri et uxoris nulla affinitas contrahitur.** [Affinitās nūlla contrāhitur inter cōnsanguineōs virī et uxōris.] 「夫と同血の [人々] と妻と同血の [人々] の間には、なんらの姻族関係も結ばれない。」 <affinitas>… 「姻戚関係」、<contrahitur>…<contraho> [結ぶ] の 受 囷 三 囷、<consanguineos>…<consanguineus> [同血の] の 複 男 囷 (名略)、<viri>…<vir> [夫] の 單 囷、<uxoris>…<uxor> [妻] の 單 囷。 <148>・<149>・<399>

<1379> **Inter errantem et patientem nulla est dubitatio.** [Dubitātiō nūlla est inter errantem et patientem.] 「誤まる [人] と受け手の [人] との間には、なんらの疑問もない。」 <dubitatio>… 「疑問」、<errantem>…<erro> [誤まる] の 現 囷 <errans> の 單 男 囷 (名略) <patientem>…<patior> [こうむる] の 現 囷 <patiens> の 單 男 囷 (名略)。 <756>

<1380> **Inter pares numero iudices si dissonae sententiae proferantur in liberalibus causis, pro libertate statutum optinet, in aliis autem causis pro reo, quod et in iudiciis publicis optinere oportet.** [Statūtum prō libertāte optinet, sī sententiae dissonae prōferantur in causis liberālibus inter iūdicēs parēs numero, autem prō reō in causis aliīs, quod oportet optinēre et in iūdicīs pūblicis.] (Paul.D.42,1,38pr.) 「もし、自由身分 [の有無] に関する事案に於いては、同数の裁判官の間で異なった見解が提示される場合には、自由身分 [の保有] に有利となるように判断された [こと] が重んじられ、他方で、他の [種類の] 事案に於いては、被告に有利となるように [判断されたこと] が重んじられる。そして、そのことは、公訴訟 (刑事訴訟) に於いても重んじられるべきである。」 <statutum>…<statuo> [判断する] の 現 囷 <statutus> の 單 男 囷 (名略)、<optinet>…<optineo> [重んじられる] の 現 三 囷、<dissonae>…<dissonus> [異なった] の 複 女 囷、<proferantur>…<profero> [示す] の 受 現 三 囷、<liberalibus>…<liberalis> [自由の] の 複 女 囷、<pares>…<par> [同等の] の 複 男 囷、<numero>…<numerus> [数] の 單 囷、<optinere>…さきの <optineo> の 現 囷。
※<quod>という関係代名詞は、継続的に訳す必要がある。「関係代名詞の継続的用法」→「索引」、<In dubio・dubiis>論→「索引」。

<1381> **Inter pignus autem et hypothecam tantum nominis sonus differt.** [Autem sonus nōminis tantum differt inter pignus et hypothecam.] (Marc.D.20,1,51) 「ところで、質と抵当の間では、名称の響きだけが異なっている。」 <sonus>… 「響き」、<differt>…<differo> [異なる] の 現 三 囷、<pignus>…<pignus> [質] の 單 囷、<hypothecam>

…<hypotheca> [抵当] の ㊦㊧。※物的担保として重要な質は、ローマ法では、抵当も包含し、それらに同一の原則が適用されることが多い。問題なのは、質権の設定が公示されない関係で、その順位そのものが判明しない点である。とくに占有をともなわない抵当が存在する場合に、後順位の質権者は債権の確保という点で不安定な地位におかれることになる。

<1382> **Inter proximos fraus facile praesumitur.** [Fraus praesumitur inter proximōs facile.] 「近親関係にある [人々] の間では、詐欺が容易に推定される。」<fraus>…「詐欺」、<proximos>…<proximus> の ㊦㊧ (名略)。

<1383> **Interdum ex pacto actio nascitur, quotiens lege vel senatus consulto adjuvatur.** [Āctiō nāscitur ex pactō interdum, quotiēns adjuvātur lēge vel senātūs cōsultō.] 「ときには、[合意が] 法律 (法) あるいは元老院議決に依って支えられるたびごとに、合意から [でも] 訴権が生ずる。」<adjuvatur>…<adjuvo> [助ける] の ㊦㊧、<senatus>…<senatus> [元老院] の ㊦㊧、<consulto>…<consultum> [決定] の ㊦㊧。

<1384> **Interdum venit ut exceptio quae prima facie justa videtur, tamen inique noceat.** [Ut exceptiō, quae vidētur jūsta faciē primā, tamen noceat iniquē, venit interdum.] (*I.J.4, 14pr.*) 「一見したところでは公正 [である] と見える抗弁が、それでも不衡平なかたちで害する、ということがときには生ずる。」<facie>…<facies> [外観] の ㊦㊧、<noceat>…<noceo> [害する] の ㊦㊧、<venit>…<venio> [くる] の ㊦㊧。※主格不定法の構文が見える。主語の <exceptio> は、<videtur> と隠れている <esse> の双方にかかる。㊦㊧ → <98>。<prima facie> は、「プリーマー・ファキエー」という読みで、日本語にもなっている。

<1385> **Interest rei publicae, ne maleficia remaneant impunita.** [Interest rei pūblicae, nē maleficia remaneant impūnīta.] (*Ul p.D.5, 1, 18, 1; Jul.D.9, 2, 51, 2; Jenk.Cent.30, 31, Case.59; Wing.Max.501*) 「悪事が不加罰のままにならない [ようにする] のは、国家にとって大切である。」<maleficia>…<maleficium> [悪事] の ㊦㊧、<remaneant>…<remaneo> [とどまる] の ㊦㊧、<impunita>…<impunitus> [罰せられない] の ㊦㊧。※<rei publicae> には、名詞と形容詞の単数属格の組み合わせと、その単数与格の組み合わせとがあり、とてもまぎらわしい (「辞書」の [29] と [34] の表を参照)。「辞書」に <alcis=alicujus> と指示してあるとおり、非人称用法を導く <intersum> という動詞は、「大切である」といった意味のときには、属格をひく。属格の用法のうち、裁判関係の動詞にともなわれて登場するケースについては、<348> で解説しておいたが、

ここではその他の用法をいくつか解説しておこう。この〈intersum〉のように属格を支配する動詞（辞書では〈alcis〉と表示されているのがそのことを示す）として、〈memini〉[覚えている]、〈obliviscor〉[忘れる]、〈miserere〉[あわれむ]などがある（「〈gen.〉とともに」とあるのがそのことを示す）。独語でも、〈sich erinnern〉[思い出す]は二格を支配するし、仏語では、〈se souvenir de〉[思い出す]というように前置詞の〈de〉をとるので、そのあたりの微妙な感じは、近代欧米語の約束ごとを参考にして頂ければ、つかんで頂けるだろう。なお、形容詞にも属格支配のものがあるが（独語の〈sich erinnernd〉や〈eingedenkt〉がそうである）、その点については、〈1500〉・〈1505〉の解説を参照して頂きたい。「属格をひく動詞」→「索引」、「非人称用法」→〈265〉・「索引」。〈846〉・〈1166〉・〈1385〉・〈1410〉・〈1790〉・〈2601〉・〈2765〉・〈3708〉・〈3709〉・〈3710〉

〈1386〉 **Interest rei publicae, ne sua quis male utatur.** [Interest rei pūblicaē, nē quis ūtatur suā māle.] (Gai.I.1,53; 6 Co.Rep.36)「ある人が自身の[もの]を悪く用いないことは、国家にとって大切である。」※〈quis〉のところに、〈quilibet〉[誰でも]という強いニュアンスの不定代名詞がくる命題もある。「非人称用法」→「索引」、「代用型としての〈quis〉」→「索引」、「権利濫用」論→「索引」。〈852〉・〈1780〉

〈1387〉 **Interest rei publicae, quod homines conserventur.** [Interest rei pūblicaē, quod hominēs cōnserventur.] (12 Co.62)「人[の命]が守られることは、国家にとって大切である。」〈conserventur〉…〈conseruo〉[守る]の 𐀀𐀁𐀂𐀃𐀄。※「非人称用法」→「索引」

〈1388〉 **Interest rei publicae res iudicatas non rescindi.** [Interest rei pūblicaē rēs jūdicātās nōn rēscindī.] (2 Co.Inst.359)「既判物が覆えされないことは、国家にとって大切である。」〈rescindi〉…〈rescindo〉[無効にする]の 𐀀𐀁𐀂。※対格不定法の構文が見える。対格形の〈res (iudicatas)〉は、主語として、〈rescindi〉にかかる。𐀀𐀁𐀂→〈98〉、「非人称用法」→「索引」。〈444〉・〈853〉・〈1393〉

〈1389〉 **Interest rei publicae suprema hominum testamenta rata haberi.** [Interest rei pūblicaē tēstāmenta suprēma hominum habērī rata.] (Maec.D.40,5,42; Co.Litt.236)「人の最終の遺言が有効とされることは、国家にとって大切である。」〈testamenta〉…〈testamentum〉[遺言]の 𐀀𐀁𐀂、〈rata〉…〈ratus〉[有効な]の 𐀀𐀁𐀂。※対格不定法の構文が見える。対格形の〈testamenta〉は、主語として、〈haberi〉にかかる。𐀀𐀁𐀂→〈35〉、「非人称用法」→「索引」。

〈1390〉 **Interest rei publicae, ut carceres sint in tuto.** [Interest rei pūblicaē, ut carcerēs sint in tūtō.] (2 Co.Inst.589)「監獄

st modus optimus interpretandī.] (8 Co.Rep.169a)「[諸法律(法)を] 解釈し、諸法律(法)を諸法律(法)に調和させることは、解釈することの最良の方法である。」<interpretare>…<interpreto> [解釈する] の 𐀀𐀁 (本来のラテン語なら、<interpretari>という 𐀀動詞の形になる)、<concordare>…<concordo> [調和させる] の 𐀀𐀁、<modus>…「方法」、<interpretandī>…<interpreto>の 𐀀𐀁<interpretandum>の 𐀀 (𐀀)。※ 𐀀𐀁→<1>。不定法が主語となっている→<171>。

<1397> **Interpretatio chartarum benigne facienda est, ut res magis valeat quam pereat.** [Interpretātiō chartārum est facienda benignē, ut rēs valeat magis, quam pereat.] (Broom,Max.543)「捺印証書の解釈は、事柄が無効と成るよりも、むしろ有効と成るように、緩やかになされるべきである。」<chartarum>…<charta> [捺印証書] の 𐀀𐀁、<facienda>…<facio> [なす] の 𐀀𐀁<faciendus> [なされるべき [である]] の 𐀀𐀁、<pereat>…<pereo> [滅びる] の 𐀀𐀁。※ 𐀀𐀁→<1>、<magis ~ quam>は相関語である。「有効と無効」→「索引」

<1398> **Interpretatio est contra eum facienda, qui clarius loqui debuisset.** [Interpretātiō est facienda contrā eum, quī dēbuisset loquī clārius.]「解釈は、いっそう明白に語る義務のあった人に対しては、不利になされるべきである。」<facienda>…<facio> [なす] の 𐀀𐀁<faciendus> [なされるべき [である]] の 𐀀𐀁、<loqui>… 𐀀<loquor> [話す] の 𐀀𐀁 (𐀀)、<clarius>…<clare> [明るく] の 𐀀。※ 𐀀𐀁→<1>

<1399> **Interpretatio fienda est ut res magis valeat quam pereat.** [Interpretātiō est fienda, ut rēs valeat magis, quam pereat.] (Ulp.D.34,5,2; Jenk.Cent.198; Broom,Max.543)「解釈は、事柄が効力を失なうよりも、むしろ有効となるように、なされるべきである。」<interpretatio>…「解釈」、<fienda>…<fio> [なる] の 𐀀𐀁<fiendus> [なされるべき [である]] の 𐀀𐀁、<pereat>…<pereo> [滅びる] の 𐀀𐀁。※<fio>の 𐀀𐀁は<facio> [なす] の 𐀀𐀁<faciendus>を代用することになっているが、ここでは、<fienda>という形がきている。意味は両者とも同じである。<magis ~ quam>は相関語である。𐀀𐀁→<1>。「有効と無効」→「索引」

<1400> **Interpretatio talis in ambiguis semper fienda est, ut evitetur inconueniens et absurdum.** [Interpretātiō tālis est fienda in ambiguis, ut inconueniēns et absurdum ēvitetur, semper.] (4 Co.Inst.328)「あいまいな [こと] に於いては、不都合な [こと] および非合理的な [こと] が避けられるような解釈が、常になされるべきである。」<fienda>…<fio> [なる] の 𐀀𐀁<fiendus> [なされるべき [である]]

の 𠄎𠄎𠄎、<ambiguus>…<ambiguus> [あいまいな] の 𠄎𠄎𠄎 (𠄎𠄎𠄎)、<inconueniens>…<inconueniens> [不便な] の 𠄎𠄎𠄎 (𠄎𠄎𠄎)、<absurdum>…<absurdus> [不条理な] の 𠄎𠄎𠄎 (𠄎𠄎𠄎)、<evitetur>…<evito> [避ける] の 𠄎𠄎𠄎。※ 𠄎𠄎𠄎→<1>。<talis ~, ut>は相関語である。

<1400bis> **Interpretatione legum poenae molliendae sunt potius quam asperandae.** [Poenae sunt molliendae potius, quam asperandae, interpretatiōne lēgum.] 「諸法律の解釈に依って、罰は、厳しくされるよりも、むしろ緩やかにされるべきである。」<molliendae>…<mollio> [ゆるめる] の 𠄎𠄎𠄎<molliendus> [ゆるめられるべき [である]] の 𠄎𠄎𠄎、<asperandae>…<aspero> [鋭くする] の 𠄎𠄎𠄎<asperandus> [鋭くされるべき [である]] の 𠄎𠄎𠄎。※<potius ~ quam>は比較の構文である。

<1401> **Interruptio multiplex non tollit praescriptionem semel obtentam.** [Interruptiō multiplex nōn tollit praescriptiōnem obtentam semel.] (2 Co.Inst.654) 「数次の中断は、いったん成就した時効を奪わない。」<interruptio>…「中断」、<multiplex>…<multiplex> [何度もの] の 𠄎𠄎𠄎、<tollit>…<tollo> [とりさる] の 𠄎𠄎𠄎、<praescriptionem>…<praescriptio> [時効] の 𠄎𠄎𠄎、<obtentam>…<obtendo> [ひきだす] の 𠄎𠄎𠄎<obtentus>の 𠄎𠄎𠄎。

<1402> **Intervallum medium non vitiat obligationem.** [Intervallum medium nōn vitiat obligatiōnem.] (Ulp.D.45,1,1,1) 「中間の中断は、債務関係を瑕疵あるものとはしない。」<intervallum>…「中断」、<medium>…<medius> [中間の] の 𠄎𠄎𠄎、<vitiat>…<vitio> [瑕疵あるものとする] の 𠄎𠄎𠄎。

<1403> **Interveniens vice actoris fungitur.** [Interveniēns fungitur vice āctōris.] 「仲介する [人] は行為者 [本人] のような働きをする。」<interveniens>…<intervenio> [問にくる] の 𠄎𠄎𠄎<interveniens> が名詞化したもの、<fungitur>… 𠄎𠄎<fungor> [実行する] の 𠄎𠄎𠄎 (𠄎𠄎)、<vice>…<vicis> [交代] (属格形) に由来する副詞。

<1404> **Intestatus decedit, qui aut omnino testamentum non facit, aut non jure fecit; aut id quod fecerat rumptum irritumve factum est; aut nemo ex eo heres exsistit.** [Quī aut nōn fēcit tēstamentum omnīnō, aut fēcit nōn jūre, dēcēdit intēstātus; aut id, quod fēcerat, est factum rumptum irritumve; aut nēmō exstitit haerēs (hērēs) ex eō.] (Paul.D.50,16,64; I.J.3,1; Broom, Max.478; Co.Litt.182) 「あるいはまったく遺言を作成しなかったか、あるいは法に従って [それを] 作成しなかった [人] は、無遺言で死亡す

る。あるいは、その人が作成したものが破壊されたかあるいは無効とされた場合、あるいは誰もその「遺言」から相続人と成らなかった[場合も、そうである]。』<decedit>…<decedo> [さる] の 𐀄𐀆𐀇、<intestatus>…「遺言をしていない」、<ruptum>…<rumpo> [破壊する] の 𐀄𐀆𐀇<ruptus> の 𐀄𐀆𐀇、<irritum>…<irritus> [無効の] の 𐀄𐀆𐀇、<exsistit>…<exsisto> [現われる] の 𐀄𐀆𐀇。※<intestatus>は、形容詞であるが、副詞的にとらえる必要がある。「形容詞の訳しかた」→<55>・<710>・「索引」、<aut ~ aut>は関連語である。

<1405> **Inutilis labor et sine fructu non est effectus legis.** [Effectus lēgis nōn est labor inūtilis et sine frūctū.] (Co.Litt.127b) 「法律(法)の効果は、無用の労苦で[も]また成果のない[もの]で[も]ない。」<labor>…「労苦」、<inutilis>…「有用でない」、<fructu>…<fructus> [果実] の 𐀄𐀆𐀇。

<1406> **Inveniens libellum famosum et non corrumpens punitur.** [Inveniēns libellum fāmōsum et nōn corrupēns pūnitur.] (Moore,813) 「誹謗的な文書を発見し、そしてそれを破棄しない[人]は、罰せられる。」<inveniens>…<invenio> [見出す] の 𐀄𐀆𐀇<inveniens>が名詞化したもの、<libellum>…<libellus> [文書] の 𐀄𐀆𐀇、<famosum>…<famosus> [中傷的な] の 𐀄𐀆𐀇、<corrumpens>…<corrumpo> [ほろぼす] の 𐀄𐀆𐀇<corrumpens>が名詞化したもの。※<inveniens>という 𐀄𐀆𐀇を、「発見しておきながら」と訳出する方法もある。「分詞の訳しかた」→<55>・「索引」

<1407> **Inventa lege, inventa fraude.** [Lēgē inventā, fraude inventā] 「法律(法)が考案されて、[それに伴って] 犯行[も]考案されて」<inventā>…<invenio> [考案する] の 𐀄𐀆𐀇<inventus>の 𐀄𐀆𐀇、<fraude>…<fraus> [犯行] の 𐀄𐀆𐀇。※<lege inventa>と<fraude inventa>というように、絶対的奪格の構文が二つ見える。ともに「名詞(lege・fraude)プラス完了分詞(inventa・inventā)」型で、その意味は「～すると」である。 𐀄𐀆𐀇→<22>。動詞は省略されている。

<1408> **Inveterata consuetudo pro lege custoditur.** [Cōnsuētū dō inveterāta cūstōditur prō lēge.] (Jul.D.1,3,32,1) 「古い慣行は法律(法)として遵守される。」<inveterata>…<inveteratus> [古い] の 𐀄𐀆𐀇、<custoditur>…<custodio> [守る] の 𐀄𐀆𐀇。※「法と慣行」→「索引」、「タテマエ(法律(法)とホンネ(慣行))」→「索引」。<2386>

<1409> **Invisa numquam imperia retinentur diu.** [Imperia invīsa retinentur diū numquam.] (Seneca,Phoen.660) 「嫌われる支配は決して長く保持されない。」<imperia>…<imperium> [支配] の 𐀄𐀆𐀇、<i

nvisa)…<invisus> [嫌われた] の 𐌺𐌹𐌿𐌹𐌺𐌰、<retinentur>…<retineo> [保持する] の 𐌹𐌺𐌹𐌺𐌰。

<1410> **Invitat culpam, qui peccatum praeterit.** [Quī praeterit peccātum, invītat culpam.] (Syr.402) 「犯行を見のがす [人は]、罪を招く。」<praeterit>…<praetereo> [見すごす] の 𐌺𐌹𐌿𐌹𐌺𐌰、<peccatum>…<peccatum> [犯罪] の 𐌺𐌹𐌿𐌹𐌺𐌰、<invitat>…<invito> [まねく] の 𐌺𐌹𐌿𐌹𐌺𐌰。<846>・<1166>・<1385>・<1790>・<2601>・<2765>・<3708>・<3709>・<3710>

<1411> **Inviti negotia non geruntur.** [Negōtia invītī nōn geruntur.] 「[ある人の] 事務は、[その人の] 意思に反しては、[他人に依って] なされない。」<inviti>…<invitus> [望まない] の 𐌺𐌹𐌿𐌹𐌺𐌰 (名略)、<geruntur>…<gero> [行なう] の 𐌹𐌺𐌹𐌺𐌰。※「意思に反する」→「索引」

<1411bis> **Inviti non legitimatur.** [Invītī nōn lēgitimatur.] 「準正は、それを望まない [人] については、なされない。」<inviti>…<invitus> [意思に反する] の 𐌺𐌹𐌿𐌹𐌺𐌰 (名略)、<legitimantur>…<legitimo> [準正を行なう] の 𐌹𐌺𐌹𐌺𐌰。※「意思に反する」→「索引」、「文頭の属格」→「索引」。

<1412> **Invito (beneficium) non datur.** [(Beneficium) nōn datur invītō.] (Paul.D.50,17,69; Broom,Max.478,699; Salmond,Jurispr.642) 「(特典は) [それを] 望まない [人] には与えられない。」<beneficium>…「特典」、<invito>…<invitus> [望まない] の 𐌺𐌹𐌿𐌹𐌺𐌰 (名略)。※「意思に反する」→「索引」。<242>・<243>

<1413> **Invitus agere nemo cogitur.** [Nēmō invītus cōgitur agere.] (C.J.3,7,1) 「誰も、その意思に反して訴えることを強いられない。」<invitus>…「意思に反する」※「意思に反する誰も」という修飾のしかたにはなっていない。このように状態や性質をあらわす形容詞を副詞のような扱いにして用いるのは、ラテン語の癖となっている。「形容詞の訳しかた」→<55>・「索引」、「意思に反する」→「索引」。

<1414> **Invitus liberari potest.** [Invītus potest liberārī.] (Ulp.D.46,2,8,5) 「[誰も]、その意思に反して [債務から] 解放されることは出来ない。」<invitus>…「望まない」が名詞化したもの、<liberari>…<libero> [自由にする] の 𐌹𐌺𐌹𐌺𐌰。※「形容詞の訳しかた」→<55>・「索引」、「意思に反する」→「索引」。

<1415> **Invitus nemo rem cogitur defendere.** [Nēmō invītus cōgitur dēfendere rēm.] (Ulp.D.50,17,156pr.) 「誰も、その意思に反して事案を防衛することを強いられない。」<invitus>…「望まない」、<defendere>…<defendo> [防衛する] の 𐌺𐌹𐌿𐌹𐌺𐌰。※訳出のさい、<invitus>を<nemo>

という名詞主語には直接にはかけない方が自然である。「形容詞の訳しかた」→〈55〉、「意思に反する」→「索引」。

〈1416〉 **Invitus procurationem suscipere nemo cogitur.** [Nēmō invitus cōgitur suscipere prōcūrātiōnem.] (Ulp.D.3,3,8,1; C.J.2,12,17) 「誰も、その意思に反して管理を引きうけることを強いられない。」〈invitus〉…「望まない」、〈suscipere〉…〈suscipio〉[ひきうける]の 𐀀𐀁、〈procurationem〉…〈procuratio〉[管理]の 𐀀𐀂。※〈cogo〉は補足不定法をひく。→〈171〉。「形容詞の訳しかた」→〈55〉・〈710〉・「索引」、「意思に反する」→「索引」。

〈1417〉 **Ipsae leges cupiunt ut jure regantur.** [Lēgēs ipsae cupiunt, ut regantur jūre.] (Co.Litt.1,74b) 「法律(法)が公正さに依って管理されることを、法律(法)自体が求める。」〈cupiunt〉…〈cupio〉[求める]の 𐀀𐀃、〈regantur〉…〈rego〉[支配する]の 𐀀𐀄。

〈1418〉 **Ipsa jure compensatur.** [Compēnsātur jūre ipsō.] (C.J.4,31,14pr.) 「法上当然に相殺がなされる。」〈compensatur〉…〈compensatio〉[相殺する]の 𐀀𐀅。※〈compensatur〉は、主語があまりはつきりとは出てこない用法である。〈ipso jure〉[イプソー・ユール]は、その読みかたとともに、日本でもよく知られた法術語である。「法上当然に」がその意識であるが、直訳は「法それ自体によって(もとづいて)」となる。

〈1419〉 **Ira furor brevis est.** [Īra est furor brevis.] (Hor.Ep.1,2,62; Beardsley,Maynard,4 Wend.(N.Y.)336,355) 「怒りは短時間の精神錯乱である。」〈ira〉…「怒り」、〈furor〉…「精神錯乱」、〈brevis〉…「短い」。

〈1420〉 **Irrelevantia ad probationem non admittuntur.** [Irrelevantia nōn admittuntur ad probātiōnem.] 「重要でないことは証明へは受けいれられない。」〈irrelevantia〉…「無関係なこと」、〈admittuntur〉…〈admitto〉[認める]の 𐀀𐀆。

〈1420bis〉 **Irritam facere donationem perfectam nemini licet.** [Licet nēminī facere dōnātiōnem perfectam irritam.] 「誰にも、完成した贈与を無効なものとするのは、許されない。」〈perfectam〉…〈perfectio〉[完成する]の 𐀀𐀇、〈perfectus〉の 𐀀𐀈、〈irritam〉…〈irritus〉[無効な]の 𐀀𐀉。※〈irritam〉と〈donationem〉は、一くくりにはならない。「言葉の切りわけ」→〈553〉・「索引」

〈1421〉 **Is damnum dat, qui jubet dare.** [Is, quī jubet dare, dat damnum.] (Paul.D.50,17,169pr.) 「[損害を]与えることを命ずる人は、損害を与える。」〈jubet〉…〈jubeo〉[命ずる]の 𐀀𐀊。〈3244〉

〈1422〉 **Is justus conjunx est, quem demonstrat puer.** [Is, que

m puer dēmōnstrat, est conjūnx jūstus.]「子が指ししめす人が、適法な配偶者である。」<puer>…「子」、<demonstrat>…<demonstro>〔示す〕の ㊦㊧㊨、<conjunx>…「配偶者」。

<1423> **Is natura debet, quem jure gentium dare oportet, cujus fidem secuti sumus.** [Is, quem oportet dare jūre gentium, cūjus fidem sumus secūtī, dēbet nātūrā.] (*Paul.D.50,17,84,1*)「万民法に依って与えることを要し、私たちが信頼したことがある人は、自然に従って〔債務を〕負う。」<gentium>…<gens>〔民族〕の ㊦㊧㊨、<secuti>… ㊦㊧㊨<sequor>〔したがう〕の ㊦㊧㊨<secutus>の ㊦㊧㊨ (受動相完了の構成要素)。※非人称動詞の<oportet>にひかれた対格不定法の構文が見える。対格形の<quem>は、意味上の主語として、<dare>にかかる。関係代名詞の<quem>が、対格形として、意味上の主語になっている例はとても珍しい。しかも難解である(→<126>・「索引(関係代名詞を軸とする対格不定法)」)。**<quem>**と**<cujus>**という関係代名詞は、ともに先行詞<is>にかかる。対格形の<quem>は日本語では主格風の訳(「人は」)になっているが、一方で、属格形の<cujus>は「その人の〔信義(に)～する人〕」というかかりかたになる。他方で、<cujus>の先行詞を<jure>とする読みかたもある。 ㊦㊧㊨→<35>

<1423bis> **Is nullam videtur actionem habere cui propter inopiam adversarii inanis actio est.** [Is, cui āctiō est inānis propter inōpiam adversārii, vidētur habēre āctiōnem nūllam.]「相手[方]の無資力のために役立たない訴権を持っている人は、なんらの訴権を持っていないものと見られる。」<inanis>…<inanis>〔空虚な〕の ㊦㊧㊨、<inopiam>…<inopia>〔窮乏〕の ㊦㊧㊨、<adversarii>…<adversarius>〔反対の〕の ㊦㊧㊨ (名略)。※主格不定法の構文が見える。主語の<is>は、<videtur>と<habere>の双方にかかる。 ㊦㊧㊨→<98>。<cui>は所有の与格の用法である。「与格(所有の与格・行為者の与格・目的の与格)」→「索引」

<1424> **Is pater est, quem nuptiae demonstrant.** [Is, quem nūptiae dēmōnstrant, est pater.]「婚姻が示す人が父である。」<nuptiae>…「婚姻」(複数形)、<demonstrant>…<demonstro>〔示す〕の ㊦㊧㊨、<pater>…「父」。※現代では、いわゆる「DNA鑑定」を武器として、父性の推定が比較的正確に行なわれるようになっているが、しかし、ごく最近までは、母の決定とは異なって、父の決定はかなりの難問であった。ローマ人は、婚姻という社会制度＝法律制度をベースにして、いわばタテマエ的に父性を確定する方策をとった。

<1425> **Is potest repudiare, qui et aquirere(acquirere) potest.** [Is, quī potest et aquirere(acquirere), potest repudiāre.] (*Paul.D.*

29,2,18)「取得することも出来る人が、拒むことが出来る。」<acquirere(aquirere)>…<aquiro(acquiro)>〔取得する〕の 𐀀𐀁、<repudiare>…<repudio>〔拒む〕の 𐀀𐀁。<3092>

<1426> **Is qui actionem habet ad rem recuperandum, ipsam rem habere videtur.** [Is, quī habet āctiōnem ad recuperandum rem, vidētur habēre rem ipsam.] (Paul.D.50,17,15)「物を取りもどすための訴権を持つ人は、物自体を持つものと見られる。」<recuperandum>…<recupero>〔とりもどす〕の 𐀀𐀁<recuperandum>の 𐀀𐀁 (𐀀𐀁)。※ 𐀀𐀁 →<153>。<ad rem recuperandam>となると、動形容詞<recuperandus>を用いた表現となる。意味は同じである。『新ラテン文法』§597を参照。主格不定法の構文が見える。主語の<is>は、<videtur>と<habere>の双方にかかる。 𐀀𐀁 →<98>、「動形容詞と動名詞の密接な関係」→「索引」。

<1427> **Is, qui in jus successit alterius, eo jure quo ille uti debet.** [Is, quī succēssit in jūs alteriūs, dēbēbit ūtī jūre eō, quō ille.] (Paul.D.50,17,177pr.; Lib.Sex.5,13,46)「他〔人〕の権利を承継した人は、あの人を用いるべきであろうその権利を用いるべきであろう。」<successit>…<succedo>〔ひきうける〕の 𐀀𐀁 (𐀀𐀁)。

<1428> **Is, qui tacet, non fatetur.** [Is, quī tacet, nōn fatētur.] (Paul.D.50,17,142; Lib.Sex.5,13,44)「沈黙する人は自白しない。」<tacet>…<taceo>〔沈黙する〕の 𐀀𐀁 (𐀀𐀁)、<fatetur>… 𐀀𐀁<fateor>〔自白する〕の 𐀀𐀁 (𐀀𐀁)。※このパウルス法文には、<sed tamen verum est eum non negare.>「しかし、それでもやはり、その人が否定しない、ということとは真実である。」という意味深長な付言がある。<verum>は<verus>〔真実の〕の 𐀀𐀁 (𐀀𐀁)で、<negare>は<nego>〔否定する〕の 𐀀𐀁である。対格不定法の構文が見える。対格形の<eum>は、主語として、<negare>にかかる。 𐀀𐀁 →<35>。<2956>・<3418>・<3419>

<1429> **Ita lex scripta est.** [Lēx est scripta ita.] (26 Barb.(N.Y.)378,380)「法律(法)はこのように書かれた。」<scripta>…<scribo>〔書く〕の 𐀀𐀁<scriptus>の 𐀀𐀁 (𐀀𐀁) (受動相完了の構成要素)。※「たとえその法(律)がよくないものであっても、法は法として妥当力をもつ」というニュアンスを裏にはらんだ命題である。

<1430> **Ita semper fiat relatio ut valeat dispositio.** [Relātiō fiat ita, ut dispositiō valeat, semper.] (6 Co.Rep.76b)「関連づけは、常に、措置が有効となるようなかたちでなされるべきである。」<relatio>…「関連づけ」、<dispositio>…「措置」。※<ita ~, ut>は相関語である。

<1431> **Ita utere tuo ut alienum non laedas.** [Ūtere tuō ita, ut nōn laedās aliēnum.]「君は、他〔人〕を害しないように、君の〔もの〕

を用いよ。」<utere>…<utor> [用いる] の  、<laedas>…<laedo> [害する] の  。※<utere>の<ere>のところは、<capio>型動詞の<capere>という現在不定法の形と同じになるので、まぎらわしい。cf.「不定法」→<171>。「自身と他人」→「索引」、「権利濫用」論→「索引」。

<1432> **Iter est jus eundi, ambulandi hominis; non etiam jumentum agendi vel vehiculum.** [Iter est jŭs hominis eundī, ambulandī; nōn agendī jumentum vel vehiculum etiam.] (*I.J.*2,3pr.; *Co.Litt.*56a)「通行権は、人の、歩行することの、歩きまわることの権利である。[しかし、] 役畜あるいは荷車を動かすことの [権利] までは [含まれない]。」<iter>…「通行権」、<eundi>…<eo> [歩く] の  <eundum> の  ()、<ambulandi>…<ambulo> [散歩する] の  <ambulandum> の  ()、<agendo>…<ago> [導く] の  <agendum>の  ()、<jumentum>…<jumentum> [役畜] の  、<vehiculum>…<vehiculum> [車] の  。※  →<153>・<1540>

J

<1432bis> **Jactare suum nemo praesumitur.** [Nēmō praesūmitur jactāre suum.] 「誰も自身の [もの] を投げすてるものとは推定されない。」<jactare>…<jacto> [なげる] の 𠄎𠄎。※主格不定法の構文が見える。主語の<nemo>は、<praesumitur>と<jactare>の双方にかかる。 𠄎𠄎→<98>

<1433> **Jocus consensui adversatur.** [Jocus adversātur cōnsēns uī.] 「冗談は同意に対立する。」<jocus>… 「冗談」、<adversatur>… 𠄎𠄎<adversor> [対立する] の 𠄎𠄎𠄎 (𠄎)。

<1433bis> **Judex ab auctoritate rerum perpetuo similiter judicatarum non facile recedere debet.** [Jūdex nōn dēbet recēdēre ab auctōritāte rērum jūdicātārum similiter perpetuō facile.] 「裁判官は、たえず類似のかたちで裁かれた事柄の権威から安易に離れるべきではない。」<recedere>…<recedo> [はなれる] の 𠄎𠄎、<auctoritate>…<auctoritas> [権威] の 𠄎𠄎、<judicatarum>…<judico> [裁く] の 𠄎𠄎<judicatus>の 𠄎𠄎。

<1434> **Judex aequitatem semper spectare debet.** [Jūdex dēbet spectāre aequitatem semper.] (Ulp.D.13,4,4,1; Jenk.Cent.45) 「裁判官は常に衡平を見るべきである。」<spectare>…<specto> [見る] の 𠄎𠄎。

<1435> **Judex ante oculos aequitatem semper habere debet.** [Jūdex dēbet habēre aequitatem ante oculōs semper.] (Ulp.D.13,4,4,1; Jenk.Cent.58,452) 「裁判官は常に眼前に衡平を持つべきである。」<oculos>…<oculus> [眼] の 𠄎𠄎。

<1436> **Judex bonus nihil ex arbitrio suo faciat, nec propositione voluntatis, sed juxta leges et jura pronunciet (pronuntiet).** [Jūdex bonus faciat nihil ex arbitriō suō, nec prōpositiōne voluntātis, sed prōnūnciet (prōnūntiet) jūxtā lēgēs et jūra.] (Calvin's Case, 7 Co.Rep.27a) 「有能な裁判官は、自身の自由裁量から、また、[私的な] 意思の提示からも、なにもなすべきではなくて、法律および法に基づいて [判決を] 下すよう。」<arbitrio>…<arbitrium> [自由裁量] の 𠄎𠄎、<propositione>…<propositio> [提示] の 𠄎𠄎、<pronunciet (pronuntiet)>…<pronuncio (pronuntio)> [布告する] の 𠄎𠄎𠄎。※<nihil·nec ~ sed>は相関語である。この命題においては、<leges> [諸法律] と<jura> [諸法] が対置されているところが注目点である。このような表現例は比較的めずらしい→<641bis>・<1604>・<1769>。

<1437> **Judex damnatur, cum nocens absolvitur.** [Jūdex damnatur, cum nocēns absolvitur.] (Syr.415 ; Moor,813) 「有実の [人] が無罪とされるとき、裁判官は有罪判決される。」<damnatur>…<damno> [有罪判決する] の ㊦㊧㊨㊩、<nocens>…<nocens> [有実の] が名詞化したもの、<absolvitur>…<absolvo> [無罪とする] の ㊦㊧㊨㊩。※「有罪と無罪」→「索引」。<1359>・<3526>

<1438> **Judex debet judicare secundum allegata et probata.** [Jūdex debet jūdicāre secundum allēgāta et probāta.] 「裁判官は、申したてられた [こと] および証明された [こと] に従って裁判するべきである。」<allegata>…<allego> [申立てる] の ㊦㊧㊨㊩<allegatus>の ㊦㊧㊨㊩ (名略)。※<judex>というラテン語法術語には、時代によってかなり異なる、二つの意味がある。一つは、ローマ共和政時代のもので、これは、市民の上層部 (名望家) からリスト・アップされた私人が民事訴訟および刑事訴訟において判決の任務をひきうける場合に関係する。このとき、訳としては「審判人」をあてるのがふつうである。もう一つは、帝政時代のもので、現代の民刑事の裁判制度における「裁判官」のことである。法格言のほとんどが帝政時代につくられているので、そこでは、どちらかと言えば、後者の用法がよく見られる (もっとも、歴史的な事柄を述べている関係で、前者の意味をおびている用例もないわけではない)。

<1439> **Judex est lex loquens.** [Jūdex est lēx loquēns.] (7 Co. Rep.4a) 「裁判官は物言う法律 (法) である。」<loquens>… ㊦㊧㊨㊩<loquor> [語る] の ㊦㊧㊨㊩<loquens>の ㊦㊧㊨㊩。※モンテスキューは、裁判官のことを「法律の言葉を発する口」と言ったとか伝えられているが、表題の格言も、「裁判官は、法が自らしゃべることができない関係で、いわば法の下僕として、法のかわりにしゃべってさしあげる仕事をしている」といった、見方によってはひどいニュアンスを秘めている。現代では「裁判官は法を料理する名コックである」というレヴェルにまで達しているかもしれないが、この命題が編みあげられたと思われる近代のドイツでは、完璧な成文法律の体系を構築した、という自信が当局によっていだかれていたので、一介の裁判官に自由な判断や裁量の余地など与えず、法律の命ずるままに判決マシンとして、法律、ひいては国家に奉仕させることがのぞましい、と考えられていたのであろう。<1467>

<1440> **Judex extra territorium est privatus.** [Jūdex est privātus extrā territōrium.] (Paul.D.1,18,3) 「管理地域以外では、裁判官は私 [人] である。」<territorium>…<territorium> [領域] の ㊦㊧㊨㊩。<870>

<1441> **Judex habere debet duos sales, salem sapientiae, ne sit insipidus, et salem conscientiae, ne sit diabolus.** [Jūdex d

ēbet habēre salēs duōs; salem sapientiae, nē sit insipidus, et sal em cōnscientiae, nē sit diābolus.] (3 Co.Inst.147)「裁判官は、二つの塩を持つべきである。[その一つは]知識の塩であり、これは彼が無味乾燥な状態に成らないためのものである。[もう一つは]良心の塩であり、これは彼が極悪な状態に成らないためのものである。」<sales>…<sal> [塩]の 𐌺𐌰𐌽、<saalem>…さきの<sal>の 𐌺𐌰𐌽、<sapientiae>…<sapientia> [英知]の 𐌺𐌰𐌽、<insipidus>…「無味乾燥な」、<conscientiae>…<conscientia> [良心]の 𐌺𐌰𐌽、<diabolus>…「極悪な」。

<1441bis> **Judex ne eat ultra petita partium.** [Nē jūdex eat ultrā petita partium.]「裁判官が当事者の請求を超えて行かないよう。」<eat>…<eo> [行く]の 𐌺𐌰𐌽 𐌺𐌰𐌽、<petita>…<petitum> [請求]の 𐌺𐌰𐌽、<partium>…<pars> [部分]の 𐌺𐌰𐌽 (名略)。

<1442> **Judex non calculat.** [Jūdex nōn calculat.] (Mac.D.49,8,1,2)「裁判官は計算は行なわない。」<calculat>…<calculo> [計算する]の 𐌺𐌰𐌽。

<1443> **Judex non communicat officium suum nisi imploratus.** [Jūdex nōn commūnicat officium suum nisi implorātus.]「裁判官は、求められた場合を除いて、自身の職務を果さない。」<communicat>…<communico> [ともにする]の 𐌺𐌰𐌽 𐌺𐌰𐌽、<imploratus>…<imploro> [救助を求める]の見出し語 𐌺𐌰𐌽。

<1444> **Judex non debet lege clementior esse.** [Jūdex nōn dēbet esse clēmēntior lēge.]「裁判官は法律(法)よりもいっそう慈悲深いものであってはならない。」<clementior>…<clemens> [慈悲ぶかい]の見出し語 𐌺𐌰𐌽。※<lege>は「比較の奪格」の用例である→<414>。「比較の奪格」→「索引」

<1445> **Judex non facile recedere debet.** [Jūdex nōn dēbet recēdere facile.]「裁判官は安易には退いてはならない。」<recedere>…<recedo> [はなれる]の 𐌺𐌰𐌽。

<1446> **Judex non potest esse testis in propria causa.** [Jūdex nōn potest esse testis in causā propriā.] (4 Co.Inst.279)「裁判官は、自身の事案に於いては、証人であることは出来ない。」

<1447> **Judex non potest injuriam sibi datam punire.** [Jūdex nōn potest pūnīre injūriam datam sibi.] (C.J.3,5,1; 12 Co.Rep.113,114)「裁判官は、自身に加えられた不法侵害を罰することは出来ない。」

<1448> **Judex non reddit plus, quam quod petens ipse requirit.** [Jūdex nōn reddit plūs, quam quod petēns ipse requirit.] (Ul p.D.2,1,19,1; 2 Co.Inst.286)「裁判官は、請求する[人]自身が求める

[もの]以上の[もの]は、与えない。」<reddit>…<reddo>[与える]の 𐀀𐀁𐀃、<petens>…<peto>[請求する]の見出し語 𐀀𐀁𐀃 (名略)、<requirit>…<requiro>[求める]の 𐀀𐀁𐀃。※<plus ~ quam>は比較の構文である。<1922>・<3362>

<1449> **Judex non solum quid possit, sed etiam quid deceat ponderare debet.** [Jūdex dēbet ponderāre, nōn solum quid possit, sed etiam quid deceat.]「裁判官は、単になにを[行なうことが]出来るかだけでなく、なにを[行なうことが]適切であるかさえも、考量すべきである。」<ponderare>…<ponero>[量る]の 𐀀𐀁𐀃、<deceat>…<deceo>[ふさわしい]の 𐀀𐀁𐀃。※<non solum ~ sed etiam>は関連語である。「疑問代名詞」→<1036>・「索引」

<1449bis> **Judex tunc litem suam facere intelligitur cum dolo malo in fraudem legis sententiam dixerit.** [Jūdex intelligitur facere litem suam tunc, cum dixerit sententiam dolō malō in fraudem lēgis.]「裁判官は、法律(法)を欺いて悪意で判決を下したときに、そのとき、訴訟を自身のもとするものと理解される。」<fraudem>…<fraus>[詐害]の 𐀀𐀁𐀃。※主格不定法の構文が見える。主語の<judex>は、<intelligitur>と<facere>の双方にかかる。 𐀀𐀁𐀃→<98>。<tunc ~, cum>は関連語である。

<1450> **Judicandum est legibus, non exemplis.** [Est jūdicandum lēgibus, nōn exemplis.] (C.J.7,45,13; 4 Bl.Com.405; 4 Co.Rep.33b)「先例に依ってでなく、法律(法)に依って、裁かれるべきである。」<judicandum>…<judico>[裁く]の 𐀀𐀁𐀃<judicandus>[裁かれるべき[である]]の 𐀀𐀁𐀃、<exemplis>…<exemplum>[先例]の 𐀀𐀁𐀃。※ 𐀀𐀁𐀃→<1>。主語は隠れていて、一種の非人称的な表現となっている→<265>。「非人称用法」→「索引」、「タテマエ(法律(法))とホンネ(先例)」→「索引」。

<1451> **Judicata res pro veritate accipitur.** [Rēs jūdicāta accipitur prō vērītāte.]「判決された事項は真実と受けとられる。」<accipitur>…<accipio>[うけとる]の 𐀀𐀁𐀃、<veritate>…<veritas>[真実]の 𐀀𐀁𐀃。

<1452> **Judicatum titulus est optimus.** [Jūdicātum est titulus optimus.]「判決は最良の権原である。」<titulus>…「権原」。

<1453> **Judices non tenentur exprimere causam sententiae suae.** [Jūdicēs nōn tenētur exprimere causam sententiae suae.] (Jenk.Cent.75)「裁判官は、自身の判決の理由を開示するよう拘束されない。」<exprimere>…<exprimo>[明瞭にのべる]の 𐀀𐀁𐀃。

<1454> **Judices qui ex lege judicatis legibus obtemperare debetis.** [Jūdicēs, quī jūdicātis lēge, dēbētis obtemperāre lēgibus.] (Cicero) 「法律（法）に基づいて裁判を行なう君たち裁判官は、法律（法）に従うべきである。」<obtemperare>…<obtempero> [したがう] の 𐀀𐀁。

<1455> **Judici incompetenti impune non paretur.** [Nōn pārētur jūdicī incompetentī impūnē.] (Paul.D.2,1,20; C.J.7,48.Rub.) 「権限を持たない裁判官に服従しなくても、罰せられない。」<paretur>…<pareo> [服従する] の 𐀀𐀂𐀃𐀄、<incompetenti>…<incompetens> [無権限の] の 𐀀𐀅𐀆𐀇。※<impune>は、<frustra> [無益に・～しても無益である] などとともに、文章全体にかかる副詞となっている。「<frustra>系のもの」と同じような訳法になる→「索引」。「ローマ法のバランス感覚・法のバランス感覚」→「索引」、「自動詞の受動相」→<59>・「索引」。<708>・<1456>

<1456> **Judici officium suum excedenti non paretur.** [Nōn pārētur jūdicī excēdentī officium suum.] (Paul.D.2,1,20; Jenk.Cent.139) 「自身の職務を超えて進む裁判官には、人は服従しない。」<paretur>…<pareo> [服従する] の 𐀀𐀂𐀃𐀄、<excedenti>…<excedo> [こえる] の 𐀀𐀈𐀉<excedens>の 𐀀𐀅𐀆𐀇。※「自動詞の受動相」→<59>・「索引」。<708>

<1457> **Judici satis poena est quod Deum habet ultorem.** [Quod habet Deum ultōrem, est poena jūdicī satis.] (1 Leon, 295) 「裁判官が神を罰し手として持つことは、裁判官には十分に罰である。」<ultorem>…<ultor> [復讐者] の 𐀀𐀈𐀉。※<Deum>と<ultorem>は同格（対格形）の関係に立つ。

<1458> **Judicia in curia regis reddita non adnihilentur, sed stent in suo robore, quousque per errorem aut attinctam adnullentur.** [Jūdicia reddita in cūriā rēgis nōn adnihilentur, sed stent in robōre suō, quōusque adnūllentur per errōrem aut attīnctam.] (2 Co.Inst.360) 「国王の裁判所で下された判決は、無効とされるべきではなくて、誤[判]あるいは亡命のためにそれが無効とされるまでは、その効力を保ちつづけるべきである。」<reddita>…<reddo> [与える] の 𐀀𐀈𐀉<redditus>の 𐀀𐀊𐀋𐀌、<curia>…<curia> [裁判所] の 𐀀𐀍𐀎、<adnihilentur>…<adnihilo> [絶滅させる] の 𐀀𐀏𐀐𐀑𐀒、<stent>…<sto> [立つ] の 𐀀𐀓𐀔𐀕、<robore>…<robor> [力強さ] の 𐀀𐀍𐀎、<adnullentur>…<adnullo> [無効とする] の 𐀀𐀏𐀐𐀑𐀒、<attinctam>…<attincta> [亡命] の 𐀀𐀈𐀉。

<1459> **Judicia in deliberationibus crebro maturescunt, in ac**

celerato processu nunquam.[Jūdicia in dēliberātiōnibus mātūrēs cunct crēbrō, in prōcēssū accelerātō nunquam.] (3 Co.Inst.210)「熟考の下に〔作られた〕判決はしばしば熟成したものとなるが、〔しかし、〕急がされた経過の下で〔作られた判決は〕、決して〔そうなら〕ない。」<deliberationibus>…<deliberatio>〔熟慮〕の 𠄎𠄎、<maturescunt>…<maturesco>〔成熟する〕の 𠄎𠄎、<processu>…<processus>〔経過〕の 𠄎𠄎、<accelerato>…<accelero>〔急がせる〕の 𠄎𠄎<acceleratus>の 𠄎𠄎。

<1460> **Judicia posteriora sunt in lege fortiora.** [Jūdicia posteriora sunt fortiora in lēge.] (8 Co.Rep.97)「(いっそう)後の判決は法律(法)においてはいっそう強い。」<fortiora>…<fortis>〔強い〕の 𠄎<fortior>の 𠄎。

<1461> **Judicia sunt tamquam juris dicta, et pro veritate accipiuntur.**[Jūdicia sunt dicta jūris tamquam, et accipiuntur prō veritate.] (2 Co.Inet.537)「判決は、法の言明のようなものであり、そして、真実と受けとられる。」<accipiuntur>…<accipio>〔うけとる〕の 𠄎𠄎、<veritate>…<veritas>〔真実〕の 𠄎𠄎。

<1462> **Judicia suum effectum habere debent.**[Jūdicia dēbent habēre effectum suum.] (2 Co.Inst.341)「判決はそれ自体の効果を持つべきである。」

<1463> **Judiciis posterioribus fides est adhibenda.** [Fidēs est adhibenda jūdicis posterioribus.] (Dyer,12 ; 13 Co.Rep.14)「信頼が(いっそう)後の裁判に寄せられるべきである。」<adhibenda>…<adhibeo>〔つける〕の 𠄎𠄎<adhibendus>〔つけられるべき〔である〕〕の 𠄎𠄎。※ 𠄎𠄎→<1>

<1464> **Judicis est in pronuntiatione sequi regulam, exceptio ne non probata.** [Sequī rēgulam in prōnūntiātiōne, exceptiōne nōn probātā, est jūdicis.]「判決に於いては、例外が証明されない限り、原則に従うのは、裁判官の義務である。」<regulam>…<regula>〔原則〕の 𠄎𠄎、<pronuntiatione>…<pronuntiatio>〔判決〕の 𠄎𠄎、<exceptione>…<exceptio>〔例外〕の 𠄎𠄎。※絶対的奪格の構文が見える。「名詞(exceptione) プラス完了分詞(probata)型」で、その意味は「～すると」である。 𠄎𠄎→<22>。「属格の訳しかた」→<68>・<84>・「索引」、「原則と例外」→「索引」、「タテマエ(原則)とホンネ(例外)」→「索引」。

<1465> **Judicis est innocentiae subvenire.** [Subvenire innocentiae est jūdicis.]「潔白さに助力をすることは、裁判官の義務である。」<subvenire>…<subvenio>〔助ける〕の 𠄎𠄎、<innocentiae>…<innocentia>〔潔白さ〕の 𠄎𠄎。※「属格の訳しかた」→<68>・<84>・「索引」

<1466> **Judicis est judicare secundum allegata et probata.** [Judicāre secundum allēgāta et probāta est jūdīcis.] (Dyer,12) 「申したてられた [こと] および証明された [こと] に従って裁くのは、裁判官の任務である。」 <judicare>…<judico> [裁く] の 𣎵𣎵、<allegata>…<allego> [申したてる] の 𣎵𣎵<allegatus>の 𣎵𣎵𣎵 (名略)。※「属格の訳しかた」→<68>・<84>・「索引」

<1467> **Judicis est jus dicere, non dare.** [Dicere jū, nōn dare, est jūdīcis.] (Lofft,Append.42) 「法を宣明することは裁判官の任務であるが、それを [自ら] 与えることは [任務では] ない。」※「属格の訳しかた」→<68>・<84>・「索引」。<1439>

<1468> **Judicis est legibus parere.** [Pārēre lēgibus est jūdīcis.] 「法律 (法) に従うことは裁判官の義務である。」 <parere>…<pareo> [したがう] の 𣎵𣎵。※「属格の訳しかた」→<68>・<84>・「索引」。

<1469> **Judicis est semper in causis veram sequi, patroni nonnumquam verisimile, etiamsi minus sit verum, defendere.** [Sequī vēram in causīs est jūdīcis semper; dēfendere vērisimile, etiamsī sit vērum minus, patrōnī nōnnumquam.] (Cic.De Off.2,14,51) 「事件に於いて真実の [こと] に従うことは常に裁判官の義務であるが、[しかし、] たとえあまり真実でなくても、真実らしい [こと] を弁護することは、ときには弁護人の義務である。」 <veram>…<verus> [真実の] の 𣎵𣎵𣎵 (名略)、<verum>…さきの<verus>の 𣎵𣎵𣎵、<defendere>…<defendo> [弁護する] の 𣎵𣎵、<verisimile>…<verisimilis> [真実らしい] の 𣎵𣎵𣎵 (名略)、<patroni>…<patronus> [弁護人] の 𣎵𣎵。※「属格の訳しかた」→<68>・<84>・「索引」

<1470> **Judicis officium est opus diei in die suo perficere.** [Perficere opus diēi in diē suō est officium jūdīcis.] (2 Co.Inst.250; Dyer,12) 「日の仕事をその日の内に完了することは、裁判官の義務である。」 <perficere>…<perficio> [完了する] の 𣎵𣎵、<opus>…<opus> [仕事] の 𣎵𣎵、<diei>…<dies> [日] の 𣎵𣎵、<die>…さきの<dies>の 𣎵𣎵。※不定法が主語となっている→<171>。「属格の訳しかた」→<68>・<84>・「索引」

<1471> **Judicis officium est, ut res, ita tempora rerum quaerere, tempore quaesto tutus eris.** [Quaerere tempora rērum ita, ut rēs, est officium jūdīcis, eris tūtus, tempore quaestō.] (Ovid.Tr.1,1,37; Co.Litt.171a) 「[物事] [それ自体] と同じように、そのように物事の [発生した] 時点を探求することは、裁判官の義務である。[そして、] 時点が探求されると、君は安全であろう。」 <quaerere>…<quaero>

[探求する]の 𠄎𠄎、<tutus>…「安全な」、<quaesto>…さきの<quaero>の 𠄎𠄎<quaestus>の 𠄎𠄎。※絶対的奪格の構文が見える。「名詞 (tempore) プラス分詞 (quaesto)」型で、その意味は「～すると」である。𠄎𠄎→<22>。「属格の訳しかた」→<68>・<84>・「索引」。<ita ~, ut>は関連語である。

<1472> **Judicium a non suo iudice datum nullius est momenti.** [Jūdicium datum ā jūdice nōn suō est mōmentī nūllius.] (10 Co.Rep.76)「本来の裁判官でない人によって与えられた判決は、無効である。」<momenti>…<momentum> [重み]の 𠄎𠄎。※「属格の訳しかた」→<68>・<84>・「索引」

<1473> **Judicium est quasi juris dictum.** [Jūdicium est dictum jūris quasi.] (Co.Litt.168)「判決はほとんど法の言明のようなものである。」<dictum>…「表現」。

<1474> **Judicium non debet esse illusorium; suum effectum habere debet.** [Jūdicium non dēbet esse illūsōrium; dēbet habēre effectum suum.] (2 Co.Litt.341)「判決は空虚であってはならない。そして、それはそれ自身の効果を持つべきである。」<illusorium>…<illusorius> [空虚な]の 𠄎𠄎。

<1475> **Judicium redditur in invitum praesumptione legis.** [Jūdicium redditur in invitum praesūptiōne lēgis.] (Co.Litt.248b, 314b)「判決は、法律(法)の推定に依って、望まない[人]に対して下される。」<redditur>…<reddo> [与える]の 𠄎𠄎、<invitum>…<invitus> [望まない]の 𠄎𠄎 (名略)、<praesumptione>…<praesumptio> [推定]の 𠄎𠄎。※「意思に反する」→「索引」

<1476> **Judicium semper pro veritate accipitur.** [Jūdicium accipitur prō vērītate semper.] (Ulp.D.1,5,25; 2 Co.Inst.380; Co.Litt.39a)「判決は常に真実と考えられる。」<accipitur>…<accipio> [うけとる]の 𠄎𠄎、<veritate>…<veritas> [真実]の 𠄎𠄎。

<1477> **Juncta juvant.** [Jūncta juvant.] (3 Man. & G.99; 11 East.220)「それらは、結びあわせられると、役だつ。」<juncta>…<jungo> [結びあわせる]の 𠄎𠄎<junctus>の 𠄎𠄎 (名略)、<juvant>…<juvo> [支える]の 𠄎𠄎。※<juncta>という分詞の訳しかたについては、<55>を参照。ちなみに、英語でも、こここのところがもし<United they aid.>と訳出されると、この表現はラテン語感に近いものとなる(もったも、主語が必要とされる英語では、<they>がちゃんと顔をだしているが)。

<1478> **Jura constitui oportet in his quae, ut plurimum, accidunt, non quae ex inopinato.** [Oportet jurā cōstituī in hīs, quae, ut plurimum, accidunt, non quae ex inopinato.]

ae accidunt, ut plūrimum, nōn quae ex inopinātō.] (*Pomp.D.1,3,3*)
「法は、予期しない [こと] から [生ずる] [こと] ではなくて、ごく普通
に生ずることの中で、制定される必要がある。」<constitui>…<constituo>
[制定する] の ㊦ ㊧ ㊨、<accidunt>…<accido> [生ずる] の ㊩ ㊪ ㊫、<in
opinato>…<inopinatus> [予感しない] の ㊬ ㊭ ㊮ (名略)。※<oportet>
にひかれた対格不定法の構文が見える。対格形の<jura>は、意味上の主語
として、<constitui>にかかる。㊯ ㊰→<35>

<1479> **Jura ecclesiastica limitata sunt infra limites separat
os.** [Jūra ecclēsiastica sunt limitāta infrā limitēs sēparātōs.] (3
Bulst.53)「教会の法は、[特に] 分けられた領域の中に限定された。」<ec
clesiastica>…<ecclesiasticus> [教会の] の ㊱ ㊲ ㊳、<limitata>…<limi
to> [かぎる] の ㊴ ㊵ ㊶<limitatus>の ㊷ ㊸ ㊹ (受動相完了の構成要素)、<li
mites>…<limes> [境] の ㊺ ㊻ ㊼、<separatos>…<separo> [分ける] の ㊽
㊾ ㊿<separatus>の ㊿ ㊿ ㊿。

<1480> **Jura eodem modo destituuntur quo constituuntur.** [Jū
ra dēstituuntur modō eōdem, quō cōstituuntur.] (*Ulp.D.50,17,35*
; Broom,Max.878 ; 2 Dwar.St.672)「法は、それが設定される際に用い
られるのと同じ方法によって、廃止される。」<destituuntur>…<destituo>
[廃止する] の ㊿ ㊿ ㊿、<modo>…<modus> [方法] の ㊿ ㊿、<constitu
untur>…<constituo> [設定する] の ㊿ ㊿ ㊿。※<eodem modo ~, qu
o>は、<idem ~, qui>系の関連語である。「ローマ法のバランス感覚・法
のバランス感覚」→「索引」、「設定と解消」→「索引」。

<1481> **Jura naturae sunt immutabilia.** [Jūra nātūrae sunt im
mūtabilia.] (*I.J.1,2,11* ; Branch,Princ. ; Broom,Max.72 ; Hob.87 ; Ja
cob.63)「自然の掟は不変である。」<immutabilia>…<immutabilis> [不
変の] の ㊿ ㊿ ㊿。※「自然」→「索引」

<1482> **Jura non in singulas personas, sed generaliter consti
tuuntur.** [Jūra cōstituuntur nōn in persōnās singulās, sed gene
rālīter.] (*Ulp.D.1,3,8*)「法は、個々 [人々] に対してではなくて、一般
的に、制定される。」<constituuntur>…<constituo> [制定する] の ㊿ ㊿ ㊿
㊿、<singulas>…<singuli> [個々の] の ㊿ ㊿ ㊿。※<non ~ sed>は相関
語である。

<1483> **Jura non possidentur, sed quasi possidentur.** [Jūra nō
n possidentur, sed possidentur quasī.] (*Ulp.D.1,3,8*)「権利は占有さ
れないが、しかし、いわば占有されるようなものである。」<possidentur>
…<possideo> [占有する] の ㊿ ㊿ ㊿。※<non ~ sed>は相関語である。

<1484> **Jura novit curia.** [Cūria nōvit jūra.]「裁判所が法を知っ

ている。」<curia>…「裁判所」、<novit>…<nosco>[知る]の ㊦㊧㊨。※<novi>は、完了形でありながら、「現在」のニュアンスをもつ特異な動詞に属する。この命題はとくに国際法で意味のある表現である。「現在形の意味をもつ完了」→<275>・「索引」、「国際法」→「索引」

<1485> **Jura ossibus inhaerent.** [Jūra inhaerent ossibus.]「権利は骨に付着する。」<inhaerent>…<inhaereo>[へばりつく]の ㊦㊧㊨、<ossibus>…<ossis>[骨]の ㊦㊧㊨。

<1486> **Jura publica anteferenda privatis.** [Jūra pūblica anteferenda privātis.] (*Pap.D.2,14,27,4*; Co.Litt.130)「公けの法(強行法)は、私[法]に優先させられるべき[である]。」<anteferenda>…<antefero>[優先させる]の ㊦㊧㊨<anteferendus>[[優先させられるべき[である]]]の ㊦㊧㊨。※ ㊦㊧㊨→<1>。動詞が省略されている。「公と私」→「索引」、「タテマエ(公)とホンネ(私)」→「索引」。<1487>・<1636>・<2706>・<3716>・<3717>

<1487> **Jura publica ex privato promiscue decidi non debet.** [Jūra pūblica nōn dēbet dēcīdī ex privātō prōmiscuē.] (Co.Litt.181b)「公けの法は私的な[こと]に基づいて無分別に決定されてはならない。」<decidi>…<decido>[決定する]の ㊦㊧㊨。※「公と私」→「索引」、「タテマエ(公)とホンネ(私)」→「索引」。<1486>・<1636>・<2706>・<3716>・<3717>

<1488> **Jura publica favent privatae domui.** [Jūra pūblica favent domū privātae.]「公けの法は私人の家を優遇する。」<favent>…<faveo>[好意をもつ]の ㊦㊧㊨、<domui>…<domus>[家]の ㊦㊧㊨。

<1489> **Jura regis specialia non conceduntur per generalia verba.** [Jūra speciālia rēgis nōn concēduntur per verba generālia.] (Jenk.Cent.103)「国王の特別の権利は、一般的な文言に依っては譲与されない。」<specialia>…<specialis>[特別の]の ㊦㊧㊨、<conceduntur>…<concedo>[ゆずる]の ㊦㊧㊨。※「一般と特殊(特別)」→「索引」

<1490> **Jura sanguinis nullo jure civili dirimi possunt.** [Jūra sanguinis possunt dirimī jūre cīvilī nullō.] (*Pomp.D.50,17,8*; Bac.Max.Reg.11)「血縁関係の法は、いかなる市民法に依っても破壊されない。」<sanguinis>…<sanguis>[血]の ㊦㊧㊨、<dirimi>…<dirimo>[分解する]の ㊦㊧㊨。<1702>

<1491> **Juramentum ad incognita non extenditur.** [Jūrāmentum nōn extenditur ad incōgnita.]「宣誓は、知られていない[こと]へは拡大されない。」<juramentum>…「宣誓」、<extenditur>…<extendo>[ひろげる]の ㊦㊧㊨、<incognita>…<incognitus>[知られていない]

の 𠄎𠄎𠄎 (𠄎𠄎)。

<1492> **Juramentum est indivisibile, et non est admittendum in parte verum et in parte falsum.** [Jūrāmentum est indivisibile, et vērūm in parte et falsum in parte nōn est admittendum.] (4 Co.Inst.279 ; 3 Co.Inst.165) 「宣誓は不可分であり、そして、部分的に正しく、また部分的に偽りである [もの] は、認められるべきではない。」<juramentum>…「宣誓」、<indivisibile>…<indivisibilis> [分けることができない] の 𠄎𠄎𠄎、<verum>…<verus> [真実の] の 𠄎𠄎𠄎 (𠄎𠄎)、<parte>…<pars> [部分] の 𠄎𠄎、<falsum>…<falsus> [偽りの] の 𠄎𠄎 (𠄎𠄎)、<admittendum>…<admitto> [認める] の 𠄎𠄎<admittendus> [認められるべき [である]] の 𠄎𠄎𠄎。※ 𠄎𠄎→<1>

<1493> **Jurare est Deum in testem vocare, et est actus divini cultus.** [Jūrāre est vocāre Deum in tēstem, et est āctus cultūs divīnī.] (3 Co.Inst.165) 「宣誓することは、神を証人に呼びよせることであり、また、神聖な崇拜の行為である。」<jurare>…<juro> [宣誓する] の 𠄎𠄎、<vocare>…<voco> [よぶ] の 𠄎𠄎、<cultus>…<cultus> [尊敬] の 𠄎𠄎、<divini>…<divinus> [神聖な] の 𠄎𠄎𠄎。

<1493bis> **Jurare non cogitur qui sufficienter probat.** [Quī probat sufficienter, nōn cōgitur jūrāre.] 「十分に証明する [人は]、宣誓することを強いられない。」<jurare>…<juro> [宣誓する] の 𠄎𠄎。

<1494> **Jurato creditur in judicio.** [Crēditur jūrātō in jūdiō.] (3 Co.Inst.79) 「法廷では宣誓された [こと] が信用される。」<creditur>…<credo> [信ずる] の 𠄎𠄎𠄎、<jurato>… 𠄎<juror> [宣誓する] の 𠄎𠄎<juratus>の 𠄎𠄎𠄎 (𠄎𠄎)。※「自動詞の受動相」→<59>・「索引」。<jurato>は、<juratus> [宣誓者] という名詞の 𠄎𠄎の形でもある。<1243>

<1495> **Jure dantis confirmato confirmatur jus accipientis.** [Jūs accipientis cōfirmātur, jūre dantis cōfirmātō.] 「供与する [人] の権利が確認されると、受領する [人] の権利は確認される。」<accipientis>…<accipio> [うけとる] の 𠄎𠄎<accipiens>の 𠄎𠄎𠄎 (𠄎𠄎)、<confirmatur>…<confirmo> [確認する] の 𠄎𠄎𠄎、<dantis>…<do> [与える] の 𠄎𠄎<dans>の 𠄎𠄎𠄎 (𠄎𠄎)、<confirmato>…さきの<confirmo>の 𠄎𠄎<confirmatus>の 𠄎𠄎𠄎。※絶対的奪格の構文が見える。「名詞 (jure) プラス完了分詞 (confirmato)」で、その意味は「～ときに」である。 𠄎𠄎→<22>

<1495bis> **Jure hoc evenit ut quod quisque ob tutelam corporis sui fecerit, jure fecisse existimetur.** [Hoc, ut existimētur fecisse, quod quisque fēcerit ob tūtelam corporis suī, ēvenit jūre.]

「ある人が自身の身体の保護のためになした[ことが]正当になしたものと
考えられるということが、法上生ずる。」<evenit>…<evenio> [生ずる] の
𠄎𠄎𠄎、<existimetur>…<existimo> [評価する] の 𠄎𠄎𠄎𠄎、<tutel
am>…<tutela> [後見] の 𠄎𠄎、<corporis>…<corpus>の 𠄎𠄎。※主格不
定法の構文が見える。隠れている先行詞主語は、<existimetur>と<fecisse>
の双方にかかる。<hoc , ut>は相関語である。 𠄎𠄎→<98>

<1496> **Jure naturae aequum est neminem cum alterius detri
mento et injuria fieri locupletioem.** [Est aequum jūre nāturae
nēmīnem fierī locuplētīōem cum dētrimentō et injūriā alterius.]
(*Pomp.D.50,17,206*) 「誰も、他[人]への加害および不法侵害に依って
いっそう富むように成らないことは、自然の法によって衡平である。」<ae
quum>…<aequus> [衡平な] の 𠄎𠄎𠄎、<locupletioem>…<locuples>
[富んだ] の 𠄎<locupletior>の 𠄎𠄎、<detrimento>…<detrimentum>
[損害] の 𠄎𠄎。※<est aequum>にひかれた対格不定法の構文が見える。
対格形の<neminem>は、意味上の主語として、<fieri>にかかる。 𠄎𠄎→<3
5>。「自然法」→「索引」。<653>・<1742>・<1983>

<1497> **Juris effectus in executione consistit.** [Effectus jūris
cōnsistit in execūtiōne.] 「法の効果は執行の中に在る。」<consistit>…<c
onsisto> [存立する] の 𠄎𠄎、<executione>…<executio> [執行] の 𠄎
𠄎。<842>・<1463>

<1497bis> **Juris executio non habet injuriam.** [Execūtiō jūris
nōn habet injūriam.] 「法の執行は不法侵害を持たない。」<executio>…
「執行」。

<1498> **Juris ignorantia est cum jus nostrum ignoramus.** [Ign
orantia jūris est, cum ignōrāmus jūs nostrum.] (Haven v. Foster,
9 Pick. (Mass.) 130, 19 Am.Dec.353) 「法の不知は、私たちが私たち自
身の法を知らないときに、存在する。」<ignorantia>…「不知」、<ignora
mus>…<ignoro> [不知である] の 𠄎𠄎。

<1499> **Juris ignorantia nocet, facti non nocet.** [Ignōrantia j
ūris nocet, factī nōn nocet.] (*Paul.D.22,6,9pr.*) 「法の不知は害する
が、[しかし、] 事実の[不知は] 害しない。」<ignorantia>…「不知」、<n
ocet>…<noceo> [害する] の 𠄎𠄎。※「法と事実」→「索引」、「タテマ
エ(法)とホンネ(事実)」→「索引」。

<1500> **Juris peritus est regula aequitatis.** [Peritus jūris est
rēgula aequitātis.] (Fischart) 「法学者は衡平の基準である。」<peritus
juris>…「法学者」、<regula>…「基準」。※<peritus> [精通した] は属
格をひく形容詞なので、<jus>の属格の<juris>がくる。「法に精通した(人)」

とは、「法学者」のことである。「属格をひく形容詞」→「索引」

<1501> **Juris praecepta sunt haec: honeste vivere, alterum non laedere, suum cuique tribuere.** [Praecepta jūris sunt haec: vivere honestē, nōn laedere alterum, tribuere suum cuique.] (*Ulp. D.1,1,10,1*; 1 *Broom.Com.*40)「法の掟はこれらである。誠実に生きること、他[人]を害しないこと、各人に彼自身の[もの]を配分すること。」<praecepta>…<praeceptum> [掟]の 𠄎𠄎、<vivere>…<vivo> [生きる]の 𠄎𠄎、<laedere>…<laedo> [害する]の 𠄎𠄎、<tribuere>…<tribuo> [配分する]の 𠄎𠄎。※三連の不定法の用例は、格言としては、とても珍しい。しかも、これは有名な命題である。「不定法」→<171>。<1101>・<1561>・<3517>

<1502> **Jurisdictio est potestas de publico introducta cum necessitate juris dicendi.** [Jūrisdictiō est potestās intrōducta dē publicō cum necessitāte jūris dicendī.] (10 *Co.Rep.*73a)「裁判権は、法を宣言する必要性を伴うかたちで、公的な[もの]に依って設けられた権能である。」<potestas>…「権能」、<introducta>…<introduco> [導入する]の 𠄎𠄎<introducitur>の 𠄎𠄎、<dicendi>…<dico> [言う]の 𠄎𠄎<dicendus> [[言われるべき[である]]]の 𠄎𠄎。※<juris dicendi>は、動形容詞を用いた表現であるが、その意味は、動名詞的にとらえて、「法を宣言することの」としななければならない。𠄎𠄎→<1>、「動形容詞と動名詞の密接な関係」→「索引」。<153>・<1540>

<1503> **Jurisdictio sine modica coercitione nulla est.** [Jūrisdictiō nūlla est sine coercitiōne modicā.] (*Paul.D.1,21,5,1*)「適度の制裁を欠くような裁判権は、存在しない。」<coercitione>…<coercitio> [制裁]の 𠄎𠄎、<modica>…<modicus> [適度の]の 𠄎𠄎。

<1504> **Jurisjurandi forma verbis differt, re convenit, hunc enim sensum habere debet, ut Deus invocetur.** [Fōrma jūrisjurandī differt verbīs, convenit rē, enim hunc dēbet habēre sēsum, ut Deus invocētur.] (2 *Gro.D.J.B.C.*13,§10; 4 *Co.Inst.*279)「宣誓の形式は、文言に於いては[互いに]異なっている[が、しかし、]実体においては合致する。実際のところ、これは、神が呼ばれるという、この意味を持つべきである。」<jurisjurandi>…<jusjurandum> [宣誓]の 𠄎𠄎、<differt>…<differo> [異なる]の 𠄎𠄎、<invocetur>…<invoco> [よびかける]の 𠄎𠄎。※<jurisjurandi>は、見出し語にあたる<jus>のところと、見出し語にあたる<jurandum>のところとが、別々に対応しながら変化した形態の一つ(属格)である。

<1505> **Jurisprudencia est divinarum atque humanarum reru**

m notitia, justī atque injustī scientia. [Jūrisprūdentia est nōtītia rērum dīvinārum atque hūmānārum, scientia jūstī atque injūstī.] (Ulp.D.1,1,10,2; I.J.1,1,1; Brac.3) 「(法に) 精通するということは、神に関する事柄と人に関する事柄を会得することであり、[また、] 正しい[こと]と不正な[こと]を知ることである。」<juris prudentia>…「法に精通していること」(<prudens> [精通している] という形容詞は、属格をひく)、<notitia>…「会得すること」、<divinarum>…<divinus> [神の] の 覆因属、<humanarum>…<humanus> [人の] の 覆因属、<scientia>…「知っていること」、<injusti>…<injustus> [正しくない] の 罫罫属 (名略)。※<jurisprudentia>のところは、しばしば「法学・法律学」と日本語に訳出されるが、ここは、形容詞のニュアンスを残したかたちで「法に精通していること」とうけとめる方がベターであろう。

<1506> **Jurisprudentia legis communis Angliae est scientia socialis et copiosa.** [Jūrisprūdentia lēgis commūnis Angliae est scientia sociālis et copiōsa.] (7 Co.Rep.28a) 「イギリスの普通法に係わる法学は、社会的で豊かな知識である。」<jurisprudentia>…「法に精通していること(法学)」、<Angliae>…<Anglia> [イギリス] の 罫属、<scientia>…「知識」、<socialis>…<socialis> [社会的な] の 罫因国、<copiosa>…<copiosus> [豊かな] の 罫因国。

<1507> **Jus accrescendi inter mercatores pro beneficio commercii locum non habet.** [Jūs accrēscendī nōn habet locum inter mercātōrēs prō beneficiō commercii.] (Co.Litt.185) 「商人間では、商業上の利益のために、添加の権利は生じない。」<accrescendi>…<accresco> [つけ加える] の 動名<accrescendum>の 属 (罫)、<mercatores>…<mercator> [商人] の 覆因、<beneficio>…<beneficium> [利益] の 罫属、<commercii>…<commercium> [商業] の 罫属。※動名→<153>・<1540>

<1508> **Jus accrescendi praefertur oneribus.** [Jūs accrēscendī praefertur oneribus.] (Co.Litt.185) 「添加の権利は負担[分]より優位に置かれる。」<accrescendi>…<accresco> [つけ加える] の 動名<accrescendum>の 属 (罫)、<praefertur>…<praefero> [前へ置く]… 覆因罫、<oneribus>…<onus> [負担] の 覆因。※動名→<153>・<1540>

<1509> **Jus accrescendi praefertur ultimae voluntati.** [Jūs accrēscendī praefertur voluntātī ultimae.] (Co.Litt.185) 「添加の権利は終意より優位に置かれる。」<accrescendi>…<accresco> [つけ加える] の 動名<accrescendum>の 属 (罫)、<praefertur>…<praefero> [前へ置く] の 覆因罫。※動名→<153>・<1540>

<1510> **Jus ad finem dat jus ad media.** [Jūs ad finem dat jūs

ad media.]「結果への権利は中間への権利を与える。」〈finem〉…〈finis〉
[結末]の 罠 罠、〈media〉…〈medium〉[中間]の 罠 罠。※「結末と中間」
→「索引」。〈484〉・〈2878〉・〈2962〉

〈1511〉 **Jus aliquod faciunt affinia vincula nobis.** [Vincula affinia faciunt jūs aliquod nōbīs.] (Or.Pont.4,8,9)「姻戚の絆は私たちにある権利を作る。」〈vincula〉…〈vinculum〉[ひも]の 罠 罠、〈affinia〉…〈affinis〉[姻戚関係の]の 罠 罠。

〈1512〉 **Jus civile est quod sibi populus constituit.** [Jūs cīvile est, quod populus cōstituit sibi.] (Gai.D.1,1,9; I.J.1,2,1; Jackson v. Jackson, 1 Johns (N.Y.1) 424,426)「市民法は、国民が自身のために制定した[もの]である。」〈populus〉…「国民」、〈constituit〉…〈constituo〉[設ける]の 罠 罠。※〈constituit〉の形は、現在形と完了形とで同じになる。このような定義的規定は、ローマ法では比較的めずらしい例に属する。「定義」→「索引」

〈1513〉 **Jus civile neque inflecti gratia, neque perfringi potentia, neque adulterari pecunia debet.** [Jūs cīvile dēbet, neque inflectī gratiā, neque perfringī potentiā, neque adulterārī pecuniā.] (Cic.Pro Caec.26)「市民法は、恩恵に依って曲げられることも、権勢によって破壊されることも、金銭に依って汚されることも、なされるべきではない。」〈inflecti〉…〈inflecto〉[まげる]の 罠 罠、〈perfringi〉…〈perfringo〉[くたく]の 罠 罠、〈potentia〉…〈potentia〉[権勢]の 罠 罠、〈adulterari〉…〈adultero〉[偽造する]の 罠 罠、〈pecunia〉…〈pecunia〉[金銭]の 罠 罠。※〈neque ~ neque ~ neque〉は相関語である。

〈1514〉 **Jus civile scriptum est vigilantibus.** [Jūs cīvile est scriptum vigilantibus.] (Cerv.Scaev.D.42,8,24)「市民法は目ざめている[人]のために起草された。」〈scriptum〉…〈scribo〉[書く]の 罠 罠〈scriptus〉の 罠 罠(受動相完了の構成要素)、〈vigilantibus〉…〈vigilo〉[目ざめている]の 罠 罠〈vigilans〉の 罠 罠(名略)。〈3810〉・〈3811〉

〈1515〉 **Jus constitui oportet in his quae, ut plurimum accidunt, non quae ex inopinato.** [Oportet jūs cōstitui in hīs, quae accidunt ut plūrimum, nōn quae ex inopinātō.] (Pomp. D.1,3,3)「法は、予期しない[こと]から[生ずる]ことではなくて、ごく普通に生ずる[こと]の中で、制定される必要がある。」〈constitui〉…〈constituo〉[制定する]の 罠 罠、〈accidunt〉…〈accido〉[生ずる]の 罠 罠、〈inopinato〉…〈inopinatus〉[不慮の]の 罠 罠(名略)。※〈oportet〉にひかれた対格不定法の構文が見える。対格形の〈jus〉は、〈constitui〉の意味上の主語となる。罠 罠→〈35〉

<1516> **Jus descendit, et non terra.** [Jūs dēscendit, et terra nōn.] (Co.Litt.345)「権利は移っていくが、土地までも[そうなるのでは]ない。」<descendit>…<descendo>[おりてくる]の 𐀀𐀁𐀃、<terra>…「土地」。

<1517> **Jus dicere, et non jus dare.** [Dīcere jūs, et nōn dare jūs.] (7 Term.696)「法を言明すること、そして、法を与えないこと。」
※不定法止の構文となっている。ここの<dare jus> [法を与えること] という概念に近いところをもつものに、<condere jura> [法をつくること] という表現がある。「法・法律をつくりだすのはいったい誰か？」というテーマは、どの国、どの時代においても人々の最大の関心事の一つであるが、この点にかんしてローマは歴史上まったく独特の制度をみだしている。それについてのべてみよう。<Responsa prudentium sunt sententiae et opiniones eorum, quibus permissum jura condere.> (Gai.I.1,7) [法学者の解答は、法をつくることを認められた人たちの判断および意見である。] これは、ローマの法学者が法の発展において占めていた特異な地位を端的に表現した、法学者作の命題である。現代においては、主として大学所属の法学者が、学説をつくりあげ、それを通じて間接的に新しい法の創造に貢献している。しかし、「彼らが法を創造することを認められている」とはともいえず、その一方で、裁判所が判例法の形態で法創造に実質的に関与しているにすぎないが、ローマでも、さきに述べたような決定的な段階に達するまでには、いろいろと特殊な経過があった。

法学者の起源は、神事を司った、公人としての神官にある、と考えられているが、世俗的な意味における法学者が生まれたのは前三世紀ころのことである。そして、共和政の末期までには、法学者の任務は、各方面からの諮問に応じて法律問題に対して解答を与えること (**respondere**)、人々の法律行為の実行に助力すること (**cavere**)、訴訟行為に必要な方式を組み立てること (**agere**)、という三つの活動に分けられるようになった。いずれも無償の奉仕活動である(ただし、個々の法学者が、執政官就任をへて元老院のトップ・クラスにいたるまでの政治的経歴を高めるうえで、このようなサービス提供が大きなメリットをもたらすことは、もちろんである)。もともと、彼らは、たんなる私人であり、国家権力とはなんらのかかわりももたなかった。ところが、元首政を創始したアウグストゥス(前二七年から後一四年にわたって支配的地位を保持しつづける)は、共和政末期から多数の法学者間で見解の対立がはげしくなったためだけでなく、巧みな弁論を売物とする弁論家(弁護人)が民事法廷の場で無視できない影響力をもちはじめた結果として、法秩序が極度に混乱してしまっている現状を見て、はじめて、若干名の特定法学者(ホンネ流に表現すると、お

気にいりの人物)に「元首の権威にもとづいて解答すること(地位)〈**ex Augusti auctoritate respondere**〉」(このように訳すことについては学説の対立があるが)を付与し、それによって、その一群の法学者に、彼(元首)自身もつ絶大な権威(ホンネ的には権力)によって裏付けられた事実上の強い指導力を結果的に付与した。この段階で、はじめて、法学者は国家権力と交渉をもつようになった。それ以後、優秀な法学者の多くは、さらにすすんで、皇帝の官僚となり、その結果、官僚法学の傾向が完成されたのである。

さて、問題のガーイウスの言葉は、アウグストゥスから一世紀後の元首ハドリアヌスの時期について書かれたものであるが、その時点では、法学者の解答が法を創造する力をもつ、つまり学説自体が法源となる、ことが確定していたと見てよい。さきの言葉につづいて、〈**Quorum omnium si in unum sententiae concurrunt, id, quod ita sentiunt, legis vicem optinet. Si vero dissentiunt, judici licet quam velit sententiam sequi.**〉(Gai.I.1,2)「もしこれらの人すべての判断が一致する場合には、このような判断は、法の効力をもつ。これに反して、もし法学者の意見が一致しない場合には、裁判官は自身の望む判断にしたがうことを許されている。」と記述されている。元来、法学者の解答は、まったく拘束力をもたず、ただ、事実上、諮問を求めた人(法務官や私人)が、専門家としての法学者の判断を尊重していくだけであった。現在のローマ法研究者間で学説上争いはあるが、ある法学者が特定の法律問題にかんして「彼の権威にもとづいて解答」した場合にも、その見解は厳密な意味での法的拘束力をもたなかった、と考えるべきである。その後、上記の命題の記された時期になってはじめて、法学者の学説(「解答録」という形式の著作全体もこれに含まれる)は、一致するかぎりにおいて、法と同様の効力を獲得するようになった。このようにして形成された学説法は、私法の領域においてローマ法の中核的な部分となる。そして、これは、三世紀における古典期法学の衰退の時期を経由して、『学説彙纂』という立法作品につながり、この法学識の厚い層は、さらに後代に伝えられて、近代法を生み出す豊かな土壌——つまり、一種のデータ・ベース——となったのである。

〈1518〉 **Jus est ars boni et aequi.** [Jūs est ars bonī et aequī.] (Ulp.D.1,1,1pr.; Brac.Fol.2b)「法は良(善)い[こと]および衡平な[こと]の術である。」〈ars〉…「術」。※〈bonum et aequum〉[良(善)い[こと]および衡平な[こと]]という概念はローマ法上重要な概念であり、〈**actiones in bonum et aequum conceptae**〉[良(善)い[こと]および衡平な[こと]にむけて作成された訴権]とか、〈**ex bono et aequo**〉[良(善)い[こと]および衡平な[こと]にもとづいて]とかのかたちで現わ

れる。

<1519> **Jus est belli, ut qui vicissent, iis quos vicissent, quemadmodum vellent, imperarent.** [Ut, quī vicissent, imperārent iīs, quōs vicissent, quemadmodum vellent, est jūs bellī.] (Caes.B. G.1,36,1)「勝利を取めた [人々] が、自身が制圧した人々に対して自身の望むように命令するということが、戦争の法である。」<vicissent>…<vincō> [勝つ] の 𐀓𐀗𐀓𐀗、<imperarent>…<impero> [命ずる] の 𐀓𐀗𐀓𐀗 未完了過去 𐀓𐀗𐀓𐀗、<belli>…<bellum> [戦争] の 𐀓𐀗𐀓𐀗。※接続詞<ut>でひかれる副文のなかには、先行詞をもつ関係代名詞 (iis, quos) と、それをもたないもの (qui) とがある。「国際法」→「索引」

<1520> **Jus est in armis.** [Jūs est in armīs.] (Sen.)「権利は武器の中に存在する。」<armis>…<arma> [武器] (複数形) の 𐀓𐀗𐀓𐀗。※「権利」ではなくて、「法」と読むことももちろん可能である。

<1521> **Jus est norma recti; et quicquid est contra normam recti est injuria.** [Jūs est nōrma rēctī; et quicquid est contrā nōrmam rēctī, est injūria.] (3 Buls.313)「法は正義の規範である。そして、正義の規範に対立するものは、すべて、不法である。」<norma>…「規範」、<recti>…<rectum> [正義] の 𐀓𐀗𐀓𐀗、さきの<normam>…<norma> の 𐀓𐀗𐀓𐀗。

<1522> **Jus et aequitas civitatum vincula.** [Jūs et aequitās vincula civitātum.]「法と衡平は諸国家の鎖 [である。]」<vincula>…<vinculum> [鎖] の 𐀓𐀗𐀓𐀗、<civitatum>…<civitas> [国家] の 𐀓𐀗𐀓𐀗。※動詞が省略されている。「法と衡平」→「索引」、「タテマエ (法) とホンネ (衡平)」→「索引」。

<1523> **Jus et fraus numquam cohabitant.** [Jūs et fraus cohabitant numquam.] (10 Co. Rep.45a)「法と詐欺は決して共存しない。」<fraus>…「詐欺」、<cohabitant>…<cohabito> [ともに住む] の 𐀓𐀗𐀓𐀗。

<1524> **Jus ex facto oritur.** [Jūs oritur ex factō.]「法は事実から生ずる。」<oritur>… 𐀓𐀗<orior> [生ずる] の 𐀓𐀗𐀓𐀗 (𐀓𐀗)。※ここで、「法」という言葉の素姓を探ってみることにしよう。漢字の「法」というのは、もとは二〇以上の画数をもつ、こみいった文字であり、それだけで、「人間の掟・法^{のり}として道徳的善を勧め、有罪者を罰し、社会に正義を実現させる」といった複雑な意味を含んでいる。外国語でも、「法」を意味する言葉は<δίκαιον> (希)、<jus> (羅)、<Recht> (独)、<droit> (仏)、<diritto> (伊)、<derecho> (西)、<право> (露) などの例が示すように、それぞれ、「正しい」という意味を、それ自体のなかに含んでいる。ただ、英語の<law> (法) には、<statutum> (羅)、<Gesetz> (独) などの場合と同じように、

「制定されたもの」という手続的意味しかない。もっとも、英語には「権利」だけを意味する<right>があり、こちらの方は「正しい」の意味をちゃんと備えているが、他の言語の場合とは異なって、英語で、いわば客体的・客観的な概念（タテマエ）である「法」と、いわば主体的・主観的な概念（ホンネ）である「権利」がそれぞれべつの言葉で表現されるのも、少し変わっている。その理由として、法体系・法思想の相違や外来語の影響など、いろいろ考えられるが、今のところうまく説明がつかない。「法と事実」→「索引」、「タテマエ（法律（法））とホンネ（事実）」→「索引」。

<1525> **Jus ex injuria non oritur.** [Jūs nōn oritur ex injūriā.] (*Ulp.D.50,17,134,1*; Broom,Max.738; 4 Bing.639)「法は不法からは生じない。」<oritur>… ㊦<orior> [生ずる] の ㊦㊦㊦ (㊦)。

<1526> **Jus gentium est, quo gentes humanae utuntur.** [Jūs gentium est, quō gentēs hūmānae ūtuntur.] (*Ulp.D.1,1,1,4*)「万民法は、人類の諸民族が用いる [もの] である。」<gentium>…<gens> [民族] の ㊦㊦㊦、<gentes>…さきの<gens>の ㊦㊦㊦、<humanae>…<humanus> [人の] の ㊦㊦㊦。※<jus gentium> [ユース・グンティウム] というラテン語は、現代の法学では、「国際法」と訳されることが多いが、ローマ法の概念としての「万民法」はそれとは内容的に異なるところを多くもっている。

<1526bis> **Jus genitium est quod naturalis ratio inter omnes homines constituit.** [Jūs gentium est, quod ratiō nātūrālis cōstituit inter hominēs omnēs.]「万民法は、自然の理がすべての人間の間に定めた [もの] である。」<gentium>…<gens> [民族] の ㊦㊦㊦、<constituit>…<constituo> [定める] の ㊦㊦㊦、<homines>…<homo> [人] の ㊦㊦㊦。※<constituit>は、現在形でも完了形でも、同形である。

<1527> **Jus honorarium viva vox juris civilis.** [Jūs honōrārium vōx vīva jūris cīvīlis.] (*Marci.D.1,1,8*)「名誉法は市民法の生きた声 [である]。』<honorarium>…<honorarius> [名誉の] の ㊦㊦㊦、<vox>…「声」、<viva>…<vivus> [生きている] の ㊦㊦㊦。※ローマの高級政務官は<honor> [名誉] というものを保有しているが、とりわけ、具体的な訴訟の指揮をとる、執政官につぐナンバー・ツー政務官としての二名の法務官 (praetor) は、その職権・職責を駆使して、実務色の濃い法をつみあげていった。これが「名誉法」である。その中核となっているのは、法務官法である。

ところで、「市民法」というものについては、法律 (lex)、平民会議決 (plebiscitum)、元老院議決 (senatusconsultum)、元首の決定 (decretum principum)、法学者の権威 (auctoritas prudentium) から生ずる「もの」である。」(*Pap.D.1,1,7,1*) という解説がある。これは、後二～三世

紀に生きていた法学者の視点から過去の法源が整理された結果として生じてきた分類である。他方で、慣習というものは法源とは扱われないが、しかし、市民法は、もともと、祖先伝来の慣習と、その慣習を成文化すると同時に新しい規範も定立した一二表法（前五世紀制定）と、その一二表法の法条の中味を解釈によって変えていったものと、その一二表法制定後に、個別的に生み出されてきた法律（平民会議決もこれと同視される）からなっていた。要するに、市民法というものは、ローマ人がもっていた、眼に見える法制度の中核的な部分である。なお、名誉法という法源が問題となった共和政の時代には、元老院議決以下の法源はまだ登場していない。これらは、いわば、ローマ第二の時代である帝政時代をいろどる独特の法源群である。ところで、「市民法の生きた声」というようにリアルに形容されている「名誉法」というものはどういう位置にあるのだろうか。現代との対比をあえて試みるとすれば、「判例（法）は制定法の生きた声」とでもなつてこよう。成文の実定法システムを備えている日本においてさえも、裁判官が現場で無限に生みだしていく判例（判決例）は、制定法・成文法に対してさまざまな働きかけを行なっている。ここで、筆者のまったく個人的な表現を用いさせて頂くと、制定法はタテマエであり、判例はホンネということになろう。タテマエとホンネのあいだにはつねにフィードバックが介在するので、両者の距離はしかるべく保たれている。未来社会においては、完璧な制定法が編みだされて、判例は、制定法の手足のような隷属的な地位、ないしはたんなるデータ・ベースの位置におかれることになるかもしれないが、しかし、法というものがもともと対立しあう価値・利害を調整する機能を内にはらんでいる以上、「一点の曇りもない法」などというものはありえない。もしそのような代物がもちだされるとしたら、それは、言ってみれば、「ファシズム的産物」であり、いずれは、崩壊する。そのようなわけで、私たちは、理想の法や、また、理念型にかぎりなく近い法を追求することに執着するよりも、それぞれの状況下でそれなりに法をつくりあげ、それを裁判の場で運用していきながらつねに軌道の修正や微調整をはかる、といったやわらかい対応をすればよい、と思われる。「判例こそ制定法の命である。」といえれば現代の法学者から非難されることは必至であるが、古代ローマの法の動きや流れを観察してきた、ロマニストである筆者には、いわば「ローマの判例法」とも言える名誉法のユニークでかつ合理的な姿が、現代の判例の役割・座標軸を考えてみるさいに、一つのヒントにもなるように思えるのである。

うえに述べたように、ローマの市民法は名誉法と対比される法のジャンルであるが、もう一つの対比も重要である。それは、市民法と万民法の間柄にかんするものである。後者については、つぎのような命題が存在する。

<Jus gentium omni humano generi commune est ; nam, usu exigente, et humanis necessitatibus, gentes humanae quaedam sibi constituerunt.> (I.J.1,2,2)「万民法は、すべての人類に共通である。なぜならば、人間は、使用に迫られ、人間の必要によって、ある[法]を自身のために制定したからである。」「万民法」(jus gentium)というのは、市民法に対立する概念である(「国際法」ではない)。後者が、ローマ市民権を保有する人にも適用されるのに対して、前者は、市民だけではなく、非ローマ市民、つまり、いわゆる外人(たとえばギリシア人)にも適用されることになっている。共和政盛期にローマが世界商業の中心地となると、取引のうえでローマ市民と外人とのあいだにさまざまな関係が生まれるようになるが、そこで生ずる紛争を放置すれば取引の安全は当然害されることになるので、国家としてなんらかの統制を設ける必要が生じてきた。はやくも前242年に、従来から司法に従事していた法務官(市民係法務官)にくわえて、外人係法務官が設置され、それが、外人相互間および市民と外人間の争訟を解決する役割をはたした。ここでは、属人主義原理にのっとり動いているローマ市民法の適用は当然排除されるので、争訟解決にあたって基準となるのは、市民係法務官の場合と同様のパターンで外人係法務官がその責任において指示する取引の慣習・信義誠実の原則だけであった。万民法というのは、結局、外人係法務官の指揮する法廷で、慣習的に生成してきた規範(すなわち裁判慣習法)の総体であり、角度をかえて、法規範の生成過程からみれば、名誉法がほとんどである。その内容について言えば、万民法は、取引の慣行から経験的につくりあげられた取引法を主体とする規範で、家族法・身分法などのローマ古来の慣習を実体とする市民法とは区別される。代表的な制度としてあげられるものに、債務関係を発生させる方式としての諾成契約(売買・賃貸借・雇傭・請負・組合など)や要物契約(消費貸借・寄託・質など)、および、所有権譲渡の方式としての引渡がある。前者は、市民法上の問答契約と対立し、後者は、握取行為や法廷譲渡という市民法上の厳格な要式行為と、対立する。ローマ市民権が後212年にカラカッラ帝によって原則として領内の全住民に拡大されてからは、市民法・万民法という区別は決定的に解消されたが、それ以前にも、万民法規範として形成された各個の制度は、市民法のなかにもとりいれられて、厳格・狭隘な市民法を世界法的・統一法的・普遍的なものと改造していくのに大いに役立った。ストア哲学が、自然法思想の形式で人類の普遍性の理論を用意し、そして、世界国家ローマが万民法の形式でその理念を実現したとみることもできよう。「タテマエ(市民法)とホンネ(名誉法)」→「索引」

<1528> **Jus in re inherit ossibus usufructuarii.** [Jūs in rē in

haerit ossibus ūsūfructūariī.]「物に於ける権利は、用益権者の骨に附着する。」〈inhaeret〉…〈inhaero〉〔へばりつく〕の ㊦ ㊧ ㊨、〈ossibus〉…〈ossis〉〔骨〕の ㊦ ㊧、〈usufructuarii〉…〈usufructuarius〉〔用益権者〕の ㊦ ㊧。

<1529> **Jus monetae comprehenditur regalibus quae nunquam a regio sceptro abdicantur.** [Jūs monētae comprehenditur rēgālibus, quae abdicantur ā scēptrō rēgiō nunquam.] (Dav.Ir.K.B.20)「貨幣〔鑄造〕の権利は、決して国王の笏から切りはなされない、国王の〔権限〕の中に含まれる。」〈monetae〉…〈moneta〉〔貨幣〕の ㊦ ㊧、〈comprehenditur〉…〈comprehendo〉〔つつむ〕の ㊦ ㊧ ㊨ ㊩、〈regalibus〉…〈regalis〉〔国王の〕の ㊦ ㊧ ㊨、〈abdicantur〉…〈abdico〉〔きりはなす〕の ㊦ ㊧ ㊨、〈sceptro〉…〈sceptrum〉〔笏〕の ㊦ ㊧、〈regio〉…〈regius〉〔国王の〕の ㊦ ㊧ ㊨。

<1530> **Jus naturae est immutabile.** [Jūs nātūrae est immūtābile.]「自然の法は不変である。」〈immutabile〉…〈immutabilis〉〔不変の〕の ㊦ ㊧ ㊨。※「自然法」→「索引」

<1531> **Jus naturale est quod apud omnes homines eandem habet potentiam.** [Jūs nātūrale est, quod habet potentiam eandem apud hominēs omnēs.] (Ulp.D.1,1,1,3; 7 Co.Rep.12)「自然法は、すべての人々の下で同じ効力を持つ〔もの〕である。」〈potentiam〉…〈potentia〉〔効力〕の ㊦ ㊧。※「自然法」→「索引」

<1532> **Jus non favet votis delicatorum.** [Jūs nōn favet vōtīs dēlicātōrum.]「法は、甘やかされた〔人々〕の願望に有利な取扱はしない。」〈favet〉…〈faveo〉〔好意をもつ〕の ㊦ ㊧、〈votis〉…〈votum〉〔願望〕の ㊦ ㊧、〈delicatorum〉…〈delicatus〉〔甘やかされた〕の ㊦ ㊧ ㊨ (名略)。<597>・<1677>・<2258>

<1533> **Jus non habenti tuto non paretur.** [Nōn pārētur nōn habentī jūs tūtō.] (Paul.D.2,1,20; Hob.146)「権利を持たない〔人〕に従わなくても、安全である。」〈paretur〉…〈pareo〉〔したがう〕の ㊦ ㊧ ㊨、〈habenti〉…〈habeo〉〔もつ〕の ㊦ ㊧、〈habens〉の ㊦ ㊧ ㊨ (名略)。※〈tuto〉は文章全体にかかる副詞である。「〈frustra〉系のもの」→「索引」、「自動詞の受動相」→「索引」。

<1534> **Jus non patitur ut idem bis solvatur.** [Jūs nōn patitur, ut idem solvātur bis.] (Gai.D.50,17,57)「法は、同一の〔もの〕が再度弁済されることを許さない。」〈patitur〉… ㊦ 〈patior〉〔許す〕の ㊦ ㊧ ㊨ (㊦)。

<1535> **Jus nostrum non patitur eundem in paganis et testat**

o et intestato decessisse. [Jūs nostrum nōn patitur eundem in pagānīs dēcessisse, et tēstātō et intēstātō.] (*Pomp.D.50,17,7*) 「私たちの法は、[軍人ではない]民間人の場合、同一[人]が同時に遺言して、同時に無遺言で、死亡してしまっている、というようなことを認めない。」<patitur>…㊦<patior> [認める] の ㊦㊧㊨ (㊦)、<paganis>…<paganus> [一般市民] の ㊦㊧、<decessisse>…<decedo> [死ぬ] の ㊦㊧、<testato>…<testatus> [遺言した] に由来する ㊦、<intestato>…<intestatus> [無遺言の] に由来する ㊦。※対格不定法の構文が見える。対格形の<eundem>は、主語として、<decessisse>にかかる。㊦㊧→<35>。<et ~ et>は相関語である。ここには直接には言及されていないが、ローマの軍人(兵士)については、しだいに、彼らを保護する規定が生みだされていった。市民兵ではなくて、職業軍人(その勤務年数は数十年にもおよぶ)が軍隊の中核をになうようになると、彼らの法的処遇は当然のことながら、変化してくる。

<1536> **Jus nullo continetur loco.** [Jūs continētur locō nūllō.] 「法はいかなる場所にも制限されない。」<continetur>…<contineo> [たもつ] の ㊦㊧㊨ (㊦)。

<1537> **Jus omne supra omnem positum est injuriam.** [Jūs omne est positum suprā injūriam omnem.] (*Syr.416*) 「法は、すべて、あらゆる不法の上へ置かれた。」<positum>…<pono> [おく] の ㊦㊧<positus>の ㊦㊧㊨ (受動相完了の構成要素)。

<1538> **Jus omnium in omnia, et consequenter bellum omnium in omnes.** [Jūs omnium in omnia, et cōnsequenter bellum omnium in omnēs.] (*Hobbes*) 「すべての[こと]に対するすべての[人]の権利、そして、[その]帰結として、すべての[人]に対するすべての[人]の戦争」<bellum>…「戦争」。※<omnium>は、複数男性属格の形と、その女性・中性の形とで同じであるが、ここでは意味のうえから男性の形とした。この命題のうち<Bellum omnium in omnes.>のところが有名で、ふつう、「万人の万人に対する戦い」と訳されている。

<1539> **Jus posterius derogat priori.** [Jūs posterius dērōgat priorī.] (*Mod.D.50,16,102*) 「(いっそう)後の法は(いっそう)前の[法]を部分的に廃止する。」<derogat>…<derogo> [部分的に廃止する] の ㊦㊧㊨ (㊦)。※「前と後」→「索引」。<1688>

<1540> **Jus praetorium est, quod praetores introduxerunt adjuvandi vel supplendi vel corrigendi juris civilis gratia propter utilitatem publicam.** [Jūs praetōrium est, quod praetōrēs intrōdūxērunt adjuvandī vel supplendī vel corrigendī jūris civilis gratia propter utilitatem publicam.] 「法は、すべて、あらゆる不法の上へ置かれた。」<positum>…<pono> [おく] の ㊦㊧<positus>の ㊦㊧㊨ (受動相完了の構成要素)。

iā propter ūtilitātem pūblicam.] (*Pap.D.1,1,7,1*) 「法務官法は、法務官が、公けの利益を図る目的で、市民法を、補足し、あるいは補充し、あるいは修正するために導入した [もの] である。」 <praetorium>…<praetorius> [法務官の] の 𐌱𐌹𐌺𐌹、<praetores>…<praetor> [法務官] の 𐌱𐌹𐌺、<introduxerunt>…<introduco> [導入する] の 𐌹𐌺𐌹𐌺、<adjuvandi>…<adjuvo> [助ける] の 𐌹𐌺𐌹𐌺<adjuvandus> [助けられるべき [である]] の 𐌹𐌺𐌹𐌺、<supplendi>…<suppleo> [補充する] の 𐌹𐌺𐌹𐌺<supplendus> [補充されるべき [である]] の 𐌹𐌺𐌹𐌺、<corrigendi>…<corriigo> [正す] の 𐌹𐌺𐌹𐌺<corrigendus> [正されるべき [である]] の 𐌹𐌺𐌹𐌺、<utilitatem>…<utilitas> [利益] の 𐌹𐌺𐌹。 ※ 𐌹𐌺𐌹𐌺→<1>。<adjuvandi>・<supplendi>・<corrigendi>という動形容詞は、動名詞に変換して、「～すること」と訳す必要がある。「動形容詞と動名詞の密接な関係」→<153>

動名詞については、<153>ですでに解説したが、ここで補足をしておこう。これは、動詞的名詞なので、動詞本来の資格でもって、目的語(対格)をちゃんととることができる。実例を見てみよう。<spatium arma capiendi>というのは、「武器をとることの余裕(は・を)」の意味の言葉である。<arma> [武器を] は、複数形の名詞で、この場合は対格であるが、めんどろなことに、主格も同形である。法律ラテン語には中性名詞がかなり多いが、この性の名詞の場合、主格と対格が同形となるので、見分けをすばやくやっけてしまわなければならない。『新ラテン文法』§78を参照。つぎの<capiendi>は、「とることの：<capio> [とる] の動名詞<capiendum>の属格(単数)」であり、これらが組みあわさって、「武器をとることの」というようにして、前へとつながっていく。一方、<spatium> [余裕] は、単数主格にも対格にもある形なので、これは、<capio>という他動詞がとる目的語にもなりうるが、意味から考えて、こちらの方を<capio>とストレートにはつながない読みかたになってくる。ところで、一般的なルールによると、動名詞と動形容詞とのあいだには、深い、ねっとりとした関係があって、属格、与格、前置詞をともなう場合の対格、そして奪格のところでは、動形容詞が動名詞のかわりをつとめることになっている(もちろん、本来の表現と変換された表現とのあいだには、微妙なニュアンスの差はあるが)、『新ラテン文法』§591・§594参照。ここのところを、「タテマエでは動形容詞、ホンネでは動名詞」の表現スタイル、と表現しておこう。そのルールによると、属格(「武器をとることの」)の構文になっているこの場合には、本来なら、複数の属格形の<armorum capiendorum> [とられる(べき)武器の] という表現となってくるはずであるが、文体の美学からすると、<orum>のつづくこの言いまわしは、いかにも重苦しくて、不適切である、と考えられて、あえてシンプルな動名詞的表現がそのまま用いられて

いるのである。他方で、<spatium consilium habendi>の例となると、<consilium> [計画を：主格も同形である]と<habendi> [たてることの：<habeo> [たてる]の動名詞<habendum>の属格（単数）]が組みあわさって、「計略をたてることの」というように前へつながっていく。ところで、語順の自由なラテン語では、<habeo>という動詞の目的語となるのは、本来の<consilium>だけではない。<spatium>にもその可能性は存在する。こういったあいまいな点をすっきりさせるためもあって（他にもいろいろと要因はあるが）、<consilium habendi> [計画をたてることの]のところを、動形容詞的表現の<consilii habendi> [たてられる（べき）計画の]というように表現される方法が選ばれるのである。もっとも、たまたまこの単数形のケースでは、<habendi>が動名詞と動形容詞で同形になってしまうので、もやもやしたところはなお残るが、それでも少しは文体にメリハリがきいてくることはたしかである。そのようなわけで、動名詞の代用物としての動形容詞には、「べきである」といった、ねばっこいニュアンスはない（ちなみに、日本語の「べき」にも、そういった軽いつなぎの語感が隠れているように筆者個人にも感じられる）。ところで、さきのような動形容詞と動名詞間の変換の技法についてであるが、日本語にも、漢語調の表現のなかには、変換という点にかんして部分的に似たものがある。筆者の卒業した大山崎小学校（あの天下分け目の激戦がくりひろげられた、京都郊外の天王山の麓にある）の校歌には、「ひもとく書ツキの楽しさよ」という一節があるが、小学生の頭のなかでも、これは「書をひもとくことの楽しさよ」という意味に自然に変換されていたのではなかろうか。また、ラテン語で、<ab urbe condita> (A.U.C) と言えば、「建設された町（ローマ）から（算えて～年目）」が直訳であるが（<ab>は「から」を意味する前置詞、<urbe>は<urbs> [町]の単数奪格、<condita>は、<condo> [建設する]の完了分詞<conditus>の単数女性奪格）、その意味するところは、「町の建設から」とか「建都以来」である。同じようにして、<ante Christum natum>を、「生まれたキリストの前に」ではなくて、「キリスト生誕前＝紀元前」と読むのがむしろふつうである。<ante>は「前に」を意味する前置詞で、<Christum>は<Christus> [キリスト]の対格（単数）、<natum>はデーポーネンティア動詞<nascor> [生まれる]の完了分詞<natus>の単数男性対格）である。これらの表現にはもちろん動名詞は含まれておらず、話はまったくちがうのであるが、訳出するさいに頭をきりかえる作業が求められる、という点では同じことなのである。現に、独語でも、<während bestehender Gesellschaft>のくだりを、「存続している組合のあいだに」と直訳する人などなく、「組合が存続しているあいだに」と変換していくのが通例のテクニックとなっている。このあたりの変換の技術は、私たちが親しん

でいる、英語の分詞構文のテクニックを用いれば、自然になつとくできるものではなからうか。文法理論からは、むずかしい説明もできるが、要は、直感とか感覚とかで、その場にあった訳をつむぎだせばよいのである。「言葉の切りわけ」→「索引」

実は、このような変換効果を内蔵している有名なフレーズがある。〈*de lege ferenda*〉[立法論]がこれであるが、よく似たタイプの日本語訳である〈*de lege lata*〉[解釈論]とはまったく構造がちがっているのも、面白い。前者は、先のルールにのっとって動形容詞じたてになっているのであるが(動名詞仕立てなら〈*de legem ferendo*〉)、〈*fero*〉[提案する]の動形容詞〈*ferendus*〉が〈*lex*〉[法律]にかかり、しかも、〈*lex*〉とともに奪格支配の前置詞〈*de*〉[～にかんして]の支配をうける関係で、単数女性奪格に展開し、〈*ferenda*〉となるのである。そこで、「べき」という重苦しい表現はカットして、「提案される(べき)法律(にかんして)」とひとまず訳しておき、さらに、動名詞風に、「法律を提案すること(にかんして)」へと進めばよい。〈*de*〉は、仏語の〈*de*〉と同じように、日本語の「～論」に相当するので、最終的には、「立法論」となる。なお、さきの〈*de lege lata*〉は、〈*fero*〉の完了分詞〈*latus*〉の単数女性奪格の〈*lata*〉が〈*lege*〉にただかかっているだけの素直な表現であり、直訳は「提案され[～制定され]た法律にかんする(論議)」、「解釈論」となる。

それでは、さらにすすんで、頭の体操(「脳トレ」?)のためにとびきりむずかしい用例をお目につけよう。〈*tres viri rei publicae constituendae*〉は、「国家再建のための三人官」となるが、要注意ポイントが三つもある。まず、〈*tres viri*〉[三人官]中の〈*viri*〉は、『新ラテン文法』§895の変化表からも知られるように、〈*vir*〉[男]の単数属格と複数主格のところにある(「辞書」の解説には、〈*vir, viri*〉とあるが、あとの〈*viri*〉は単数属格の方である)、これは主格と理解しておくのがまずふつうである。つぎに、〈*rei publicae*〉という、名詞と形容詞の組合せには、単数属格とその与格の二つがある。したがって、〈*publicus*〉[公けの]の一変化である〈*publicae*〉と〈*res*〉の一変化である〈*rei*〉とが組みあわさった概念である「公けの物＝国家」(英語の〈*Republic*〉=〈*common wealth・public thing*〉と関係がある)系の変化形の訳は、日本人の感覚からすると、「国家の」という属格読みになってくるように思えるが、正解は、単数属格のペアではなくて、単数与格のペアである。いわゆる「目的の与格」の用例として、「国家のための」と訳さなければならない。最後は問題の変換作業のフォローである。〈*constituo*〉[つくる]に由来する〈*constituendum*〉[つくること]という動名詞の与格(単数)形の〈*constituendo*〉のところは、〈*constituendus*〉「つくられるべき[である]」という動形容詞が単数女性与格

に展開した形である<constituendae>へときりかわり、形容詞として<rei publicae>にかかっていく、というプロセスになっているので、読み解きのさいには、そのプロセスを逆もどしするわけである。本来なら、<constituo> [つくる] という動詞は<rem publicam>という対格を要求しているわけなので、ここでは、主従の関係が逆転して、もともと客体にすぎない<res publica> [国家] が<constituo>という動詞に由来する動形容詞に自身を修飾させる、というかっこうになるのである。

ところで、さきの与格のかもしれないニュアンスは、「国家再建担当三人官」というように、目的や任務を示す「担当」という言葉を用いることによって、漢語調の、しまった表現になるが、ここを、ためしに、前置詞を駆使した近代欧米語的スタイルの表現にひきなおすなら、前置詞<ad> [～の方へ・をめざした] を用いて、<ad rem publicam constituendam> [つくられる (べき) 国家のための] となる。<ad>は対格を支配する関係で、<rem publicam>という対格がくる。ここを本来の動名詞表現にひきなおすと、<ad constituendum rem publicam>「国家をつくることのための」となる。<constituendum>は動名詞の対格 (単数) である。後者の、動名詞を中核にすえた表現の方がおそらく日本人には親しみやすいと思われるのであるが、動形容詞を変化させて<rem publicam>にかけていく前の方がラテン語風の表現なのであって、これに親しんで頂くほかはない。ついでに、動名詞的表現と動形容詞的表現がたまたま同形になってしまう、やっかいな例を見て頂こう。<ad pontem faciendum> [橋を架けるのに＝架橋に] では、<pons> [橋] が男性名詞であるために、動形容詞の単数 (男性) 対格が、動名詞の対格形 (単数) である<faciendum>と同じ形になってしまうからである。もっとも、前置詞 (ほとんどの場合、この<ad>) とセットになって登場するものについては、動形容詞の方が用いられることがふつうである。「動形容詞と動名詞の密接な関係」→「索引」

ついでに、話を脱線させて、もう一つ、ラテン語らしい表現にふれておこう。これに対処するさいには、今までの話とはちがった意味で、頭のきりかえをやる必要がでてくるのである。<summum jus>は、ふつう、「最高の法 (正義)」のことであり、<summum>は<superus> [上の] の最上級<summus>の単数中性主格で、<jus> [法 (正義)] にかかる。しかし、<summus mons>は「<mons> [山] のうちで最高の高さを誇っているもの」ではなくて、たんに「山の頂」のことである (それなら<cacumen montis>とすればよいのであるが、これでは、むしろ、欧米近代語流になってしまって、面白くない)。もっとも、<summus>を、「最高の」ではなくて「最高の部分・部位の」というように少し言葉を補ってとらえてみれば、べつに変換という大げさな考えをもちださなくてもよいが。「真中の<medius>」

→「索引」

さらに、「完了分詞の訳しかた」ということで話を展開させていくと、<crimen laesae majestatis>を訳すさいにも、私たちは、一種の変換を無意識に実行している。つまり、<laesae>は、<laedo> [傷つける] の完了分詞<laesus>の単数女性属格で、<majestas> [尊厳] の単数属格である<majestatis>にかかっているの、直訳すれば、「傷つけられた尊厳の」となり、前の<crimen> [犯罪] につながっていくのであるが、日本語としては、「傷つけられた尊厳の罪」ではなくて、「(国家の) 尊厳を傷つける [という] 罪 = 反逆罪・大逆罪」となってくる。裁判とか犯罪にかんする表現では属格がよく登場してくるので、その線からこの現象を説明するやりかたもあるだろうが、ここでは、ひとまず一般的な変換作業の一例として解説しておくことにする。「分詞の訳しかた」→<55>・「索引」

本題に戻るが、ここに見える「法務官」というのは、一年任期の政務官(行政官=政治家)である。彼ら二名は、法律についてはかならずしも精通しているわけではないが(日本の法務大臣についても状況は似たようなものである)、しかし、私人としての法学者の助けをかりて、司法を運用した。さらに言うと、法そのものを運用した。このあたりのところを法格言の表現にあてはめて表現してみよう。まず、「[市民法を] 補足する」というのは、法務官が市民法の目指すところを自身のイニシヤティブによって実現することであるが、実は、これは、市民法の制度をそのまま実務で具体化していくルートと重なりあう。このときなぜ名誉法ルートが登場してくるのか、と云えば、それは、これの方が、司法現場でむしろ使い勝手がよいからである。つぎに、「補充する」というのは、市民法の規定に頼るだけでは不都合が生じてしまうときに、法務官が適宜補充を行なうケースを指す。ところで、名誉法上の制度が、市民法上の、いわば正統の制度と拮抗するほど強力な地位を確立した実例として、以下の二つの場合がある。一つは、市民法上の「所有権」と名誉法上の「財産帰属性 (in bonis esse=財産のなかにあること)」との対立のケースで、名誉法により法務官の手で守られている人は、市民法上の所有権者にも事実上対抗できるような安定した地位をもつ。他は、市民法上の「相続」と名誉法上の「遺産占有」との対立のケースで、その遺産占有者は、相続人ではないが、「相続人の地位にある」人として、相続人に対しても保護される。つまり、タテマエ上両者は明確に区別されているが、ホンネ上は両者は同じようなものであり、しかも現場担当者である法務官によって支えられているだけに、名誉法系のラインにあるものの方が実際には強力である。それで、さきの「補充する」場合について、この遺産占有の構造をあてはめてみると、市民法上相続人が存在しないような事態が生じたときにも、法務官は、諸般の事情を考慮

して、誰かに遺産占有を与える。そして、もっともドラステックなのは、市民法上でレッキとした相続人が存在するにもかかわらず、法務官個人が、正規の相続がその法にもとづいて発生するのを不衡平と考えたとき、その相続人の相続財産請求の訴えに十分対抗できるようにして遺産相続を誰か他人に付与してしまうケースである。これが市民法を「修正する」ことの中味である。

<1541> **Jus privatum sub tutela juris publici latet.** [Jūs privātum latet sub tūtēlā jūris pūblicī.] (Francis Bacon, De Dig. Et Arg. 8, 3.) 「私法は、公法の庇護の下に隠れている。」<latet>…<lateo> [隠れる] の 𐀀𐀁𐀂、<tutela>…<tutela> [庇護] の 𐀀𐀁。※<sub>は、この場合、対格ではなく、与格を支配する。[O] 部門Ⅱ—p.46。「公と私」→「索引」、「タテマエ（公）とホンネ（私）」→「索引」。

<1542> **Jus publicum et privatum est quod ex naturalibus praeceptis, aut gentium, aut civilibus est collectum, et quod in jure scripto jus appellatur, id in lege Angliae rectum esse dicitur.** [Jūs pūblicum et privātum est, quod est collectum ex praeceptis nātūrālibus, aut gentium aut cīvīlibus, et id, quod appellātur jūs in jūre scrīptō, dīcitur esse rēctum in lēge Angliae.] (Co. Litt. 158B) 「公法および私法は、あるいは国家 [関係] の、あるいは国内の [問題に関する] 自然の原理から集められた [もの] である。そして、成文の法 (ローマ法) に於いて <jus> と呼ばれるものは、イギリスの法では <rectum> であると言われる。」<collectum>…<colligo> [集める] の 𐀀𐀁<collectus> の 𐀀𐀁𐀂 (受動相完了の構成要素)、<praeceptis>…<praeceptum> [掟] の 𐀀𐀁、<gentium>…<gens> [民族] の 𐀀𐀁、<appellatur>…<appello> [よぶ] の 𐀀𐀁𐀂、<scripto>…<scribo> [書く] の 𐀀𐀁<scriptus> の 𐀀𐀁、<rectum>…「法」、<Angliae>…<Anglia> [イギリス] の 𐀀𐀁。※主格不定法の構文が見える。<id>は、主語として、<dicitur> と <esse> の双方にかかる。𐀀𐀁→<98>、「自然」→「索引」、「公と私」→「索引」、「タテマエ（公）とホンネ（私）」→「索引」。

<1543> **Jus publicum privatorum pactis mutari non potest.** [Jūs pūblicum nōn potest mūtārī pactīs privātōrum.] (Pap. D. 2, 14, 38) 「公けの法は、私 [人] の合意に依って変更されることは出来ない。」<mutari>…<mutō> [変更する] の 𐀀𐀁。※この場合の <jus publicum> [公けの法] というのは、市民の意思の表現・反映として、全市民を拘束する法のことを指し、質権・使用取得・奴隷解放・後見・相続にかんする規定のような私法的な内容のものも、それにかぞえられる。したがって、これは、「公益法」・「強行法」という意味にもなってくる。このほかに、当時は

それほど重要性をもたなかったが、<2763><Publicum jus est, quod ad statum rei Romanae spectat; privatum, quod ad singulorum utilitatem.>「公法は、ローマの国家の〔地位〕に係する〔もの〕であり、他方で、私〔法〕とは、個〔人〕の利益に〔係するもの〕〔である〕。」という、近代の語法と直接つながる用法も見えている。後者の意味で用いるならば、ローマでは、法源において私法の占める割合が圧倒的に高く、法学者が取扱うのもほとんど私法領域に係する問題であった（『学説彙纂』全五〇巻のうち第一巻第二章から第四七巻までが私法を取扱う）。その原因としては、ローマ公法の基本法典というものが存在せず（ローマは、全体としては、不文憲法の国家であった、と言ってよい）、しかも、政治と密接にからみあう公法の領域に法学者があまり手を出したがいなかったこと、技術的・専門的な性格の強い私法に比べて公法は比較的取扱いやすかったこと、その分野では法学者の専門的知識がそれほど要求されなかったこと、などがあげられようか。なお、ゲルマン法の場合には、中世においてもまだ公法・私法の区別が十分には確立していなかった、とされている。ごく一般的に見れば、ローマの発展とともに、従来は未分化のまま私法の領域において取扱われてきた公的な分野が、しだいに公法の領域にとりこまれていく過程が認められる。いわゆる不法行為として私法上制裁をうけていた侵害行為が国家的処罰の対象となっていく過程や、国家権力による裁判の完全な掌握がその一例である。「公と私」→「索引」、「タテマエ（公）とホンネ（私）」→「索引」。<2705>

<1544> **Jus quo universitates utuntur est idem quod habent privati.** [Jūs, quō ūniversitātēs ūtuntur, est idem, quod prīvātī habent.] (Foster v. Essex Bank, 10 Mass. 265, 8 Am Dec. 135) 「法人が用いる法は、私〔人〕が持っているものと同一である。」<universitates>…<universitas>〔法人〕の 𐌶𐌹𐌺𐌹。※<idem ~, quod>は<idem ~, qui>系の相関語である。

<1545> **Jus respicit aequitatem.** [Jūs rēspicit aequitātem.] (Co. Litt. 24b; Broom, Max. 151; A. B. 392) 「法は衡平を尊重する。」<respicit>…<respicio>〔尊重する〕の 𐌶𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹。※「法と衡平」→「索引」、「タテマエ（法律（法））とホンネ（衡平）」→「索引」

<1546> **Jus Romanum allegans fundatam habet intentionem.** [Allēgāns jūs Rōmānum habet intentiōnem fundatam.] 「ローマ法を援用する〔人〕は、確定的な請求を持つ。」<allegans>…<allego>〔のべる〕の見出し語 𐌶𐌹𐌺𐌹(名略)、<Romanum>…<Romanus>〔ローマの〕の 𐌶𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹、<intentionem>…<intentio>〔請求〕の 𐌶𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹、<fundatam>…<fundatus>〔確定された〕の 𐌶𐌹𐌺𐌹𐌺𐌹。

<1547> **Jus sanguinis, quod in legitimis successioneibus spectatur, ipso nativitatis tempore quaesitum est.** [Jūs, quod spectatur in succēssiōnibus lēgitimis, sanguinis est quaesitum tempore ipsō nātivitātis.] 「法定相続に於いて考慮される、血族の権利は、出生の時点それ自体において獲得された。」<spectatur>…<specto> [考慮する] の 𐀓𐀕𐀓𐀕、<successioneibus>…<successio> [相続] の 𐀓𐀕𐀓𐀕、<sanguinis>…<sanguis> [血] の 𐀓𐀕𐀓𐀕、<quaesitum>…<quaero> [手にいれる] の 𐀓𐀕𐀓𐀕<quaesitus>の 𐀓𐀕𐀓𐀕(受動相完了の構成要素)、<nativitatis>…<nativitas> [出生] の 𐀓𐀕𐀓𐀕。

<1548> **Jus silent inter arma.** [Jūs silent inter arma.] 「法は武器の間では沈黙する。」<silent>…<sileo> [沈黙する] の 𐀓𐀕𐀓𐀕、<arma>…<arma> [武器] (複数形) の 𐀓𐀕。※いわゆる「クー・デター」や「戒厳令発布」のさいに、既存の法システムがどの程度まで棚あげにされるのかは、国によって、また、ケースによって、かなり異なる。実際のところ、法が沈黙していても、心ある人々からはそれが尊重されることもある。「法と武器」→「索引」、「タテマエ(法律(法))とホンネ(武器)」→「索引」。

<1548bis> **Jus soli sequitur aedificium.** [Aedificium sequitur jus soli.] 「建物は土地の権利に従う。」<aedificium>…「建物」。

<1549> **Jus summum saepe summa est malitia.** [Jūs summum est malitia summa saepe.] (Ter.Heaut.4,5,48) 「極度の正しさはしばしば極度の悪である。」<malitia>…「邪悪」。※「正と悪」→「索引」

<1550> **Jus superveniens auctori accrescit successori.** [Jus superveniēns auctōrī accrēscit succēssōrī.] (Halk.Max.76) 「前主に生じてくる権利は、承継者に添加する。」<superveniens>…<supervenio> [不意にくる] の 𐀓𐀕𐀓𐀕<superveniens>の 𐀓𐀕𐀓𐀕、<auctori>…<auctor> [前主] の 𐀓𐀕、<accrescit>…<accresco> [添加する] の 𐀓𐀕𐀓𐀕、<successori>…<successor> [承継者] の 𐀓𐀕𐀓𐀕。

<1551> **Jus testamentorum pertinet ordinario.** [Jūs tēstāmētōrum pertinet ōrdināriō.] (Yearb.4 Hen.7,13b) 「遺言の権利は教会裁判権保有者に所属する。」<pertinet>…<pertineo> [かかわる] の 𐀓𐀕𐀓𐀕、<ordinario>…<ordinarius> [教会裁判権保有者] の 𐀓𐀕𐀓𐀕。

<1552> **Jus vendit quod usus approbavit.** [Jūs vēndit, quod ūsus approbāvit.] (Ellesm.Post.N.35) 「法は、慣習が是認した [ものを] 勧める。」<vendit>…<vendo> [すすめる] の 𐀓𐀕𐀓𐀕、<approbavit>…<approbo> [是認する] の 𐀓𐀕𐀓𐀕。※「法と慣習」→「索引」、「タテマエ(法)とホンネ(慣習)」→「索引」

<1552bis> **Jusjurandum in locum solutionis succedit.** [Jūsjurā

ndum succēdit in locum solūtiōnis.]「宣誓は弁済に代わる。」<jusjurandum>…「宣誓」、<succedit>…<succedo> [うけつぐ] の ㊦㊧㊨、

<1553> **Jusjurandum inter alios factum nec nocere nec prodesse debet.** [Jūsjurandum factum inter aliōs dēbet nec nocēre nec prōdesse.] (*Ulp.D.12,2,3,3*; 4 *Co.Litt.279*)「他の [人々] の間でなされた宣誓は、[人々を] 害することも [人々に] 利益となることも在ってはならない。」<jusjurandum>…「宣誓」、<nocere>…<noceo> [害する] の ㊦㊧、<prodesse>…<prosum> [役だつ] の ㊦㊧。※<nec ~ nec>は相関語である。

<1554> **Justa atque injusta audire magistratum decet.** [Decet magistrātum audire jūsta atque injūsta.] (*Syr.417*)「官吏(政務官)が公正な [こと] と不公正な [こと] を聴き [わかる] のは、[その地位に] ふさわしい。」<decet>…<deceo> [ふさわしい] の ㊦㊧㊨、<magistratum>…<magistratus> [政務官] の ㊦㊧、<audire>…<audio> [聴く] の ㊦㊧、<injusta>…<injustus> [不公正な] の ㊦㊧㊨ (名略)。※<decet>にひかれた対格不定法の構文が見える。対格形の<magistratum>は、意味上の主語として、<audire>にかかる。㊦㊧→<35>、「公正と不公正」→「索引」。

<1555> **Justae causae facilis est defensio.** [Dēfēnsiō causae jūstae est facilis.] (*Cicero*)「正しい事案の弁護は容易である。」<defensio>…「弁護」、<facilis>…<facilis> [容易な] の ㊦㊧㊨。

<1556> **Juste creditur, quod communiter creditur.** [Quod crēditur commūniter, crēditur jūstē.]「共通に信じられる [ことが] 信じられるのは、正しい。」※<juste>という副詞は全体にかかる。副詞の<frustra>も、同様の働きをする。「<frustra>系のもの」→「索引」

<1557> **Justitia cernitur in suum cuique tribuendo.** [Jūstitia cernitur in tribuendō suum cuique.]「正義は、各人に彼自身の [もの] を配分することの中で認識される。」<cernitur>…<cerno> [認識する] の ㊦㊧㊨、<tribuendo>…<tribuo> [分配する] の ㊦㊧㊨<tribuendum>の ㊦㊧ (㊦㊧)。※ ㊦㊧→<153>。<1540>

<1558> **Justitia consedit in mente.** [Jūstitia cōnsēdit in mente.]「正義は心の中に在った。」<consedit>…<consideo> [すわる] の ㊦㊧㊨、<mente>…<mens> [心] の ㊦㊧㊨。

<1559> **Justitia debet esse libera, quia nihil iniquius venali justitia; plena, quia justitia non debet claudicare; et celeris, quia dilatio est quaedam negatio.** [Jūstitia dēbet esse lībera, quia nihil iniquius jūstitiā vēnālī; plēna, quia jūstitia nōn dēbet claudicāre; et celeris, quia dilātiō est negātiō quaedam.] (2 *Co.*

Inst.56)「裁判は〔金銭から〕自由でなければならない。なぜならば、売りものになる裁判よりもいっそう不衡平なものは、なんら〔存在し〕ないからである。〔また〕それは完全で〔なければならない〕。なぜならば、裁判が欠陥を持つものであってはならないからである。また、それは迅速で〔なければならない〕。なぜならば、〔裁判の〕遅延はある〔種の〕拒絶であるからである。」〈libera〉…〈liber〉〔自由な〕の 𐌶𐌹𐌸𐌰、〈iniquius〉…〈iniquus〉〔不衡平な〕の 𐌶𐌹𐌸𐌰𐌶𐌹𐌸𐌰、〈venali〉…〈venalis〉〔売りものの〕の 𐌶𐌹𐌸𐌰𐌶𐌹𐌸𐌰 (「比較の奪格」、〈plena〉…〈plenus〉〔完全な〕の 𐌶𐌹𐌸𐌰𐌶𐌹𐌸𐌰、〈claudicare〉…〈claudico〉〔不完全である〕の 𐌶𐌹𐌸𐌰𐌶𐌹𐌸𐌰、〈celeris〉…〈celer〉〔速い〕の 𐌶𐌹𐌸𐌰𐌶𐌹𐌸𐌰、〈dilatio〉…「遅延」、〈negatio〉…「拒絶」。※「比較の奪格」→「索引」

<1560> **Justitia erga inferiores verissima.** [Jūstitia ergā inferiōrēs vērissima.]「比較的低い地位の〔人々〕に対する正義は、最も真実のもの〔である。〕」〈verissima〉…〈verus〉〔真の〕の 𐌶𐌹𐌸𐌰𐌶𐌹𐌸𐌰𐌶𐌹𐌸𐌰の 𐌶𐌹𐌸𐌰𐌶𐌹𐌸𐌰。

<1561> **Justitia est constans et perpetua voluntas jus suum cuique tribuendi.** [Jūstitia est voluntās cōstāns et perpetua tribuendī jūs suum cuique.] (*Ulp.D.1,1,10pr. ; I.J.1,1pr.*)「正義は、各人に彼自身の権利を配分する、恒常的でそして永続的な意思である。」〈constans〉…〈constans〉〔恒常的な〕の 𐌶𐌹𐌸𐌰𐌶𐌹𐌸𐌰、〈perpetua〉…〈perpetuus〉〔永続的な〕の 𐌶𐌹𐌸𐌰𐌶𐌹𐌸𐌰、〈tribuendi〉…〈tribuo〉〔配分する〕の 𐌶𐌹𐌸𐌰𐌶𐌹𐌸𐌰𐌶𐌹𐌸𐌰の 𐌶𐌹𐌸𐌰 (𐌶𐌹𐌸𐌰)。※ 𐌶𐌹𐌸𐌰𐌶𐌹𐌸𐌰→<153>。<1101>・<1501>・<3517>・<3518>

<1562> **Justitia est duplex; severe puniens et vere praeveniens.** [Jūstitia est duplex; pūniēns sevērē et praeveniēns vērē.] (3 Co.Inst.Epil.)「正義は、厳しく罰するものと、正しく予防するもの、と、いうように、二重のものである。」〈duplex〉…〈duplex〉〔二重の〕の 𐌶𐌹𐌸𐌰𐌶𐌹𐌸𐌰、〈puniens〉…〈punio〉〔罰する〕の 𐌶𐌹𐌸𐌰𐌶𐌹𐌸𐌰𐌶𐌹𐌸𐌰の 𐌶𐌹𐌸𐌰𐌶𐌹𐌸𐌰、〈praeveniens〉…〈praevenio〉〔さきにくる〕の 𐌶𐌹𐌸𐌰𐌶𐌹𐌸𐌰𐌶𐌹𐌸𐌰の 𐌶𐌹𐌸𐌰𐌶𐌹𐌸𐌰。※現在分詞の〈puniens〉と〈praeveniens〉とは、ふつうの形容詞と同じようにして、英語のいわゆる〈be〉動詞である〈sum〉の変化形とあわせて、述語的に用いられている。こういった表現方法は、モダンな感じもするものであるが、ラテン語では比較的めずらしい部類に属する。現在分詞の場合、「～しているところの」というように、名詞などにかかっているのがむしろ原則だからである。

<1563> **Justitia est fundamentum regnorum.** [Jūstitia est fundamentum rēgnōrum.]「正義は国家の基礎である。」〈fundamentum〉…「基

礎」、<regnum>…<regnum> [国家] の 𠄎𠄎。

<1564> **Justitia est obtemperatio scriptis legibus.** [Jūstītia est obtemperātiō lēgibus scrīptīs.] (Cic. De Leg.1,15,42)「正義は成文法の遵守である。」<obtemperatio>…「服従」、<scriptis>…<scribo> [書く] の 𠄎𠄎<scriptus>の 𠄎𠄎。

<1565> **Justitia est virtus excellens et altissimo complacens.** [Jūstītia est virtūs excellēns et complacēns altissimō.] (4 Co.Inst.58(28))「正義は、卓越した徳であり、そして極めて高い [もの] (神) に気に入られるものである。」<virtus>…「勇気」、<excellens>…<excellens> [優れた] の 𠄎𠄎、<complacens>…<complaceo> [気に入る] の 𠄎𠄎<complacens>の 𠄎𠄎、<altissimo>…<altus> [高い] の 𠄎<altissimus>の 𠄎 (名略)。

<1566> **Justitia firmatur solium.** [Solium firmātur jūstītiā.] (3 Inst.140)「王座は正義に依って強固にされる。」<solium>…「王座」、<firmatur>…<firmo> [かためる] の 𠄎𠄎。

<1567> **Justitia nemini neganda est.** [Jūstītia est neganda nēminī.] (Jenk.Cent.178)「正義は誰にも拒まれるべきではない。」<neganda>…<nego> [拒む] の 𠄎𠄎<negandus> [拒否されるべき [である]] の 𠄎𠄎。※動詞が省略されている。 𠄎𠄎→<1>

<1568> **Justitia non debet claudicare.** [Jūstītia nōn dēbet claudicāre.]「正義は欠けてはならない。」<claudicare>…<claudio> [不完全である] の 𠄎𠄎。

<1569> **Justitia non est neganda, non differenda.** [Jūstītia nōn est neganda, nōn differenda.] (Jenk.Cent.76,93)「正義は拒まれるべきではなく、[また] 引きのばされるべきで [も] ない。」<neganda>…<nego> [拒む] の 𠄎𠄎<negandus> [拒まれるべき [である]] の 𠄎𠄎、<differenda>…<differo> [ひきのばす] の 𠄎𠄎<differendus> [ひきのばされるべき [である]] の 𠄎𠄎。※<non>のところに<nec> [(～も) ～もない] が入る命題もある。 𠄎𠄎→<1>

<1570> **Justitia non novit patrem nec matrem, solam veritatem spectat justitia.** [Jūstītia nōn nōvit patrem nec mātrem, jūstītia spectat vērītātem sōlam.] (1 Bulst.199)「正義は父も母も知っているはない。正義は真実だけを見る。」<novit>…<nosco> [知る] の 𠄎𠄎、<patrem>…<pater> [父] の 𠄎、<matrem>…<mater>の 𠄎、<spectat>…<specto> [見る] の 𠄎𠄎、<veritatem>…<veritas> [真理] の 𠄎𠄎。※<novit>は、完了形で現在の意味が示される特別の動詞である。『新ラテン文法』§265を参照 (→<275>)。「現在形の意味をもつ完了」→「索引」、

→<303>。<non ~ nec>は関連語である。

<1571> **Justitia sine prudentia multum poterit; sine justitia nihil valebit prudentia.** [Jūstītia poterit sine prūdentīā multum; prūdentia valēbit sine jūstītiā nihil.] (Cic. De Off.2,9,34)「正義は叡智なしに〔でも〕大いに力を持つことであろうが、しかし、叡智は正義なしにはまったく力を持たないだろう。」<prudentia>…<prudentia>[叡智]の ㊦ ㊦。

<1572> **Justitia suum cuique distribuit.** [Jūstītia distribuit suum cuique.] (Cicero)「正義は各人に彼の〔もの〕を配分する。」<distribuit>…<distribuo>[分ける]の ㊦ ㊦。

<1573> **Justitia tanta vis est, ut ne illi quidem, qui maleficio et scelere pascuuntur, possint sine ulla particula justitiae vivere.** [Jūstītia est vīs tanta, ut nē quidem illī, quī pāscuuntur maleficiō et scelere, possint vīvere sine particulā ullā jūstītiāe.] (Cic. De Off.2,11,40)「正義は、悪行や犯罪を生活の手段としているある人々でさえも、正義のなんらかの小部分なしには生きていけないほどの、大きな力である。」<ne ~ quidem>…「～でさえ～ない」、<pascuuntur>… ㊦<pascor>[食べて生きる]の ㊦ ㊦ (㊦)、<maleficio>…<maleficium>[悪行]の ㊦ ㊦、<scelere>…<scelus>[悪事]の ㊦ ㊦、<vivere>…<vivo>[生きる]の ㊦ ㊦、<particula>…<particula>[小部分]の ㊦ ㊦。※<tanta ~, ut>は、<tantus ~, ut>系の関連語である。

<1574> **Justitiae dilatio est quaedam negatio.** [Dilātiō jūstītiāe est negātiō quaedam.]「司法の遅延はある〔種の〕拒絶である。」<dilatatio>…「遅延」、<negatio>…「拒否」。cf.<1240>

<1575> **Justum ab injustis petere insipientia est.** [Petere jūstum ab injūstīs est insipientia.] (Plaut. Amph. Prol.36)「不正な〔人々〕から正しい〔こと〕を求めるのは、愚かなことである。」<petere>…<peto>[求める]の ㊦ ㊦、<insipientia>…「愚鈍」。

<1576> **Justum bellum quibus necessarium et pia arma quibus nulla nisi in armis relinquitur spes.** [Bellum jūstum, quibus necessārium, et arma pia, quibus spēs nūlla relinquitur nisi in armīs.] (Liv.9,1)「戦争は、それが必要なものと成って〔いる〕〔人々にとっては〕、正しいもの〔であり〕、そして、武器〔を取ることは〕、武器の中以外にはなんらの希望も残されていない〔人々にとっては〕、義務的なもの〔である。〕」<bellum>…「戦争」、<necessarium>…<necessarius>[必要な]の ㊦ ㊦ ㊦、<arma>…「武器」(複数形)、<pia>…<pius>[義務に忠実な]の ㊦ ㊦ ㊦、<spes>…「希望」、<relinquitur>…<relinquo>[残

す]の 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎、<armis>…さきの<arma>の 𠄎 (複数形)。※動詞が省略されている。「国際法」→「索引」

<1577> **Justum non est aliquem antenatum mortuum facere bastardum, qui toto tempore vita sua pro legitimo habetur.** [Facere aliquem antenatum, qui habetur pro legitimo tempore totō suā vitā, mortuum bastardum, nōn est jūstum.] (Co.Litt.244; 8 Co.Rep.101)「その生の全時期を通じて嫡出[子]と扱われている、ある年長の人を、その死後に私生子とすることは、公正ではない。」<antenatum>…<antenatus> [さきに生まれた者]の 𠄎 𠄎、<mortuum>…<mortuus> [死んだ]の 𠄎 𠄎 𠄎、<vita>…<vita> [人生]の 𠄎 𠄎、<bastardum>…<bastardus> [私生子]の 𠄎 𠄎。※<mortuus>という 𠄎 𠄎 の訳しかた→<55>・「索引」。<aliquem>と<antenatum mortuum>は直接には結びつけられない。「言葉の切りわけ」→「索引」

<1578> **Justum pretium est, quanti res venire potuit.** [Prētium jūstum est, quanti rēs potuit vēnīre.] (Call.D.49,14,3,5)「適正価格は、物が売却出来た限りの価格である。」<pretium>…「代価」、<venire>…<veneo> [売却される]の 𠄎 𠄎。※<venīre>というようにまえの<e>のところが短音になっていると、これは<venio> [くる]の現在不定法である。ちなみに、<veneo>は、<venum> [売却]に由来する<ven>の部分と<eo> [行く]の部分とが結合してできた動詞である。